
魔法少女リリカルなのはStrikerS ~ 漆黒の守護神 ~

RAG

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

魔法少女リリカルなのはStrikers ～漆黒の守護神～

【コード】

N7014M

【作者名】

RAG

【あらすじ】

それは、他の命を守るために管理局に入り、戦い方を教え、導く者の物語。

「漆黒の守護神」と呼ばれ、

「金色の破壊神」と呼ばれ、

そして、「管理局の漆黒き破壊神」と呼ばれた者の物語…

とりあえず主人公は某獅子王さんではないです。オリジナルです。でも話が進むにつれてどんどんガオガイガー分が濃くなっていくと思います。

そんな話でもいいという方に見ていただきたいです。

コメント頂けるとありがたいです。

自分では文のどこが良くてどこが悪いのかわかりませんので・・・

誤字とかもあつたら教えてください。

後、極端に句読点が多くなる場合は改行を多用したりします。

修正した内容とかは活動報告で報告します。

魔法少女リリカルなのはStrikerS 漆黒の守護神 始まり
始

「P V 1 0 / 0 0 0 アクセス突破記念」(前書き)

やあ、また修正なんだ。

内容はかわってないよ

「PV10,000アクセス突破記念」

作者「PV!」

裕樹「10,000!」

なのは「アクセス!」

フェイト「突破!」

はやて「記念!」

一同「今後の計画発表コーナー!」

裕樹「って、いきなり変なの始まってないか?」

作者「そう?」

なのは「そうかな?」

フェイト「どうだろ?」

はやて「元からやからえんちやうん?」

グサツ!グサツ!

作者&裕樹「うっ…」

なのは&フェイト「は…はやて(ちゃん)!!」

それ禁句 (なの)!!」

はやて「え! そうなん? うっかり言ってもうたわ」

作者「ま、まあ…わざとじゃないからいいかな?」

裕樹「まあな…」

はやて「ところで裕樹君はいくつデバイスを持ってるんや?」

なのは&フェイト「私達も気になってた。

教えて裕樹(さん)」

裕樹「俺に言われたって…おい作者、そこんところどうなんだ?」

作者「え〜と、今の所

アームドデバイス2つ

ストレージデバイス1つ

インテリジェントデバイス1つ

ユニゾンデバイス1騎

こんな感じですよ」

なのは「にやははる、な…なんとというか」

フェイト「凄まじいというか」

はやて「もうチートやる。模擬戦でさえ3個でかなり手加減したのに

もう2個あるとか…本気出したら次元震起こるんとちゃうん？」

裕樹「いや、起こす気無いから。

…んな事あ置いといて、
アームドがラグナロクとミストルテイン
ストレージがアクセル
インテリジェントがSGGGスターガオガイガーだとして
ユニゾンはなんだ？」

作者「まだ決めてないよ。

どこら辺で出すかも決めてないし、
最悪、次の作品で登場するかもしれん。
まあ、後半で出てきて圧倒的な力を持つと言ったら奴しかいないな」

裕樹「奴ってことは人型ですらないのか？」

作者「一応、人型だと言っておこう」

あ、インテリジェントだけど所有を含めると4つになる予定だよ」

3人娘「なん…だと…」

裕樹「ガオガイガー見てる人ならすぐわかるな」

作者「あと、^{スリージー}GGGのハイパーツールや勇者ロボ達も

機動部隊に所属する予定…てかそのつもりです」

なのは「ハイパーツール？」

フェイト「勇者ロボ？」

はやて「なんやそれ？」

裕樹「お前ら昔見たことあんだろっが！」

ドゴツ！x3

3人娘「いった〜い！」

裕樹「ハイパーツールはデイベイディングドライバーやダイヤモンドジ

ヨンプライヤーの事！

勇者ロボは氷竜、炎竜、風龍、雷龍、

ボルフォッグ、ゴルディーマーグ…etc達の事だ！」

なのは「うん」

フェイト「思いだした」

はやて「過剰戦力やな」

裕樹「救助活動もするし、空や海にも協力してるから問題ないだろ」

はやて「そうかな？」

閑話休題

作者「デバイスについてだが、

ラグナロクとミストルテインは小説『ラグナロク』から使わ
して頂いてます。

待機状態は本編にあった通りそのまま小さくして首に掛けら
れるようにした感じ。

アクセルは555の『ファイズアクセル』から
本編にもあったけどアクセルフォーム時はバリアジャケット
の胸部が変形し

リンカーコアがせり出して露出します。

待機状態はファイズアクセルそのまんま。

インテリジェントについては

見た目、能力、攻撃、防御などガオガイガーと同じです。

待機状態はGストーンです

ユニゾンデバイスは『破壊の書』ってもうネタばれ同然…

待機形態は、真っ黒な夜天の書の剣十字が黄緑色のGストーン
の紋様に置き換わった感じ」

3人娘「よくわからない…」

裕樹「同じく」

作者「うわーん！どうせ俺になんて説明力なんてないやい！」

ダッ！

はやて「あゝ、行ってもうた」

なのは「にやはは〜」

フエイト「でも、だれか書いてくれるかもね」

裕樹「そつだな、ここを見てさっきの説明が理解できた方。

お願いだ！絵を、俺達に絵をくれ！」

3人娘「お願いします！」

裕樹「お願いも終わったし、アレ行くぞ！」

3人娘「うん！」

3人娘「次回も！この小説に！」

裕樹「ファイナルフュージョン！」

作者「承おおおおおお！にiiiiiiiiiiiiん！！」

4人「おいしいとこ持ってた!?!?!」

「PV100,000 ユニーク10,000 アクセス突破記念」

作者「PV100,000!」

裕樹「ユニーク10,000!」

3人娘「アクセス突破記念スペシャル!」

作者「はい、という訳でいつの間にかこんな事になっていました」

裕樹「ホントならPV50,000ぐらいでやろうとしてたんだがな」

はやて「作者がサボった、という事やな?」

グサツ!!

作者「おうふ……」

なのは「まあまあ、はやてちゃん」

フェイト「作者もリアルの方が状況が変わって苦労してるみたいだから」

裕樹「どっかの委員長やってんだろ?」

作者「就職を有利に進める為に仕事を受けたんですが、

文化祭の準備が忙しい、というより仕事を小分けにして出されるので

もう面倒臭いったらありやしないという有様です」

はやて「そやったんか……っていつの間にか愚痴を零す趣旨に変わってるやんけ!」

裕樹「じゃあ、セッティング開始!」

セッティング中……

作者「小説中のGGG、ガオガイガースターガオガイガーGGG達の扱いを

知っていろいろのコーナー!」

裕樹「という訳で質問ある人挙手!」

なのは「はい!確かGGGとかSGGGって30m近くある筈だけど、

この小説だと2mぐらいまでダウンサイジングされてるよね。

そこについて聞きたいな」

作者「確かにGGG系は30mぐらいが本当のサイズですが、

この小説内ではまあ、ヒロインを巨大ロボットに乗せる訳にいきませんから

28mほどダウンサイジングしています。

あ、でも最終決戦ではちゃんと30mサイズの奴が出てくる予定ですよ?」

フェイト「はい!裕樹がフュージョンする時に

ギャレオンが出て来ないけどどういいう事なの?」

裕樹「それは、本来のギャレオンじゃなくあくまでデータで再現した物だからだな。

十年前の事件で深刻なダメージを負ったギャレオンは緑の星まで

自分を修理する為に帰ったんだ。だから今のギャレオンはダミーに近い」

はやて「今後の展開で機動部隊のロボット達がでつかわくなるけど、それはどういいう理屈で説明するんや?」

作者「そこは、2mサイズの状態は縮小状態で、

それを解除すると本来の30mサイズに戻るといいう事になっています。

これから書くリインフォース?の

『アウトフレーム・フルサイズ』みたいな感じでしょうかね」

なのは「じゃあ、これで最後。

三段飛行甲板空母とか、弾丸Xとか、オービットベースとか

現状はどこにあるのかな？」

裕樹「ああ、ヘキサゴンは地上本部にあったけど、機動六課の地下に移動したから」

そこに全部移動になってる。まあ、資材保管は地上だけかなで、オービットベースはまだ存在してない。

でもツクヨミ・タケハヤ・ヒルメの3艦は既に完成してる。宇宙戦艦だが、所属は地上本部になってる。

ちなみに、三提督は了承済み。もちろんアレもな」

作者「はい、そろそろお時間という事で今回はこの辺でさようならですー！」

はやて「そんなら、いつものいこか？」

一同『次回もこの小説に、ファオナルフュージョン承認!!』

プロローグ

「さてと、準備完了。…時間通りに行けそうだな。」

彼の名前は「さいとう齊藤 ゆき裕樹」

20歳。もちろん男性。階級は一等陸尉。魔導士ランクは陸戦、空戦、海戦ともにA（リミッター制限最大時）。

8歳で管理局に所属し、11歳から教導官として様々な部署で教導して回っている。

彼の教導は、

「仲間と連携し、少ない負担で最大の戦果を」

「絶望するしかない状況でも必ず生還する」

が主体であり、

「1人1人の力が少なく」、「人数が多い」地上本部にとって

願ってもない教導であるため様々な部隊を回って教導をしている。

ちなみに彼が教導を行った部隊は重傷は負っても生還率は100%を誇り、

最高でも三ヶ月で全員が復帰するほどであり、

その功績と彼の魔力光から「しじく漆黒のごうごん守護神」と呼ばれていた。

「地上とはお別れか…」

もちろん部署を回って教導しているため、

なかなか海次元航行部隊や空航空部隊などへの転属は出来ず

また、陸地上部隊のトップ、レジラス・ゲイズ中將がそれを認めることもなかった。

「機動六課か…」

しかし、彼は今、数日後に設立される機動六課への転属の準備をしている。

これは彼が、レジアス中将に直談判した結果である。

始め、レジアス中将は猛烈に反対した。優秀な人材が居なくなってしまうのだから当然である。

ただでさえ地上本部は優秀な人材を他の部隊に引き抜かれ、人材が不足している。

斉藤が人材を育てているので大分ましになったが、それでも不足している。

だから、何と少しでも斉藤を引き留めようとしていた。

しかし、斉藤は

「機動六課は、地上にも利益をもたらす。しかし、優秀な教導官が居なくては意味がない。

地上の事件に対応してもらったためにも自分が行くべきだ」と、言っ
って聞かなかった。

勘違いしないで欲しいのだが、

彼は自惚つめぼれてこのようなことを言っているのではない。

むしろ彼は謙虚な方だ。

勝手に周りが囃し立てているだけなのである。

だからこそレジアスは斉藤が自ら「それ」を言う事に驚きを隠せな
かった。

そしてレジアスは斉藤の覚悟を感じた。

だから斉藤が機動六課に転属することを了承したのである。

「あの二人はしっかりやっているのだろうか…」

あの二人とはもちろん高町なのは、フェイト・T・ハラオウンの二人である。

彼はこの二人に短い間ながらも教導したことがある。

しかし、彼の中では一番危険な生徒であった。気に掛けないはずがない。

「おっと、こんな時間か…そろそろ行かなくては…」

こうして物語が始まった。

プロローグ（後書き）

レジアス中將は自分の中ではかなり良い人です。

ちなみになぜ魔力適正のある主人公がレジアス中將と仲が良いと言えは、

地上本部に多大な利益をもたらした事、
そしてその功績を鼻にかけず、逆に謙遜したりする所が気に入ったからです。

こんな感じで始めました、

魔法少女リリカルなのはStrikerS（漆黒の守護神）
まだまだ未熟者ですがどうぞよろしくお願いします。

第一話「機動六課転属」(前書き)

なんか更新速度がおかしいですが、マイページのは参考なので変わるかもしれないです。

あと、話が飛んだりするかもしれないですがキニシナイキニシナイ。そして話が進まない。

それでは、はじめます。

第一話「機動六課転属」

「やっと着いたか…ここが機動六課…やはりまだ新しいな…」

斉藤 裕樹は現在、機動六課前にいる。

ここに来るまでにレジアス・ゲイズ中將から表面上の引き留め（実際には諦めたレジアス中將からの斉藤へのエール）をもらい時間が無くなってしまうたので急いで来た結果、かなり疲れてしまった。

「にしても、八神はやて二等陸佐は思い切った事をするな…」

そう、はやては事もあるうに

斉藤に直接、機動六課へのスカウトを行ったのである。

もちろん、それを知ったレジアス中將は

「あの子狸め！」などと言いながら激怒した。

何か機動六課に対して嫌がらせをしてないといいのだが…

「これは明らかな嫌がらせやなあ……」

「ですね……でも流石にコレは酷いですよ……」

八神はやてと、リインフォース？はレジアス・ゲイズ中將からの嫌がらせにしみじみコメントした。

レジアス中將は嫌がらせとして転属者の名前を書かず、しかもそれを当日の、早朝に送ったのである。

「しかも今日来るゆうても何時に来るかが書いてないやんか……」

嫌がらせここに極まり、である。

「ま、気長に待とか。」

しかし、その10分後に斉藤はやって来た。

コンコン

「どござ〜」

「失礼いたします！」

この度、地上本部から機動六課へ転属になりました斉藤裕樹一等陸尉であります！

以後よろしくお願い致します！八神二等陸佐！」

常識通りの入り方、そして地上式の挨拶。
此処までは普通である。

「そんな堅苦しくせんでええよ。

歳はそちらが上なんやし。

あとここでは部隊長って呼んでな。」

天使のような笑顔で答えるはやて。

「分かりました。八神部隊長。

…言われなかったらどうしようかと思っていました。」

その笑顔を見て安心したような表情を浮かべる斉藤。

斉藤は、自分の言いたいことを

「わざわざ」、「遠まわしに」、「相手の機嫌を損ねないように」
伝える敬語が苦手である。

それでも、一応最低限の礼節は弁えるが、

苦手なものを相手からやらなくていいと言われるのは斉藤でも嬉しいのである。

「面白い人やなあ。」

後、八神やのうて、はやてって呼んで〜な？」

「分かりました。はやて部隊長。」

「うん。よろしくな。」

斉藤の呼び方に満足するはやて。

優秀な人材を手に入れた上に、

自分好みの呼び方で呼ばせる事が出来たのだから当然だろう。

こうしてお互いが満足した転属報告は終わったのであった・・・

第一話「機動六課転属」(後書き)

やっと八神はやて登場。

次回は機動六課内の散策になりそうです。

第二話「機動部隊」(前書き)

タイトルはこうなっていますが、しばらくはやてが暴走しています。ぶっちゃけ関係なくなっています。

あと、次元航行部隊の階級は海軍(海尉、海佐など)としています。

第二話「機動部隊」

転属報告が終わってから斉藤は
はやてから機動六課の説明を受けていた。

「今、この機動六課はな、大きく分けて2つの部隊があるんや
まず1つは実動部隊や。

この部隊で新人の教導もするつもりやで。

そして、もう1つがロングアーチや

この部隊は、名前の通り長距離からの索敵や隊舎での治療、
デバイスの整備なんかをするための部隊や

ちなみに、実動部隊が2つに分かれて

なのはちゃんが隊長のスターズ分隊

フェイトちゃんが隊長のライトニング分隊

に分かれて活動するんや。

あ、後もう1つ機動部隊を作ろうと思うんやけど、
こっちは人が足りひんからまだ先になりそうや」

分隊、つまり4人編成の隊が2つあると言うことが…
そこから隊長、副隊長を除けば…

「新人は4人だけですか？」

はやては少し驚きながらも

「うん、そうやで。」

隊長陣の方で裏技使こたりして結構無理してるからなあ…
あんまり新人引き抜きし過ぎると非難が多くなりそうやし、
それに、あまり多すぎても統率しきれんからな…」

と、ため息まじりに答える。

「少数精鋭の対テロ、ロストログリア回収部隊…」

部隊が少ない分動きが速いが、敵とエンゲージした場合はつらい面がある。

おそらく副隊長にも優秀な人物を置いているのだろう。

そんな事を考えているとはやて部隊長から

「機動六課の話はこんぐらいにして隊舎案内しよか？」
と言われ、まだここの地理がわからない事に気づいた。

「そうですね。そうして頂けるとありがたいですね」

そう言った途端にはやて部隊長が顔をしかめた。

…何かまずいこと言ったかなあ？

「もうちょい口調なんかならへん？」

どうやら失礼な事をした訳ではないようだ。

「しかしこれ以上崩すとタメ口になってしまっんですが…」

「2人だけの時ぐらい構わへんやろ？」

それとも裕樹はウチに四六時中仕事の事を意識しろ言っんか？」

…目を潤ませての上目使い、しかも呼び捨ては反則ですよ…はやて
部隊長…

「わかったよ。こうでいいんだろはやて部隊長」

しかし部隊長はまだ不満そうだ。

「ウチが裕樹を呼び捨てにしたんやから裕樹もウチを呼び捨てにしてな？」

………

「わかったよ、はやて。だけど条件がある」

sideはやて

「わかったよ、はやて」

よっしゃー！ウチの勝ちやー！

「だけど条件がある」

条件？なんやろか？

「はやてが俺の事を呼び捨てにしない事、
年頃の女の子が男の名前を呼び捨てにするもんじゃないからな」

うーん、どないしよう？

「せめて2人だけの時ぐらいええやろ？」

上目使いに弱いみたいやから攻めたれ！

「はあ…わかつたよ。」

2人だけの時以外は呼び捨てにすんなよ？」

裕樹は「その目は反則だろ…」って呟いてるなあ…
困った顔もええなあ…

「じゃあ、人がいたら裕樹君って呼ぶからな？」

side 裕樹

なんかどつと疲れた…

しかし、はやてが満面の笑みを浮かべているから良しとするか。

「あのはやてちゃん？」

?!?!

「き、君は誰だい？」

急に出てきた妖精？みたいな小さい女の子に尋ねてみる。

「あ、紹介が遅れてもうた。

この子はリンフォース？、ツヴァイ私のデバイスや。

リンって呼んでやってや」

「ハイです！

ってそれより早く案内ないしてあげないと日が暮れちゃうですよ
「？」

.....

「ああー！！もう10時やんか！

えーと、隊舎案内してから訓練所案内して……」

リンに言われ急いでコースを決めるはやて。

流石に部隊長になるだけあって手早い。

「さあ、急いでいくでー！」

腕を掴まれたと思ったたら物凄い速度で連れて行かれた……

第二話「機動部隊」(後書き)

はやてが暴走気味なのは今まで出会いがなかった所に転属してきた
斉藤に

一目惚れしたからです。

多分、なのは達も・・・

今日はもう1話投稿します。

第三話「自己紹介 前編」(前書き)

うーん話が進みにくい…

でもこれからは進んでいくと思います。

第三話「自己紹介 前編」

「ふう…疲れた」

あの後大まかに隊舎などの説明を受けた。

「しかし、あのシュミレーターはすごいな」

なのはが提案し、ロングアーチのデバイス関連の部署が作り上げたという。

投影されるのはホログラムだが触ったり、壊したり出来る…

「少ない面積で様々な訓練が出来るようになるか…

全く、最近の技術には驚かされるな…

なあ、ラグナロク、ミストルテイン」

齊藤は自分のデバイスの名前を呼ぶ。

確かに、旧文明崩壊からの技術発展はめざましいものがあります

《だがまだ我等には適^{かな}わん様だがな》

両方の声がペンダントの様な細工品、

つまり待機状態のデバイスから聞こえる。

ちなみに、ラグナロクは長剣をそのまま小さくした様な、

ミストルテインは

S O C O M M k ・ 2 3 (ライト装置時)の形のリボルバーの後部に、

少し大きなカートリッジタンクが付いたものを

そのまま小さくした様なペンダントとして彼の首に掛かっていた。

「まあ…今、技術面でお前達に勝てるのは
ガオガイガー
GGGぐらいだろうな」

GGGも彼のデバイスだが、十年前の事件で戦闘行動が不可能になってしまったので地上本部のデバイス研究部隊で自身の後継型であるGGFの開発に協力している。
ガオファイガー

確かに、私達でも…

《あいつにや勝てないな》

そんな2人の声を聞いて斉藤は苦笑して

「ま、あいつは未知のロストロギアの様なものだからな、
気にする事じゃないさ」

確か、マスターが管理局に入る前に

GGGをロストロギアとして押収されそうになったそうですね？

《まあGGGとマスターがファイナルフュージョンFFFすれば
オーバートリプルエス

SSS+なんて目じゃなかったからな…

仕方ない事だろうな》

まあ、一般人が魔法を使い始めた時点で管理局にとって危険人物に成りうるのだから普通の対応だったのだろう。

しかし、俺との交渉に短絡的思考のクロノを持って来たのは間違いだった。

なにせ、此方からちよっと挑発しただけで攻撃して来たのである。

最も、クロノの先制攻撃に対する正当防衛として
クロノをフルボッコにしてやったが。

「そっぴゃ、よく考えてみれば久しぶりに話したんだな」

斉藤はここ1ヶ月間、機動六課に転属するために
奔走していたのだから当然だろう。

確かにそうです

《もう22時になるぜ、寝なくていいのか？》

…もうこんな時間が…

「そうだな、明日は新人を除いたメンバーで自己紹介だったか？」

《ああ》

マスターの為の集会です

何故、俺の為の集会かというと、

機動六課の正式な立ち上げは2日後なのだが生憎今日、
地上本部から「2日後に地上本部に來い」と連絡が入ったのだ。

しかし隊長、副隊長陣やロングアーチ、
その他局員が知らないと言石にまずいとこの事では
やてが急いでセッティングしてくれたのだ。

忙しい時期に仕事を増やしてしまったな…

休みか何かの時に手伝いでもするか…

うん、そうしよう

さて、明日もあるし、そろそろ寝るか

ちなみに斉藤は知る由もないが、

はやての考えは

「頼れるってところを見せていっばい甘えて貰おう！」

と言う打算的なものであるため、

斉藤は知らない内に墓穴を掘ってしまった形になっていた。

第三話「自己紹介 前編」(後書き)

斉藤 裕樹について

身長・・・180?

顔つき・・・ちよいイケメン

魔力(個人値)・・・リミッター最大でAランク(通常)

リミッター無しでSSSSSSS+ (SSSS+の2乗)
オーバーシックスエス

ザ・パワーを行使することで最大魔力

なお、リミッターはランクSまでならば自己の判断で解

放可能。

デバイス使用時は、リミッターとは関係なしに魔力が上昇する。

(リミッターをカットすればカットした分だけ上昇。つまり、魔力の上乗せが行われる。)

階級・・・一等陸尉

一等空尉

一等海尉

陸・海・空での教導資格

機動六課 機動部隊隊長

所持デバイス・・・GGG - 十年前の事件で破損、
ガオカイガー

戦闘行動不能のためGFGの開発に協力。

スターガオカイガー
SGGG - GGGの出力強化版。

実体ではあるが

きる。

ファントムリング・ウォールリングが使用でき
る。
現在使用中。

ガオファイガー
GGG - GGG・SGGGの後継機。

ファントムリング・ウォールリングともにプ

ログラム化など

SGGGの機能強化版ともいえる。

ラグナロク - 長剣型アームデバイス。

ミストルティン - リボルバー型アームデバ

イス。

第四話「自己紹介 後編」(前書き)

裕樹は無印とA'sの時にはやて達に会っています(なのはとフェイトのは教導もしています)が、

素顔のままだった訳ではないので裕樹だとは知りません。

(ガオガイガーの格好で教えてました。

ついでに声も変わったので完全に分かりません)

第四話「自己紹介 後編」

翌朝

「さて、これから隊長・副隊長陣とロングアーチ、一般局員に自己紹介してもらおうやけど…」

今、俺は部隊長室で説明を受けているんだが：

「とりあえず自分の話したいこと話せばええで。なにせ『地上本部の救世主』の言葉やからな、聞かん奴はそうそういないやろうしな」

まただ、ここでも言われた。

「とりあえず二つ名を出すのはやめてくれないか、はやて呼ばれてもあまりいい気持ちはしないんだ」

「『地上の守護神』からの呼び捨てや！
ウチは嬉しいで〜」

…人の話を聞いているのだろうか？
いや、聞いてないだろうな。全く。
十年前はもう少し可愛らしかったはずだが。

「裕樹？

無視か？無視なんか？

わかった、ウチが悪かったから怖い顔でだんまりはやめて〜」

やっと話が出るようだ。

「人が嫌だと言った事をそのまま続けるんじゃない。
もし、もう一回やったら…」

若干魔力を放出しながら続ける

「ゆる〜っくりおはなし教導…させてもらうからな…」

「は、はひいひい！
わかりましたあ…」

若干顔を青ざめさせ、答えるはやて。
…やはりこころいうところは可愛いな。

「わかればいい。
それより早く行った方がいいかな？」

魔力放出を止め、笑顔ではやてに尋ねる。

「…うん、そやね
もうそろそろいかないかな」

さて、いよいよか…
なのは達との顔合わせ、
と言っても昔教導してたときはガオガイガーになったままだったから
向こころが気づくはずがないが…

「え〜、まず急な呼び出しに答えてくれてありがとう。

連絡にもあつたけど明日の発足式に來れない隊員さんを今の内に紹介しとこと思つて集まつて貰いました。じゃあ、さっそく…出て來てええよ〜」

side 裕樹

はやての合図とともに集まつたみんなの前に出ると、同時に会場から「え…ええええ!?!?!?」と、驚きの声がかかる。が、それを無視して続ける。

「忙しい中、お集まり頂きありがとうございます。

この度機動六課に正式に所属する事となりました

齊藤裕樹一等陸尉であります。っと、堅苦しいのはここまで。

俺のことは呼び捨てでいいから気軽に話しかけてくれ」

sideなのは

お仕事片付けるの大変だつたけど、

ようやくはやてちゃんが

「ウチのとおつておきや。あ、あと勝手に手え出したらあかんで」
つて言つてた人がわかる!

…「手を出しちゃ駄目」つて事は男の人つて事だろつけど
どんな人だろつ?

なのはがフェイトとそんな事を念話で話していると
はやての後ろにいた人が動き始める。

うーん、こつちからだと暗くてよく見えないな…
そのあと、私達の前に出てきた人を見て、思わず

「え…えええ!?!?」って叫んじゃった。

どうやらフェイトちゃんも叫んじゃったみたい。

だって、私が好きな人…裕樹さんが目の前にいたんだから…

sideフェイト

私なのはと念話で

(どんな人が来るんだろう?)

(うーん、はやてちゃんのとっておきで、

私達に「手を出しちゃ駄目」って言う事は)

(かっこいい人なのかな?)

(そうかも、でも強い人だといいな)

一緒に模擬戦したいな)

(もう、なのはったら!

でも確かに実力がある人がいいよね。)

そう、今地上本部にいるあのくらい強い人がいい。

(やっぱりそうだよな。)

…ねえフェイトちゃん？)

(何？なのは)

(多分…だけど、はやてちゃんってその人の事狙ってるよね？)

(うん…私もそう思う)

その瞬間、私となのはの頭の中に同じ考えが浮かんだ。

((私もそろそろあの人にアプローチしてかないと…))

私達三人は同じ年の人に比べて階級がかなり高い。

そのせいで三人とも19歳になってもまだ彼氏がいないのだ。

(あれ、フェイトちゃん好きな人いるの？)

(うん。そう言うのはもなんでしょ？)

(にははは…危ない所を助けてもらった人なんだけどね)

(私は地上本部で色々お世話になってる人なんだよ？)

(そうなんだ…あっ、出てくるよ)

なのはが教えてくれたので

私はみんなの前に出てきた人を見ましたが次の瞬間、

「え…えええ!?!?!?」と叫んでしまいました。

だって、そこには私が地上本部で行動するとき、

私に迷惑が掛からないように、仕事がスムーズに進むように協力してくれている

裕樹がいたんだから…

俺の自己紹介が終わり、
全員が解散した後で走って近づいてくる奴が二人…

「「裕樹（さん）!?!?!」」

なのはとフェイトである。

「高町一等空尉！フェイト執務官！お久しぶりです！」

「うん、久しぶり…って」

「そんな事よりなんで裕樹が機動六課にいるの？」

「そつだよ！地上本部はどうしたの？」

レジアス中將が怒ってるんじゃないの？」

確かに二人の疑問は当然だ。

地上本部のエースを引き抜くとなれば

トップのレジアス中將が動かないはずがない。

ただでさえ空や海が嫌いなレジアス中將が目の敵にしている
機動六課であれば尚更だ。

「あゝ、それは私のはやて部隊長からのスカウトを受けてから
レジアス中將を説得したから大丈夫ですよ。

さっきも言った通り、正式に所属です」

「こら、裕樹君。 部隊長が余計やで」

はやてがむすつとしながら言う

「人前でも呼び捨てなのか、はやて!？」

「そや」

即答で返された…

私の前にいる2人はポカーンとこっちを見ている。

その後、はっ!つといった感じではやてに尋ねた。

「「はやてちゃん?」「」

「なんちゃ？」

「「なんで裕樹（さん）は
はやてちゃんと話す時だけ敬語じゃないの？」」

「それは私からそうするように頼んだからや」

その言葉を聞いた途端、俺の方に近づいて

「「裕樹（さん）！」」

子供がねだるような目をした2人を見て

「何でしょうか？」

まあ…だいたい予想はついたが…

「「私も同じ様に呼んで（下さい）！」」

やっぱり…

「年頃の女の子が…」

言いながら2人の顔を見ると…

上目づかいでこちらを見ていた…

「~~~~っ！！わかった、わかったから

そんな目で俺を見るな！なのは、フェイト！」

若干怒ってみるが…

「えへへ／＼／」

…聞いていないようだ…

まったく、昔教導した時と同じじゃないか…

そんな事を考えていたが、

出発の時間が迫っているのを思い出した。

「おっと、もうそろそろ出発しないと…

あと多分、明日の午後の教導なら見に行けると思っがどっする。」

「必ず来て（や）（よ）（ね）！！！！」「」

なぜ3人同時に言う…

「わかった、それじゃ出発するよ」

「きをつけてな」

「怪我しないようにね」

「お土産まってるよ」

旅行に行くんじゃないんだがなあ…

俺は苦笑いを浮かべながら

「アイスでも持って帰るかな？」

と考えていた。

第四話「自己紹介 後編」(後書き)

裕樹「さて、なぜこうなった」

なぜこうなった！なぜこうなった！
なぜこうなった…

裕樹「お前がやったんだろが！！！」

まあ、

強くて

頭も良くて

自分より身長高くて

優しいと来れば惚れない訳ないよねえ…

裕樹「お、俺が悪いのか…」

でも、お人好し…というか
相手の事を考えているというか…
とにかくそういう性格じゃないとこの話続かないし。

裕樹「褒められてんのかけなされてんのか
わからない発言だな」

まあ、どっちもって事で。

裕樹「ところで俺の二つ名っていくつあるんだ？」

うーん、1、2、3、4、5、6、7、8、9…
…いっぱい！

裕樹「いっぱい！じゃねえよ」

ゴスツ！

…痛いです。
真面目にいっぱいあります。

「地上本部の救世主」、「地上本部の勇者王」、
「地上本部の守護神」、「地上本部の破壊神」、

「漆黒の勇者」、「漆黒の勇者王」、
「漆黒の守護神」、「漆黒の破壊神」、
「金色の勇者」、「金色の勇者王」、
「金色の守護神」、「金色の破壊神」、
「管理局の漆黒き守り手」、「管理局の漆黒き勇者王」、
「管理局の漆黒き守護神」、「管理局の漆黒き破壊神」、
「大いなる希望」、「管理局の切り札」、「ワン・マン・アーミー」、
「バリアジャケット」… e t c

こんな感じですよ。

裕樹「最後のはおかしいだろ…」

じゃあまた次回も漆黒の守護神に

裕樹「ファイナルフュージョン承認!!」

第五話「模擬戦 前編」(前書き)

一話にしようとしたら字が多すぎると...

今回かなり長いです。

第五話「模擬戦 前編」

俺は今、新人達の午後の訓練を見ている。

新人達は中々良い動きをしている。

新人にしては、であるが。

いつの間にか横にはヴィータがいる。

たった今やって来た様だ。

「どうした？ 斉藤

随分と不機嫌だな」

無表情のはずだったがいつの間にか険しい顔になっていた様だ。

「ヴィータか、

なに、地上本部に行った時に質たちの悪いからかいと
若い魔導士と騎士に質問攻めにあっただけさ」

「そりゃかなり堪えるだろうが。

ちなみに、内容は聞いても良いか？」

まあ、大抵そつくるよな…

俺に気遣ってくれたし、

はやての家族だし、いいか。

「ああ、

からかいの方は俺の二つ名に関してで、
魔導士からの質問攻めは、

「どうすれば強くなれるか」、「何をすれば強くなれるか」で騎士からの質問攻めは、
「何故、騎士の称号を拒否するのか」、「あんたなら命を任せられる。だから騎士の称号を冠してくれ」、「
とかだな」

「はあ〜…」

人気者というかなんというか…

まあ、頑張れ」

「あながと」

励ましてくれたヴィータに礼を言いながら頭を撫でてやる。

「うう…／＼／

子供扱いすんなって…」

若干頬染めるヴィータ。

可愛いなあ…

「ん、訓練が終わったみたいだな…」

訓練が終わった様なのでヴィータと一緒になのは達の下へ向かう。

「はい、今日は此処まで。」

明日から朝練やるからゆっくり休んでね」

「「「「あ、ありがとございました…」」」」

如何にも疲労困憊と言った感じで返事をするFWメンバー

スバル、ティアナ、エリオ、キャラ

4人に差し入れでもするか…

「よう、新人。」

俺からのささやかなプレゼントだ、

これ飲んで暫く休んだ方が良さぞ」

そう言っつて4人にスポーツドリンクを渡す。

すると、オレンジ色の髪の毛のツインテール、ティアナが

「あの…どちら様ですか？」

と、不審者を見る目で聞いてきた。

「そつえば紹介がまだだったな…

機動六課所属、斉藤裕樹一等陸尉だ

よろしく」

「ティアナ・ランスター二等陸士です」

「スバル・ナカジマ二等陸曹士です」

「エリオ・モンディアル三等陸士です」

「キャラ・ル・ルシエ三等陸士とフリードリヒです。

ほら、フリード」

「きゃふっ…」

「ははは、そう固くならないうでくれ
あと、名前は呼び捨てで良いぞ」

「「「「はいつ！」「」「」

嬉しそうに返事をするFWメンバー

お互い笑っているとなのはがやって来た。

「あゝっ！裕樹さん戻ってたの？

なら一言言っただけ良かったな」

「ごめん、ごめん。

ちよつと訓練を見てたんだ。

そうそう、見ていて思ってたんだが、

全員頑張っているが魔力の使い方が甘いな。

細かく言えば、

ティアナはちゃんとみんなを指揮出来ているが、

判断から指示を出すまでに時間が掛かりすぎてるな…

まあ、場数を踏んで慣れるしかないかな。

スバル、エリオは思い切りの良い呐喊は良かったけどサポートの

範囲外まで出たのは駄目だ。

だけど、これからサポートの範囲を意識していけば良いアタック
ーになれるぞ。

キャラはサポートだがしっかり自分の身を守っていたな。

しかし、その分支援魔法が疎かになってるから

無理せず仲間を頼りな？」

俺が問題点と解決方法を教えるとポカーンとする新人となのは、ヴィータ、シグナムの7人。

「どうした？俺、変な事言ったか？」

「……あ……い、いえ！」

「ありがとうございます！」「」「」

「すげえなお前。」

「よく10分だけでそこまでわかったな」

「ああ、初対面、しかも担当もわからんのに担当を当てた上で指摘するとは……」

「すごい、裕樹さん」

「まあ、伊達に教導官やってねえって事さ……」

「あ、そっぴや模擬戦どうすんだ？」

「あ、忘れるところだった！」

「今日こそバリアジャケットを着てもらおうの！」

「ん？そりやどついう意味だ、なのは？」

「私も気になるな、高町」

「ええとね、裕樹さんは本気の時以外にはバリアジャケットを着ないんだよ。」

「で、私との模擬戦でまだ一度も着てないんだ。」

しかも、アクセルシューターを直撃させても
いつの間にか後ろに回られてて負けちゃうんだよ」

なのはの言葉に信じられないと言う顔をする新人 FWメンバー

「へえ（ほお）…興味あるな…私ともやっつて貰おうか」

「あ、私も良いよね、裕樹？」

いつの間にか来たフェイトも乱入してきた。

「……えええ！?!?」「」「」

叫ぶFW達。

「別にいいが…全員とか？」

「うん、お願い」

「はあ…わかったよ…」

ラグナロク、ミストルテイン、
セットアップ！」

オールライト、マイマスター

《デバイスのみ展開》

次の瞬間、腰にベルトが展開し、

左腰にラグナロク、後ろにミストルテイン

右腰にミストルテインのモードチェンジバレルとカートリッジタンク
の予備が付いた。

「さあ、さつさと始めて
帰って土産のアイスでも食おうぜ」

「「どういう事（だ）（なの）？」」「」

「まんまの意味だ

「ああ、一応全員分あるぜ」

「お土産って…本当に買って来たの?!」

「言って来たのはそっちだろうが…

「要らないんなら俺のだな」

「ん？何や、みんなして。

「何かあつたんか？」

「喧嘩は駄目ですよ？」

今来たばかりのはやてとリインもまざってきた。

「いや、喧嘩をしてた訳じゃないんだ。

「実は…」

リインの頭を人差し指で撫でながら説明している時に

「気持ち良いです」とリインが言った後から

「羨ましい」といった感じの視線が

なのは、フェイト、はやて、FWメンバーからリインに注がれていたのは俺の気のせいだろう。

「確かにウチも気になるな。

裕樹君、ウチも模擬戦ええよな？」

「お願いです」

「今更増えたって変わらないからいいよ」

「やたっ！…っと、ちなみに買って来たアイスって何処の何味や？」

コンソールを叩きながら質問に答える。

「えーと…【JOY】のバニラ、チョコが6個ずつ、キャラメルが12個だな」

「JOYって…あの有名な?!」

「しかも24個って…裕樹、かなり奮発したんだね…」

驚くのはと若干呆れ気味のフェイト

「まあ、アイスだから買い過ぎても凍らせとけばいいし、お前らが食わなくてもFWメンバーが食っちゃまうだろうし」

「…は、ははは…」

おそらく凶星だったのだろう、乾いた笑い声を上げるFWメンバー

「…あ、あの裕樹さん？」

恐る恐る質問してくるティアナ、スバルの二人。

「どっした？」

「私達の間もあるんですよね？」

スバルよ、さつき全員分と言ったじゃないか…って隊長陣の事だと思ってるのか。

「なぜ、キャラメルだけ多めに買ったんですか？」

ティアナ、なかなか鋭い

「え、ティア知らないの？」

地上本部の近くのJOYは本っ当に美味しいって有名で、中でもキャラメル味が人気なんだよ」

「ああ、俺も地上本部で聞いた時に耳が痛いほど聞いたな…
って話が逸れ過ぎだろ…」

じゃあ、隊長陣が勝てばFW含めアイスを食べられる」

ここまで言ったところで

一同から歓声上がるが、

「ただし！俺が勝ったらアイスは無しだ」

と、言った瞬間

「「「「部隊長、隊長、副隊長！頑張ってください！」「「「「

と、FW陣

「「「「うん（）おう（）ああ（）！！」

第五話「模擬戦 前編」(後書き)

...

裕樹「なあ」

作「なんだ」

裕樹「5話で一万文字超えるってどういう事？」

作「…うん、おかしいよね」

わかっているよ5話…ってか6話目で一万って…
PVアクセスの約二倍だし…」

裕樹「あちゃ…凹ませ過ぎた…」

作「でも、読んでくれる人が居たら書き続けます！
勇気ある限り！！！」

裕樹「…気力ある限りだろ…」

まあいいやじゃいつものいこうや！」

作「おう！」

次回、模擬戦 後編に」

裕樹「ファイナルフュージョン承認！」

第六話「模擬戦 後編」(前書き)

今回かなり読みづらいです。

あと主人公無双です。

ガオガイガーだから仕方ないって事にしてください。

強くなった理由も後日書きます。

あとファイズアクセルが出てきます。

機能が変わっている所があるので詳しくは本編とあとがきで。

第六話「模擬戦 後編」

「じゃあ、ルール確認するよ」

「ああ」

「時間は30分、

私達はバリアジャケットが自動解除、もしくは行動不能にさせられ
たら撃墜、

全員撃墜で私達の負け。

裕樹さんは気絶など戦闘不能で負け。

これでいいよね？」

「ああ、問題無い」

「んじゃ、FW合図頼むわ」

「「「「はいつ！」

それじゃ…模擬戦開始！」「」「」

「まずは私から行くっ」

「いきなりシグナムかい…」

大丈夫ですマスター

《だが、後がマズくなるかもな》

「（まあ、そんな時はそんなさ…っ！）」

念話で話しているとシグナムの斬撃がやって来た。
ラグナロクで防御するがかなり重い攻撃だ。
女性にしては、であるが。

「雑談とは随分余裕だな！！」

「軽い作戦会議さ！」

言うと同時に力強くで押し返す。
強引に押し返したのでシグナムはバランスを崩した。

「ラグナロク、ソニックムーヴ」

S o n i c M o v e

高速移動魔法を使って一瞬で間合いを詰める。

シグナムは何とか立て直そうとしているがもう遅い。

「獅子連斬！」

「がはっ」

俺の容赦ない連撃でシグナムの騎士甲冑が碎ける。

「……え……」

数秒の出来事に啞然とするFWメンバー。

まあ、いつも自分達を叩きのめす奴が

ものの数秒で返り討ちにあってる事もあるだろうが…

今はそんな事より…

「さあ…次はどいつだ？」

模擬戦を楽しまなきゃな…

後から聞いた話だが

この時の俺の顔は悪役の様だったらしい。

「次はあたしだ！」

若干震えながら名乗りを上げるヴィータ。やはり可愛い。

「行くぞ！アイゼン！」

ラケーテンフォルム

「ラケーテンハンマー！」

その場で回転し、勢いを付け突撃して来るヴィータ。

しかし、コースが丸分かりである。

しかし、ラグナロクで受けるのはあまり得策ではないので射撃で撃墜する事にした。

そして右腰からMCBのマシンガンモトトチェンジバレルを取り出す。

「ミストルティン！MCB・マシンガン！」

《イエス、サー》

「ファイア！」

照準を合わせ引き金を引く。

それと同時に無数の魔力弾（炸裂型）が

ヴィータに向かって飛んで行く。

ヴィータはこっちに向かって来ているので自分から銃弾の雨に突っ込む事になる。

つまり…

「なっ…ぐあああっ！」

回避不能、高威力かつ低労力の簡易トラップ（？）の出来上がり。

「これで二人…さあ、次は誰だ？」

言いながら落ちるヴィータを浮遊魔法で

優しく地面に降ろす。

流石にいつ出動かわからないのに

怪我はマズいからな。

sideはやて、なのは、フェイト

「(なのはちゃん、フェイトちゃん)」

「「(なに?はやて(ちゃん))」

「(ここはフェイトちゃんが高速で攪乱してる間にウチとなのはちゃんが裕樹君をバインドして砲撃。ぐらいしか作戦が無いんやけどどうする?)」

「(私もそれしかないと思う)」

「(私もなのはと同じ。)

「じゃあ、攪乱して来るから後お願い)」

「(氣い付けてな)」

「(直ぐに準備するからね)」

side 裕樹

どうやら3人、念話で話しているらしい。さっきから動きが緩慢になっている。

…さしずめ作戦でも立てているんだろう。

「話は終わったかい？」

「うん。次は私だよ、裕樹」

「じゃあ、再開だ」

そう言うと同時に

2人がそれぞれ自分のデバイスに声を掛ける

「バルディッシュ！」

「ラグナロク！」

「ソニックムーヴ！」

Sonic Move

お互い、同じ魔法を使う。

やはり高速での攪乱か…

「はあっ！」

フェイトがハーケンフォームのバルディッシュを繰り出して来る。

しかし、大鎌である事と加速中である事が相まって攻撃にキレが無い。

あれほどデバイスのフォームには気を使えと言ったのに…

「甘い！」

キーン！
と、ラグナロクとバルディッシュの魔力刃が小気味良い音を立ててぶつかる。

「前に手合わせした時より弱くなったんじゃないのか?!」

「今はリミッターが掛かってるからねっ!」

お互いに振り抜こうと力が籠もる。

「だったら俺は万年弱いじゃねえかっ!

フェイトの技量が落ちたって言ってんだよっ!」

言うと同時に少し下がりがりながらフェイトの後ろに回り込む。バルディッシュが空振りする形になりフェイトがバランスを崩した所を撃墜しようとした瞬間、首筋に悪寒を感じ、緊急回避する。

「くっ… バインドだったか…」

さっきまで俺が居た場所にバインドが出現していた。

「え… 避けられた!?!」

「高速移動でも今のは当たるやろ…」

純粹に驚くのはと半ば呆れた感じのはやて。

成る程、さっきの作戦会議はこれだったか…

もしそうなら、フェイトの攻撃のキレの無さも頷けるな。

…頷きたくないが。

「さあ、手の内がばれたぞ。

次はどうするんだ？」

若干挑発気味に言ってみる。

KYだここでブチ切れるが…

「アクセルシューター！」

「ハーケンセイバー！」

Acceler Shooter

Haken Saber

なのは、フェイトの2人が冷静に誘導弾（刃）で牽制し…

「灰のほ白き雪の王、銀の翼も以て、眼下の大地を白銀に染めよ。」

はやてが広範囲魔法を準備…

つてアイテム・デス・アイセス氷結の息吹かよ！

「くつ…ミストルテイン、ヴァリアブルシューター！」

《Variable Shooter》

アクセルシューターとハーケンセイバーを撃ち落とせるギリギリの数を打ち出す。

威力が高い・誘導性も良い・長時間維持できる反面、消費魔力、情報処理負荷も多い。

はやての氷結の息吹アイテム・テス・アイセスに対抗するための、
さらに、放つであろう「ラグナロク」に備える為にも余計な魔力消
費はしたくないからだ。

…模擬戦であつてもこのぐらいは普通にしなければいけないのに
この三人娘と言つたら…

つと、今はバリアブルシューターの制御に集中しなければ…

「…そこだっ！」

ビシッ！ビシッ！パキッ！

ビキッ！パキイイン！

2人の攻撃はどうも単調すぎる。
だからこうして容易く破壊できる。
しかし…

「来よ、氷結の息吹！」

若干遅すぎたみたいだ。

なのはとフェイトは既に上空に避難済み。
攻撃を喰らうのは俺だけ。

…まあ、大体わかつていたが。
そんな事より生き残らなければ…

「ミストルティン、防護弾フレイム/炎」

《Barrier Barrett/Flame》

体表面にごく薄の防護膜が形成される。

バリアジャケットを着ていない状態で氷結魔法を喰らえばいくら俺でも死んでしまう。

そんな事が無い様に用意した物が役に立つ事があるとは…

「アーテム・デス・アイセス！」

魔力弾が地表面に着弾し、着弾点から一気に凍結し始める。
今は飛行する訳にいけないので俺も巻き込まれる。

「……やった〜！」「」

ぬか喜びする3人娘。

「……これでアイスが食べられる〜！」「」

同じくFW

…なんか腹立ってきた。

「（ミストルティン）」

《なんだ》

「（アクセルフォーム発動と同時に防護弾バースト、凍結魔法を無効化）」

《イエス、サー》

「(アクセル、セットアップ)」

Complete

ベキベキ！ バキイ！

『えっ……』

豪快な音を立てて砕けた魔法を見て啞然とする一同。
と言うよりシグナム、ヴィータいつの間にも復活したんだ。
まあ、手加減したから当然っちゃ当然だが。

「何を」

バアン！

「あああっ…！」

言いながらフェイトを撃墜。

「やったんだい？」

ダン！ダン！

「あっつっ…！」

聞きながらなのはを撃墜。

「な…なんや、その力…その姿…」

恐怖しながら聞いてくるはやて。

「この姿か？…アクセルフォームさ」

そう、いくら油断していたとはいえ

なのは、フェイトの2人がいとも簡単に撃墜される筈が無い。

原因はこのフォームだ。

このアクセルフォームは使用している間魔力を消費し続けるが

移動速度、攻撃速度、反応速度、詠唱速度など諸々の速度が強化され、

長距離から対応をしないと防げないくらいのスピードになる。

さらに、スタートアップする事で

10秒間（客観時間と体感時間を切り替え可能）だけならば

1/1000秒の速度で移動する事が出来る。

本来、バリアジャケットを装着した上で使用するものだが、

この様に生身のままで使用できる。

しかし、その場合はスタートアップも含め

全てのスピードが格段に落ちる。

それでも近距離なら十分なスピードだった為、2人を苦も無く撃墜出来た訳だ。

ちなみに、使用中はリンカーコアを露出して大気中の魔力などのエネルギーを集める。

生身だと少々グロイ。

はやてが恐怖した原因はこっちだろう。

「本気で来い！」

side はやて

一瞬でなのはちゃんとフェイトちゃんが撃墜されてもった…

「かなり速いみたいやね」

「（リン、サポートお願い。」

彼方より来たれ、やどりぎの枝。銀月の槍となりて、撃ち貫け。

（
「
そう言いながらミストルティンの準備をする。

「でも、動かれへんかったら意味無いで！

石化の槍、ミストルティン！」

ほんまは人に撃ったらあかんのに

目の前の人が恐ろしくて打ってしもた…

side 裕樹

「石化の槍、ミストルティン！」

予想通り、はやてがミストルティンを撃ってきた。

ここはやはり…

「ミストルテイン！」

《Standard Bullet》

ダウン！

バシユウウウ！

ミストルテインの通常弾…

「着弾点から一定空間を消失させる」効果を持つ弾を使い
ミストルテインを相殺させる。

「っ?!?!」

突然の事に声にならない程驚くはやて。

そりゃあ暴走した防御プログラムさえ石化させる攻撃が
たった一発の魔法弾で消し飛んだら驚くわなあ…

まあ、「たった一発」って言う認識が間違っているんだが…

「どうした?もう終わりか?」

「くっ…リイン、サポート頼む!

…響け終焉の笛…」

ラグナロクか…ならこっちも

「ラグナロク、刀身に存在^{ソルン}意思展開」
オールライト、マイマスター

ラグナロクに呟くように指示を出す。
そして次の瞬間、刀身が輝き始める。
この現象を傍目から見れば魔力刃に見えるだろう。

「「ラグナロク！」」

2人の声が重なる。
次の瞬間、片方が砲撃を撃ち、
もう片方が青白く輝く両刃剣を構えその砲撃に向かって呐喊した。

ドゴオオオオン！！

砲撃と剣が激突した地点から凄まじい爆発が起こる。
爆発の影響で粉塵が舞い、何が起きたかわからない。

この時、FWの思っていた事は大体同じだった。
つまり「やりすぎだろ」と「大丈夫かよ」である。

そうこうしている内に粉塵が晴れた。
爆発したあたりには何も残っていなかった。

「あかん、やりすぎてもうた…」

今更後悔しても遅いだろうが。
ま、ドツキリかけてやるか。
まだアクセルフォームのままなので高速で背後に回る。

「何を、やり過ぎたんだ？」

「！つてええええ？！」

思った以上に驚いてくれた。
多分、殺してしまったとも思っていたのだろうが、
こっちとしては、こんな練りの甘い魔法で死ぬ気はさらさら無い。

「^{フリーズ}動くな、降参しろ」

ミストルティンに魔力を籠め、トリガーに指を掛けながら言う。

良い子はマネすんなよ！
ホールドアップするならトリガーから指を離しておこう！

「参った。ウチの負けや」

はやてが両手を上に挙げる。

こうして一方的な模擬戦は終わった。

第六話「模擬戦 後編」(後書き)

デバイス紹介

アクセセル

形状：ファイズアクセセル

主な機能：使用者の速度上昇

説明：アクセセルを起動後、ウエイクアップセツトアップでアクセセルフォーム発動。

アクセセルフォームは使用している間魔力を消費し続けるが移動速度、攻撃速度、反応速度、詠唱速度など諸々の速度が強化される。

さらに、スタートアップする事で

10秒間(客観時間と体感時間を切り替え可能)だけならば1/1000秒の速度で移動する事が出来る。

また、アクセセルフォームを発動すると

エネルギー供給を円滑に行うためリンカーコアを露出する。

リンカーコアを露出するため命の危険が伴うが、

大気中の魔力を直接吸収できるため諸々の攻撃、防御が強化される。

本来、バリアジャケットを装着した上で使用するものだが、生身のままでも使用できる。

しかし、その場合はスタートアップも含め
全てのスピードが格段に落ちる。

さて、デバイス説明も終わったし、終わりにすんぞー！

裕樹「まてや」

なんだ？

裕樹「なんで俺一人で隊長陣を全滅してんだよ！」

だって、これくらいできないとこの後地獄だよ？

裕樹「なん…だと…」

…さて、主人公もおとなしくなったので例のアレ行きまーす。

次回も、魔法少女リリカルなのはStrikerS 漆黒の守護
神に

ファイナルフュージョン承認！

第七話「模擬戦終わって」(前書き)

すみません。タイトル変わってます。

あと、OPのイメージはこれで

http://www.nicovideo.jp/watch/
sm6180914

第七話「模擬戦終わって」

「あゝ疲れた」

自動販売機で買ってきた缶コーヒーを飲みながら呟く。

「それって模擬戦で負けた方が言う台詞やないの？」

第一、裕樹君本気出してないやん！」

疲れながらもきちんとツッコミするはやて。お疲れさんです。

『確かに…』

そしてFW。多分何があったか理解できてない。

しかし俺の様子から本気で無かった事は理解したらしい。

なかなかの観察力だ。ここの試験運用が終わったら部下に欲しいな。

「本気を出さないから疲れるのさ。」

発進しようとする車を抑えているようなもんだからな」

「なら本気を出せばいいではないか」

シグナムが言ってくる。

この人は最初にやられたから復活するのも早いな。

「それだと模擬戦にならん」

きっぱり言っておく。

「…斉藤、なんでそう言えるんだ？」

眉間に皺を寄せ、脅すように聞いてくるヴィータ。

FWが若干引いている。

しかし、俺には身長差で上目づかいにしか見えない。

「ただ単に戦闘方法の相性が悪いんだよ。
それと、斉藤はやめてくれと言ったはずだぞ、ヴィータ」

「うっ…わ、わかったよ…裕樹…」

顔を真っ赤にしながら言うヴィータ。
やはり可愛い。

「よろしいでしようか？」

手を上げ、律義に許可を乞うティアナ。
FWに好きなように呼んでいいと言ったがティアナはあまり変わらなかつた。

「ああ、いいぞ。」

「ありがとうございます。」

『相性が悪い』と言つのはどついつ意味なんですか?」

「あ、裕樹さん私も気になります!」

「」(コクコク)「」

ティアナに続きスバルが元気よく言い、エリオとキャロが頷く。

「それについてはなのはとフェイトが起きたらにするよ」

なのはとフェイトはまだ伸びている。

「おっと、説明するなら許可貰わないと...」

「許可?...誰にや?」

「レジアス中将ですよ」

通信の準備をしながらはやての質問に答える。

「なんやて!？」

「そりゃ、地上本部で教導してたから経過報告とかしてたし、捜査とかにも協力してたから。」

「んで、その中に機密があつたら不味いから許可を貰う訳だ」

「許可してくれるんやろか…」

「ああ、俺が言う分には大丈夫だな。」

「しかしはやてからだと問答無用で通信を切りそうだな。」

「…まだあの人のエリート嫌いは治ってないしな」

「そうか…って裕樹君もエリートちゃうの?」

「今は、ね…」

「それに長い事地上にいたからレジアス中将も信頼してくれてる」

「例外、って訳やね」

「ま、そんなとこさ…っと、繋がった」

現れた画面にレジアスの顔が映る。

「どうした、裕樹」

「ああ、ちょっと俺の戦闘方法について説明したいから映像の使用について許可を貰おうと思ってな」

「…残念だがお前の戦闘記録はすべて持ち出し禁止になってるいくらお前でも渡せん」

「そうか…口頭説明なら構わんだろ、レジアス」

「ああ、それについては一向に構わんだが、内容は考えるよ」

様「機密は流すな」である。

「わかってるさ、またゆっくり話そうや」

「ああ、それじゃ」

「じゃあな」

プツン…と言って画面が消えた。

「「う…ん…あれ、ここは？」」

消えたと同時に2人が起きた。

「ちょうどいいな、説明を始めようか」

はい、長い長い説明タイムはっじまってるよ

「まず、俺の戦闘方法から説明する。

地上での俺の役目は、

戦闘部隊が到着する前に敵陣へ呐喊。敵の大多数を撃破する。

その後、速やかに防衛ラインを構築し、部隊の補給経路の確保。部隊到着まで防衛。

敵に増援が現れた場合には部隊に防衛させ、再度呐喊。

敵通信士を発見した場合は速やかに無力化。出来ないなら増援の殲滅。

完了後、残りを殲滅する。

…ってのが俺の役割」

「な…なんちゅーか」

「無茶苦茶って言うか…」

「…危険？」

「「だな」」

若干呆れながら言う隊長陣。

ちなみにティアナは少し理解した様だが問題はスバル、エリオ、キヤロの3人である。

スバルは今にも倒れそうなほど唸っているし、エリオとキヤロは頭の上に「？」「？？」と浮かんでいる。

93

「まあ、そんな感じの事をやってたから

筋力、判断力、精神力、学習能力、適応力とかが極端に上がってなそんな感じで俺が出撃した戦闘で負傷者が一切出なかった事と

教導した部隊が生還する事から『地上の守護神』って二つ名がついた訳さ」

締め簡単にまとめる。

「じゃ、話も終わったし

食堂へ行こうぜ、腹減った」

「あ…うん、そやな
ほな、皆で行こか」

「「うん」

「「ああ」

『はいつー！』

そうして食堂に移動したんだが…
問題はみんなテーブルを囲んで食事した時に起こった。

『私（僕）達に戦い方を教えて下さい！』

F Wメンバーが息を合わせて言う。

…なのはが若干凹んでるぞ

「駄目だ、俺が教えるのは基礎がしっかりできた者だけだ
お前らはまずなのはの教導をクリアしろ」

FWが少しシユンとして食事を始めた。
こうなる事はわかっていたらしい。

…なのは顔が明るくなつた…前に俺の指導方法教えたらうに…

正直、1から教えたらキリが無いし、

俺が教えると個々の特徴を無くしてしまう恐れがある。

俺みたいなおールラウンダーは圧倒的に数が少ない。

おールラウンダーが1から教えると相手に負担が掛かってしまう。

だから個々の特徴が出てからその分野を教え、

サポート程度に他也教える。と言つのが俺の教導だ。

「「じゃあ私達に教えてほしいな」」

今度はなのはとフェイトか。

「お前等は…そうだな、教える事が沢山あるな

FWの訓練が終わつたら10分間模擬戦する事にしよう」

「「…ええ!？」」

「悪いが拒否権はないぞ」

「「はあ…」」

なぜ落ち込んだ、そっちから言っただろうが。

「で、お前等はどつすんだ？」

今度は俺からシグナムとヴェータに言う。

「「いや、いい」」

首をブンブンと横に振って拒否する二人

「そうか？じゃあ気の向いた時に声掛けてくれ」

そう言うのとホツ…とした顔をする二人が見えた。多分気のせいだろう。

「「じゃ、景気付けにアイスくれてやるよ」」

『!!!!!!!!!!!!!!』

どっかで聞いた事がある音がしたと思ったら
みんなの頭にエクスクラメンションマークが浮かんでいた。

『ほ、本当ですか?!?!?』

「ウチらが負けたから無しちゃうん?」

「『なし』って言っただけで誰もやらないとは言ってないぞ」

「『…私達が戦った意味は?』」

なのはとフェイトがそろえて言う。
しかし良くシンクロするなこの2人。

「お互いの实力を知る事が目的だったし、
欠点もわかったから十分意味はあつただろ?」

「あたしは裕樹の弱点とかわかんなかったぞ…」

「あー、あの時ヴィータはまだ伸びてたからな

わかんなくて当然さ」

そして頭を撫でる。

なんかもう決定事項になってる気がする。

「ま、後で模擬戦の様子を見てみるといいさ
敵の情報はあつた方がいいしな」

「確かに、今思えば私は斉藤の戦闘スタイルを知らないのに呐喊していたな。」

もう自分の失敗に気づいた人が1人。

「そ、何をしてくるかわからない敵に無暗に突っ込んだら駄目だぜ」

まあ、俺は関係なく突っ込むのが役目だったが。

「敵を殲滅しながら攻撃方法を後続部隊に伝える」ってのが任務だったりしたしな。

「じゃ、アイス持つてくるな…」

『はいー！』

嬉しそうだなあオイ

こいつらの為に買った物だし、喜んでくれるのはありがたい事か。

「うい、持って来たぞ

…どれ食べるんだ？」

『キャラメル味！』

満場一致ですね、わかります。

…なんか早く配らないと大変な事になりそうだな…
スバルは鼻息が荒いし、
エリオとキャロとヴィータはソワソワしている。
3人娘+ も待ちきれないようだ。

「ほい、これで全員分」

「あれ？裕樹さんは要らないですか？」

俺の前にアイスが無い事を不思議に思ったのだからうリインが聞いてきた。

「ああ、あまり甘いのは苦手だな」

「なんか悪いな〜」

「うん…」

「ちょっと、食べづらいかな？」

ヴィータやFWメンバーにも躊躇するような雰囲気が出てきた。

「おいおい、お前等の為に買って来たんだし、

明日からの景気付けでもあるんだから食べてもらわなきゃ困るぜ。

それに…早く食べないと溶けちゃうぞ」

全員に何か緊張感的なものが張り詰めた。確かに溶けたアイスは不味いからな。

「わかった。じゃあ、皆で頂きますや！」

皆、手え合わせて」

『いただきます』

皆吹っ切れた様子で食べ始めた。

全員の感想は「おいし〜」や「ほろ苦くておいしい」に始まり

「おいし〜…でも太っちゃいそ〜…でもおいし〜」

「うまい！はやての料理ぐらいギガうまだ！」などなど高評価だった。

ちなみに俺はザフィーラと

買って来たビーフジャーキー（ザフィーラ所望）を食べていた。

「かなり旨かった、礼を言う」と言われた。また買って来よう。

…まさかザッフィーに礼を言われるとは…若干感動した俺がいた。

ザフィーラとの食事を終え、戻る頃には皆アイスを食べ終わる所だった。

「「「あ、裕樹（さん）（君）「「「

「ん？どうかしたか？」

「いや、ただのお礼や」

「うん、おいしかったよ！」

「ありがとう、裕樹」

「ありがとうございます」

『ありがとうございました！』

全員からの感謝の言葉…ちょっと照れるな…

「いや、いいって事よ。」

それより明日からも頑張れよ！」

『うん！』

『はい！』

照れくさいが…これで絆が深まったかな？
物でつてのが嫌なところだが…ま、いいか。

こうして色々あった1日は終わって行った。

第七話「模擬戦終わって」(後書き)

作者の文章力の無さで訓練は次回持ち越しです。
すみません。

裕樹の戦闘適正ですが

ラグナロク・ミストルテイン使用時

防御系

物理防御… A (魔力リミッターと同期しているためランク変化あり)

魔法防御… A (同上)

攻撃系

至近距離… A (魔力リミッターと同期しているためランク変化あり)

近距離… A (同上)

中距離… A (同上)

遠距離… A (同上)

ラグナロク・ミストルテイン+アクセル使用時

防御系

物理防御… B (魔力リミッターと同期しているためランク変化あり)

魔法防御… S (同上)

攻撃系

至近距離… S + (魔力リミッターと同期しているためランク変化あり)

り)
近距離…… S + (同上)
中距離…… S (同上)
遠距離…… S (同上)

スターガオガイガー
S G G G 使用時

防御系

物理防御…… S S - (魔力リミッターと同期しているためランク変化あり)

魔法防御…… S S - (同上)

至近距離…… S S + (魔力リミッターと同期しているためランク変化あり)
近距離…… S S - (同上)
中距離…… S S - (同上)
遠距離…… S + (同上)

大体こんな感じですよ。チートですね。
模擬戦時にはオールBぐらいしか出してません。

アクセルフォームで魔法防御が高いのは
魔力の出力の上昇と周りの魔力吸収上昇効果のためです。

次回、魔法少女リリカルなのは S t r i k e r s 漆黒の守護神
に

ファイナルフュージョン承認！

「ラグナロク・ミストルテイン」

これが勝利の鍵だ！

第八話「訓練」(前書き)

かなり長いです。

今さらですが、ラグナロクはレイジングハートの様な律儀な女性型で、

ミストルテインは応答や緊急時以外はちょっと口が悪い男性型です。

第八話「訓練」

翌朝、かなり早く起きてしまった俺は自己鍛錬でもしようとして自分の教導服（黒ベースのオリジナル、見た目は野戦服）を着てシミュレーターの辺りまで来ていた。

しかし、先客がいたようだ。コンソールを叩いている。

「あ、裕樹さん！おはよう」

「なのはか、おはよう。…何してるんだ？」

「FWの訓練メニューを修正してたんだよ。裕樹さんは？」

「自己鍛錬でもしようと思ってな」

「あ、じゃあ試して貰いたい訓練メニューがあるから協力してくれないかな？」

「ああ、どうせ暇だしな…」

「ちなみに誰の訓練メニューなんだ？」

「難易度を下げてFWの、」

「難易度を上げて隊長陣の訓練メニューにしようと思ってるんだ」

「良いじゃないか、喜んで協力しよう。」

「で、俺は何をすればいいんだ？」

「まず、FWのメニューをやって正しいか評価。」

次に隊長陣のメニューをやって正しいか評価して欲しいの」

「了解。じゃ、始めようか」

その後、FWのメニューで1分動き、修正版でもう1分。隊長陣のメニューで4分、修正版でもう4分の計10分動いた。

さらに、なのはがお礼にと作ってくれた俺専用メニューでもう10分動いた。

「すごい裕樹さん！

あれだけのターゲットを1人で撃墜するなんて」

「別に大した事じゃないさ。

複数、同型のターゲットが出てきたら的を1つに絞って行動パターンを把握する事が重要さ」

「でも裕樹さんの専用メニューはそんな暇無いんじゃない？」

そう、俺専用メニューは

ガジェット？型が20体、？型が10体、？型が2体が一度に出て来る。

しかも動作S、攻撃精度Sと言う本物よりも強い状態でシュミレートしているため

まともに戦う事自体が難しい。

「確かに速くて戦えんが…

時間が無けりゃ作ればいい」

そう言って左腕のアクセルを見せる。

「…無茶しちや、駄目だよ…」

なのはが少し後悔を込め、悲しげに言う。

俺は、12の時に少しだがなのはにリハビリを兼ねて教導をしていた事がある。

その時のなのははとても気が滅入っていたため俺は教導は無理だと判断したが、本人の強い希望もあり、リハビリも兼ねて行う事にした。

お互い歳が近い事もあり、穏やかな雰囲気ですりハビリしていた。体の機能がある程度回復した頃にアクセルフィンやプロテクションの練習を始め、以前と同じぐらいに使える様になった頃にレイジングハートに任せ

なのはからは「まだ色々教えて欲しい」と言われ、高町家からもリハビリの手伝いを求められたが、ガオガイガーの姿で何度も教導していたし、地上本部の教導も多くなって来ていたので「俺の教導リハビリを待っている奴らが沢山いる」と言い、別れた。

しかし、レイジングハートに

「困った事があると思うから連絡先を教えて欲しい」と言われ

連絡先を覚えておいたのでその後もしばしば教導していた。

今のなのはは以前より強くなり、気落ちする事も無くなったが、たまに俺と2人だけの時に少し暗い顔を見せる。

俺の事を心配しての事だろう。

だが…

「お前みたいな無茶なんかしないさ。

…俺の心配をする前に自分の事を考える。

お前を助ける為に誰かが無茶するかも知れないんだからな」

なのはの頭を優しく撫でながら言う。

「うん…わかった…／＼／」

僅かに頬を染め頷くなのは。

うん、まだまだ可愛い子供だな。

「わかりやい…」

っと、フェイトとFW達が来たみたいだ」

隊舎の方から5人歩いて来ていた。

「あ…そ、そうだ！訓練メニューの修正のお手伝いありがとう！」

「良いつて事さ。

俺も暇だったし、デスクワークぐらいしかやる事無いしな」

「にゃはは…でも裕樹さんってどっちの分隊に入るんだろう?」

そう、実は俺には正式に所属している分隊が無いのだ。

「まあ、どっちに入っても困りはしないな」

そんな他愛も無い事を話しているとフェイト達が近くまで来ていた。

「…事をストライカーって言うんだよ」

FW達に何か教えていたらしいが
最後の方しか聞こえなかったな…

「ストライカーって何だ?」

気になった単語をなのはとフェイトに聞いてみた。

「うーん…簡単に言うと裕樹さんみたいな人の事」

「そうだね、モチーフにした人じゃないけど
裕樹がストライカーって言う事は間違いないよ」

「いや…詳しい内容について聞いたんだが…」

答えになってない答えに若干呆れてしまった。

「じゃあFWメンバー、さっきのおさらい」

『はいっ…』

どうやらFW達が教えてくれる様だ。

「ストライカーとは」

「どんなに困難な状況でも諦めず」

「また、その状況を突破出来る人を」

「信頼され呼ばれる言葉です！」

「きゃふ〜！」

FW(+1匹)達は素晴らしい息ピッタリな説明をしてくれた。

「説明ありがとう。」

…しかし、ストライカーには気を付けないといけない事があるな」

「ん？どんな事？」

「私も気になるな」

なのはとフェイトが反応した。

FW達も言葉の意味が気になる様だ。

「ストライカーが居るだけで味方の士気は格段に上がる。

だが、万が一にでも撃墜されれば味方の士気は低下。最悪の場合全滅も有り得る。」

だから、ストライカーは撃墜されない様に

戦況を判断しながら戦わないといけないって事になる。

それこそ「未来を予測する」ぐらいの、な」

.....

みんなが静かになる。

まあ、急にこんな事を言えばことうなるか。

「でも…」

「裕樹なら出来そうだよね」

『…確かに』

なのは、フェイト、FW達の意見は同じな様だ。

「やれやれ、他にもストライカーが欲しいんだがな…
っと、FW達の訓練はやらないのか？」

「あ…話し込んでしまった」

「そうだね、じゃあ訓練始めるよ！」

『はいつ！』

急いで準備するFW達。
元気だねえ…

マスター

《年寄り臭いぞ》

「（うるせえ、…こつちも準備するぞ）」

オールライト、マイマスター

《イエス、サー》

FW達はなのはの訓練で確実に強くなっている。

しかし、実戦となるときつい所がある。

出撃はまだないが、ドローンならまあ大丈夫だろう。

問題は奴らが十年前から動いた形跡すら無い事だ。

奴らが出てくればいくら管理局のエースが集まっていたとしても勝つ事はまず無い。

防戦で戦線維持が関の山だろう。

だからこそ、俺は機動六課に来た。

今、奴らと戦って確実に勝てるのは俺しかない。

ならば、俺がこいつらの…「守るべき者」の為の盾となり、矛となつて戦うだけ。

もちろん、戦い方も教えなければならぬが…

「裕樹さん！」

「こつちは準備出来てるよ〜！」

どうやら考え事をしている間にFW達の訓練が終わっていたらしい。

「ああ、今行く」

ふと思ったが、模擬戦は早過ぎる。
ここは魔力収束を覚えて貰うか…

そんな事を考えながら訓練所に歩いていった。

「じゃあ、模擬戦…といきたいが
2人には俺のプロテクションを壊してもらおう」

なのはとフェイトは首を傾げている。

「模擬戦じゃないのは嬉しいけど…」
「何の意味があるの？」

「まあ、やってみればわかるさ
制限時間は10分間、出来なければ次回に持ち越し…本気で来い
！」

言うと同時に左手を突き出し防御魔法を展開させる。

そのの見た目を一言で表せば『漆黒の壁』
なのはのプロテクションが黒くなった上に分厚くなり、
魔法陣を向こう側が見えなくなるまで重ね続けたものだ。

ちなみに、重ねた術式にはミッド、古代ベルカ、近代ベルカが含まれているため
ほとんどの魔法を防ぐ事が出来る。
もつとも、魔力を収束させていない攻撃なら関係ないが。

「わっ！…な、何？あの魔法？」

「わ、私に聞かれたってわかるわけないでしょ！？
…でも、多分プロテクションだと思う」

「ええ！？あれがですか?!」

「裕樹さん…すごくカッコイイです！」

FW陣はエリオ以外かなり驚いている。
…エリオ、いい事言った。今度なんか奢ってやる。

「これは…」

「すごい…けど！…レイジングハート！
スターライトブレイカー+、テンカウントダウン

やはり結界機能の完全破壊ができるスターライトブレイカー+を使
って来た。

リミッターが掛かって威力が落ちていてもプロテクションが破れればからいい判断だ。

6、5、4、3

だが…

2、1、0

「全力全開！スターライト！…ブレイカー！！！」

桜色の砲撃が漆黒の壁に激突する。
辺りの大気が唸りを上げ暴れ回る。

次の瞬間、着弾点から爆発し、大量の土埃を巻き上げた。

「これで…」

「なのは…ちょっとやり過ぎじゃないか？」

『裕樹さん！？』

三者三様の反応。

次はどんなリアクションをしてくれるんだろう？

「残念、まだまだ」

土埃が晴れると同時に言う。

「嘘?!」

「結界を壊せるのに?!」
「落ち着いて下さい、マスター」

「…あ、あれだけの爆発が起きたのに」

「…馬鹿げてるわ…」

「し、信じられません…」

「すごい！カッコイイ!!」

酷い言われようだ。

そしてエリオ、カッコイイしか言っていない様な気がするが
そんな事は置いといて、服でも買ってあげよう。

「だったら!…やあっ!」

ガキイーン!

フェイトがバルディッシュで斬りかかってきた。が…

「き、効いてない?!」

どうやらそのようです。

それにプロテクションとは思えないほどの強度です。
作戦の立て直しを推奨します、サー

私も同意見です、マスター

「うん、その方がいいね…」（フェイトちゃん）

「（何？なのは）」

「（あれ、どうやったら壊せるかな？）」

「（うーん、物理攻撃なら壊せると思うけど、用意してる時間も無いし…）」

「（じゃあ、だめもとで2人同時で砲撃しよう！）」

「（うん）」

（それは作戦とは言いません（サー）（マスター））

それぞれが砲撃体勢に入る。

…さっきの念話とデバイスの呟きが俺だけに丸聞えだったのは秘密だ。

「デivain！」

「プラズマ！」

直撃でもダメージは無いから何もしない。

「バスター！！！」

「スマッシュャー！！！」

ドゴオオオオオオン…

さつきよりも激しい土埃が巻き上がる。

『うわっ！』

F W陣が土埃に巻き込まれた。南無三。

「もうちょっと考えて撃つてくれよ、頼むから」

「じゃはは〜…」

「ごめんなさい…」

10分経過

《時間だ》

「さ、時間切れだ。今日はここまで」

そう言っただけなのに帰らせるように促す。

「じゃ、みんな帰る？」

『はい！』

こうしてなのは達の初訓練は終わった。

第八話「訓練」(後書き)

作者「はい、一週間ぶりです」

裕樹「なぜ遅れた？」

作者「クラブ活動がきついんだよ」

裕樹「ふ〜ん。まあ頑張れ」

作者「さんきゅ」

裕樹「なんか疲れたから三人娘に例のアレやってもらうか」

作者「そうだな…じゃあ、お願いします！」

なのは「次回も！」

フェイト「魔法少女リリカルなのはStrikers 〜漆黒の守護神〜に」

はやて「ファイナルフュージョン承認！」

第九話「ファーストアライト」(前書き)

うーん、うまく書けない…

今回は出撃までです。

あと魔法についてですが作者の妄想が入っているのであしからず。

次回、お待ちかねのSGGGが出ます。

第九話「ファーストアラート」

機動六課に来てから1週間が経った。

FW達はだんだん力を付け、実戦なら特に支障はないほどになった。隊長陣はと言うと、未だに俺のプロテクションを壊せていない。

あれから、なのはとフェイトに泣き付かれたであろうはやてが見に来たが、

「すごいなあ、裕樹君。これなら機動部隊を任せられるわ」と、笑いながら帰ってしまった。

…確か、まだ人が足りなくて誰もいないんじゃないか？

…1人だけで事務処理は勘弁だぞ…

ちなみに今はFW達が訓練をしている。

「はい、みんな集合！」

『はいっ！』

考え事をしている間に訓練は終わってしまったようだ。

クタクタだるうにFW達は元気良く返事している、すごいな…

つと、俺も行くかな。

ボキッ！

「あっ……」

ビターン！

何やら物凄い音がしたので行ってみるとスバルが見事にコケていた。

「痛ったた〜」

「大丈夫か？スバル」

「あ…はい、大丈夫です

けど、ローラーブーツが…」

「あゝ、見事に折れてるな」

「最近ガタが来てたからな〜」

「私のアンカーガンも模擬戦中に壊れちゃったし……」

確かにかなり傷んでいてカートリッジの給・排弾口が特に傷んでいる。

若干亀裂が入っているからジャムでも起こしたんだろう。あれじゃあもうまともに撃てないな……

「なのは、そろそろ頃合いじゃないか？」

「そうだね、デバイス無しじゃ訓練も出来ないし」

その会話にFW達は首を傾げる。

『何の話ですか？』

「それは後でのお楽しみ、さ」

「じゃあ皆、シャワー浴びてからロビーにいったん集合ね」

『はい！』

皆で喋りながら歩いていると一台の黒いスポーツカーが近づいてきた。

「あれ？ あの車って・・・」

あの車は…確かフェイトの車だったよな

「フェイトさん、八神部隊長」

「すっごくいい！」

「これフェイト隊長の車だったんですか？」

「うん、そうだよ。地上での移動手段なんだ。」

「良い車じゃないか…」

それよりもフェイト達はこれからどこか行くのか？」

「あ、うん。ちょっと六番ポートまで」

「教会本部でカリムと会談や、夕方までには戻るからな」

「カリムに会いにか…」

思わず渋い顔をしてしまう

「あはは、そういや裕樹君はカリムにスカウト受けてるんやっただな」

そう、聖王協会の騎士カリムは俺を騎士にしようとしている。

理由は、「古代ベルカの魔法を行使できる」事と

「古代ベルカの魔法とミッドチルダ式の魔法を混合して使用できる才能を有している」事らしい。

正直、俺は騎士に興味は無いし、正々堂々の勝負なんて数えるほどしかしていない。

騎士道なんか無視した戦い方をやめる気は無い

(そっちの方が効率が良いからなんだが…)

なのにカリムはしつこく誘って来る。

最初は無理難題を吹っ掛けて逃げていたが、それを解決するように
なってしまったので
今は逃げるのにも一苦労だ。

「はやて、頼むから俺を売らないでくれよ？」

「わかってる。ウチかて貴重な戦力を奪われとうないしな」

「よろしく頼む」

ちなみにこの時、
はやてが「やたっ！これで好感度UPや！」等と思っていたのは秘
密だ。

「私はお昼前に戻るから、お昼ごはんは皆で食べよっか。」

『はいっ！』

「それじゃ、気をつけてね。」

「うん、わかってる。」

「それじゃ、行ってきます。」

皆でフェイトの車が去って行くのを見守る。

「じゃ、行くか」

『はいっ！』

.....

俺は特にシャワーを浴びる必要が無かったのでロビーでくつろいでいた。

するとエリオだけやって来た。

「ん？エリオ、お前だけか？」

「あ、お…裕樹さん。…そうみたいです。
皆が中々出て来ないので僕だけ先に来ました」

「ん。時間を守る小さな騎士君にプレゼントだ」

そう言っつて自動販売機で買ったジュースを渡す。

「え…いや、悪いですよ！奢りなんて」

「そう固くなんなって、これはねぎらいと感謝の気持ちだ。
それに返されたって俺は飲めん」

「感謝…ですか？」

ジュースを飲みながら聞いてくる。

「ああ、俺のプロテクションで素直に感動してくれたからな」

「あのプロテクションってどうやって作るんですか？」

「ん〜、いずれ教えると思うが…よし、理論だけ教えてやる」

「本当ですか?!」

「まあ、理解できないと思うが…理解できてもまだ使っなよ。」

「はい、約束します」

「ああ、男の約束だ。」

「じゃあ始めるぞ」

簡単な授業の始まり〜

「まず、プロテクションはどうやって作られる？」

「あ、簡単にでいいぞ」

「えっと、魔力を障壁に変換して展開する…こんな感じですか？」

「合格だ。…変換と言う事はその方法によって絶対的な性能が変わるんだ。」

「効率が悪ければ性能は下がるし、効率が良ければ性能が上がるって事だな」

「じゃあ、お…裕樹さんのプロテクションは変換効率がいいんですか？」

「まあ、平均よりはいいが普通だな」

リミッターが掛かっているからそんなに効率は良くないんだよな。

「じゃあ、なんであんなに強固なプロテクションが？」

「展開までの過程で色々弄ってるんだよ。たとえば多重展開とかな」

「…予想してたよりもシンプルなんですね。てっきりブーストでもしているのかと…」

「ブーストしたら細かい制御が出来なくて意味無いぞ？ シンプルだからこそ使い勝手がいい。対応策も練られやすいがそうやすやすと壊せる代物じゃない。でも油断は禁物。実際にプロテクションを一瞬で破壊された事がある」

「ええ！？アレをですか！？」

「ああ、あの時は肝を冷やした…
つと、残りが来たな」

寮の方から駆け足でやって来るのが3人（+1匹）

『すみませーん！おくれましたー！』
「きゅく〜」

「いや、今来たところさ。それより移動するぞ」

『はいつ！』

.....

そんなこんなでデバイスルームに到着。

「じゃあ、皆のデバイスを紹介するね」

若干嬉しそうに言うのはシャーリー。

デバイスがらみだと妙に気合いが入るからな、コイツ。

「わ〜」

「これが私達の新デバイスですか？」

ちなみに俺のデバイス達は自分で整備している。

機密事項があつたりするし、何よりシャーリーに預けたくない。
なんか勝手に分解し^{バラ}そうだし。

「そうで〜す！設計主任は私。

協力してくれたのは、なのはさん、フェイトさん、レイジンググハ
ートさんにライン曹長」

「あれ？裕樹さんは協力してないんですか？」

「ん？…ああ、まだ協力はしてないが
アップデートの時には協力する予定だ」

「「そうですか…」」

しよんぼりする2人。

そして…

「エリオ、キャロどうした？」

「あ、いえ。」

僕達のストラーダとケリユケイオンは変化がないのかな…って

あゝ、こっちは中身を戻したんだっただか？

「ふふ、違います。」

変化がないのは外見だけですよ」

「リン曹長」

「はいです！

二人はちゃんとしたデバイスの使用経験はなかったですから、
感触に慣れてもらうために基礎フレームと最低限の機能だけ渡し
てただけです」

「あ、あれで最低限！？」

「本当に？」

あれだけでも子供の2人には結構な力だからな…

「みんなが扱うことになる4機は、

六課の前線メンバーとメカニックススタッフが技術と経験のすべてを集めて完成させた

最新型、部隊の目的に合わせてそしてエリオやキャロ、

スバルにティア、それぞれの個性に合わせて創られた文句なしに最高の機体です。

この子供たちはみんな生まれたばかりですが色々な人の思いや願いが込められやっとな完成したです。

ただの道具や武器と思わないで大切にそれでいて思いっきり限界まで使ってあげて欲しいです」

「うん、この子供たちもそれをきくと望んでるから」

『はいっ！』

「どこかの機動部隊隊長さんも、ですよ」

「わかっているわ」

ありがとうございます、マスター

《つつつても俺達は元々武器だったろうが…》

「まあ、いいだろ。」

今は俺のデバイスだ、違うか？」

《ま、そうだな》

「そんな感じで整備も任してくれるとありがたいんですが…」

「嫌だ」

同じく

《俺も》

「うう…」

「泣いても駄目だ。こいつらの中には機密がたっぷりあるんでな。ちなみにどれか1つでも…と言うより俺以外が勝手に弄ったら機密保持の為に抹殺しないといけなくなるんだが？」

『ええ?!』

「そんなに重要なものが入ってるんですか？」

「教導のデータやら色々な」

『はあ…』

皆が若干呆れ気味になってしまった。

しかしその時「ウイン」という機械音がした。

「みんなお待ちせ」

「ナイスタイミングです。」

「ちょうどこれから機能説明をしようかと」

「もう、すぐ使える状態なんだよね？」

「はいっ！もちろん」

「まずはその子たちみんな何段階かに分けて出力リミッターを掛けるの。」

「いちばん最初はビックリするほどじゃないから、まずはそれで扱いを覚えて行ってね」

「で、各自がその出力を扱いきれるようになったら」

「私やフェイト隊長、リインやシャーリーの判断で解除していくから。」

「出力リミッターって言うとなのはさんたちにも掛ってますよね。」

「ああ、私たちはデバイスだけじゃなくて本人にもね。」

『え！？』

「自分たちにも・・・ですか？」

「能力限定って言うてね、うちの隊長陣はみんなだよ。」

「え〜と」

「ん〜？」

「スバル、キャロ…大丈夫か？」

「はあ…ようするにだ、」

部隊ごとに所有できる魔道師ランクの総計規模の範囲内に抑えるって事だ」

「あゝ…そ、そうですね。」

「あはは…」

「簡単に言つと裏技なんだけどね。」

「うちの部隊だとはやて隊長は4ランク、後は2ランクダウンかな」

「4つって…八神部隊長はSSランクだからAまで落としてるんですか？」

「はやてちゃんも色々苦労してるんです」

「そういえば裕樹さんのリミッターはどうなってるんですか？」

「あゝ、俺のは常にAランクになるように制限されてる」

「Aランクですか？」

「俺はAランクで教導した方がやり易いからな。」

それに魔力の変動が無いようにしないとデータが比べられないし…ってどうした？」

「いや…」

「あれでAランクって…」

「ちなみにあの時はAランクまで出してないぞ」

『ええ〜〜?!?!?!?!?!?!?!?!?!』

全員が叫ぶ。さすがにうるさい。

「あ、それと俺のリミッターの管轄は六課と地上本部になってる。それに自身の判断で数段ならリミッター解除出来るようになってる」

全員ポカーンとしている。

そりゃあ自分でリミッター解除なんてあり得ない事だしな。

「…ま、まあ隊長たちの話は置いて今は皆にデバイスの話。それぞれ訓練データを基準に調整してるから違和感はないはずだよ。」

だから午後の訓練で微調整しよっか」

「遠隔調整もできますから、手間はほとんどかかりませんけどね。」

「へえ…便利だな」

確かにそうですね

《俺らは自動調整だったか?》

「いや、俺が手動で調整してるよ
そうだったのですか?

《気付かなかったな》

「デバイスが気付かないって…」

シャーリーがなんか呆れてるが無視。
そんな事をしていると…

ビーンツ！ビーンツ！

けたたましい音が鳴り、赤いモニターと「ALERT」の文字が表示された。

つまり一級警戒態勢が発令された。

「グリフィス君！」

「はい、教会本部から出動要請です」

「なのはちゃん！フェイトちゃん！グリフィス君！こちらはやて！」

「状況は？」

「教会騎士団が追っていたレリックと思われる物が発見。場所は山岳地帯辺境付近で移動中」

「移動中！？つてもしかして！」

「うん、レリックはリニアレールの中。

車両は内部へ侵入したガジェットによってコントロール不能。

ガジェットの数は最低でも30体、その他の未確認タイプも出るかもしれない。

いきなりハードな初出動や。スバル、ティアナ、エリオ、キャロみんな覚悟はええか？」

「はいっ」

「よし、いい返事や。」

グリフィス君は隊所での指揮、リインは現場管制」

「はい！」

「なのはちゃん、フェイトちゃんは現場指揮」

「うん」

「裕樹君は…」

「機動部隊は念の為に…」

「ありがとう…」

ほんなら、機動六課フォワード部隊出動や！」

『はい！』

第九話「ファーストアライト」(後書き)

作者「ん〜…困った」

裕樹「どうした？」

作者「更新速度が落ちててな…」

裕樹「…ゆゆしき問題だ。

だが書け！」

作者「ですよね〜…ま、そうするけど」

裕樹「じゃ、いつものいこつや」

作者「オーライ！」

作者「次回も！」

裕樹「魔法少女リリカルなのはStrikerS」
↳ 漆黒の守護神
↳ に！」

作者・裕樹「ファイナルフュージョン承認!!!」

「SGGG」

これが勝利の鍵だ！

第十話「勇者王復活！」（前書き）

警告！

今までよりかなり長い上に、構成能力が著しく低下しているのでグダグダです。

空山さんの期待に答えられている気がしません…

第十話「勇者王復活！」

機動六課FW部隊及び機動部隊は
ガジェットに占拠されたリニアレールにへりで急行している。

もちろんFW達はこれが初めての実戦である。

その事を心配してかなのはがFW達に「練習通りにやれば大丈夫」
的な事を言っていた。

その言葉を聞いて、スバルとティアナは肩の力が抜けていたが、
幼い事もあってかエリオとキャラは力が抜けていない。
キャラに至ってはさらに緊張している。

そんなキャラを心配してかエリオが声を掛けるが、あまり効果がな
いようだ。

このままだと流石にマズいので声を掛けるとしよう。

「エリオ、キャラ」

「はいっ!」

「はっ、はいっ!」

「いつも通りにやればいい。出来ないのに無理して戦い続ける事も
無い。」

お前らには隊長達や俺が付いてる、何かあっても俺達が責任を持
ってやる。

だから何も気にせず…思いつきり暴れてこい!」

ちょっと強引だが発破を掛ける。

『…はいっ!』

どうやら成功したみたいだ。

「あたし達も頑張る!」

「ええ、負けてらんないしね!」

スバルとティアナまで気合いが入った様だ。

これは嬉しい誤算だ。

そして数分後、現场上空に到着した。

なのはとフェイトが周辺空域に展開しているガジェット?型を殲滅する事になり、

なのはがヘリから出撃(フェイトは別行動だったので後で合流するらしい)する時に

飛び降りながらバリアジャケットを装着した。

いくら航空魔導士と言ったって危険過ぎる。

…FW達が真似するだろう、やめて欲しいものだ。

…もちろんFW達は飛び降りながらバリアジャケットを装着した。

その後の戦闘は実に収穫があったが、FW達にとって危険な物でもあった。

リニアレールの付近にはAMFが展開されて魔法行使が出来ず、F

W達は全員苦戦していた。

しかし、スバルとティアナは見事なコンビネーションでガジェットを殲滅していった。

エリオとキャラコのコンビネーションは若干難ありだったが、経験不足から来る物なので仕方ない。

しかし、運悪くあまり見かけない？型に強襲されてしまった。

？型の攻撃でエリオが谷底に放り出された時はマズい思ったが、キャラコがレアスキルの制御に成功、真の姿になったフリードと共にエリオを救出した。

その後、エリオがキャラコのサポートを受け見事？型を撃破した。

他のガジェットも殲滅され、

レリックも無事回収が完了し無事に任務は達成された。

「なあ、ヴァイス」

「なんだ、旦那」

「旦那って、歳はお前の方が上だろ…」

…この部隊って何でもありなんだな…」

「…ビックボスの方が凄まじいだろ…」

何故俺がビックボスと言われているかと言つと、

原因はクロノのデバイス、デュランダルとレジアス中将だ。

クロノに喧嘩をふっかけられたので軽く伸してやった時、

「ビックボス、お止め下さい。これ以上はボスが死んでしまいます」

と、言ったのだ。

そこまではまだよかった、しかし運悪くレジアスに聞かれ、
奴がからかい半分で言っていたらいつの間にか地上本部全体に広が
ってしまった。

新人達は知らないが、25歳ぐらいの局長と、同期の奴らは殆ど知
っているだろう。

まあ、戦闘時ぐらいしかそう呼ばれないし、

俺がそれを嫌がっているのも知っているから呼ぶ奴はそうそういな
い。

言ったとしても酒の肴程度だから構わないが。

「それもやめろ」

「へいへい…」

…また言うだろうなコイツ。

まあ、それが良いところでもあるのだが。

「それより回収の準備をしるよ?」

「残念ながら、もう出来てますぜ?」

「流石、仕事が早いな」

〔ヴァイス君、回収お願い〕

「了解しました。ハッチ開けます」

その時、緊急回線でモニターが表示された。

「こちら本部！FW部隊、機動部隊に緊急連絡！」

「どうした！」

「未確認物体がそちらに向かっています！数、50！」

「ちっ！…スターズ分隊、ライティング分隊は至急へりに戻れ！」

「未確認はどうするの?!」

「FW達は消耗し過ぎだ…俺が出る。

なのはとフェイトはへりの防衛を！」

「う、うん…」

「1人じゃ危ないよ裕樹！」

過保護(?) だなあ、フェイトは。

しかし、今は時間が無い。

「…ヴァイス！回収急げ！」

「了解！」

『裕樹 (さん) ！』

心配するFW達と隊長陣をよそに魔力を収束する。

「機動01、斉藤裕樹！出撃する！」

イエス、マイマスター

《バリアジャケット展開》

久しぶりにバリアジャケットを展開した気がする。

ちなみに俺のバリアジャケットは

騎士甲冑とバリアジャケットが混ざっているため物理攻撃にも強い。
バリアアーマーと言った方が正しいかも知れない。

リニアレール付近に着地し、敵を観察する。

形こそガジェットだが、カラーリングが白黒になっている。

それだけではありません、マスター

《性能が段違いだ。それにAMFも強力になってるぞ》

「恐らく別の組織だろうな…」

さて、行くか…」

未確認は何故か地上型だけだったが、性能が高い為侮れない。

「ラグナロク、ミストルテイン

戦闘を記録しておけ」

イエス、マイマスター

《とつくにやっってるよ》

「ならいい…戦闘開始！」

SideFW部隊

「裕樹さん、大丈夫かな？」

「ティアはどう思う？」

「ん〜…裕樹さんだから大丈夫だと思うけど…」

「でも、情報を見る限りかなり手強いみたいです…」

スバルとティアナが話している所に
ラインが割り込む。

「皆が戦ったガジェットに酷似してるらしいですが…
性能が段違いらしいみたいです…」

「僕、心配になってきました…」

「私も…」

「きゅ〜」

「確かに心配だね…」

「じゃあ、私がサーチャー出してみようか？」

『フェイトさん！なのはさん！』

「お願いしますです〜」

「じゃあ、レイジングハートお願い。」
イエス、マイマスター。サーチャー射出、戦闘記録開始

数秒後、全員の前にモニターが表示され、現在戦闘中の裕樹が映った。

「ふっ！はっ！」

裕樹がラグナロクを振る度、未確認が撃破されていく。

「す、すい…」

「裕樹：無理してないかな？」

「…ティア？」

「…やっぱり馬鹿げてるわ」

「カツコイイ…」

「うん…」

「きゅく〜！」

誰の反応か大体わかると思うが、
上からなのは、フェイト、スバル、ティアナ、エリオ、キャロ、フ
リードである。

「敵20撃破。攻撃パターン50%解析完了」

「《しかし、めんどくさい相手だな。

動きはシュミレーターの方が上なのに、動き方がどうも人間くさい。

しかもAMFが強力になってるから下手に魔法が使えない。》」

「ああ、まったくなっ！」

言いながら一体が撃破される。

「…こりゃあいつ持ってきて正解だったな…」

裕樹がそう呟いた時、本部から通信が入った。

「こちら本部！敵増援確認！数、10！

さらに巨大な反応あり！数、1！」

「おいおい、勘弁して欲しいな全く…」

「「裕樹さん！援護に行きます！」」

なのはとフェイトがシンクロして言った。

「馬鹿！お前らには無理だ！

それにお前ら隊長だろうが！自分の部隊を見てろ！」

「「じゃあ、何すれば良いの?!」」

「何もすんな！何かあったら連絡しろ！」

そう言って通信を切られてしまった。

「裕樹…」

「…とりあえず、戦い方を見てよっか」

『はい(です)…』

side 裕樹

「埒があかないな…」

「ミストルテイン！ヴァリアブルシューター！」

《Variable Shooter》

通常よりもかなり濃度を上げ、多層仕様にした物を40個用意する。
かなり集中力が必要なので足を止めなければならぬ。

…今度ミストルテインに圧縮プログラムを入れよう。

「シュート！」

ドガッ！ビキッ！

ドォーン！

「…如何にも爆発って感じだな…」
「テンプレと言うやつですね？マスター」
《まあ、全弾命中・全機撃墜だから良いんじゃないか？》
「まあな…」

ウオオオオオオン！

「おっと、親玉のお出ました」

重低音が辺りに響き、その場にいた全員が音の出所を見る。

「「え…」」

『あ、ああ…』

「おいおい…」

そこにいた物は、紫がかつた人型の機械…
…ゾンダーだった。

「あれは10年前に消えたはず！」

「なんでまた、しかも今頃！」

なのはとフェイトが悲鳴を上げるように言う。

「ヴァイス！FW部隊を全員回収してこの空域から一刻も早く脱出しろ！」

「了解！だが、旦那はどうすんだ?!」

「そつだよ、裕樹さん！」

「あれは人が勝てる相手じゃ無いんだよ！」

「わかってるさ！離脱するまで引きつける」

「駄目だよ、裕樹！危険過ぎる！」

「話してる隙は…っ！」

ゾンダーが触手で攻撃して来たがラグナロクで切り裂く。すると、切った部分から再生した。

「早く行け!…ヴァイス！」

「了解!…隊長さん方、失礼！」

『きゃあっ!』

ヴァイスになのは達を強制収容させ、離脱させる。

すると、ゾンダーは離脱するへりに数本の触手で攻撃を開始した。

「させるかつ！」

ミストルティンを抜き、ホーミング弾を撃ち出す。

へりを攻撃しようとした触手を全て破壊され、

ゾンダーはへりへの攻撃を諦め、俺に攻撃を集中し始める。

「ちっ！…ラグ！」

了解、存在ソルン意義展開

次の瞬間、ゾンダーの触手を攻撃していたラグナロクの刀身が輝き、切っ先に触れた触手が根元まで消える。

「うわー、すごい…！」

「確かに、スバルの言う通りね…！」

「カ、カツコイイ！」

「…エリオ君、さっきからそれだけしか言ってない…！」

…キャラ、頑張れ…

ゾンダーから意識を逸らしているとデバイスから警告を受ける。

マスター！未確認、増援確認！数、10！

《ゾンダーから高エネルギー反応感知！》

「家電粒子砲！（誤字にあらず）…冷凍砲もか！」

見上げればゾンダーが両手をこちらに向け、発射準備をしている。

『裕樹（さん）！！』

ヘリのハッチが開いて、FW部隊が姿を見せる
離脱しろって言ったのになあ…。

…そろそろあいつの出番だな…

「スターガオカイガー
S G G G、ウェイクアップ！」

Wake Up

「ラグナロク、ミストルテイン！ウエイトモード！」

オールライト、マイマスター

《バリアジャケット解除》

『なっ！』

戦闘中にバリアジャケットを解除するなんて正気じゃないからな…

「フュージョン！」

Fusion

裕樹の魔力光が緑色に変化し、体を包む。

光が弾け飛ぶと同時に裕樹が名乗りを上げる。

「ガイッ、ガー！」

白い体、胸に金のライオンがある高さ2m程のメカノイド…ガイガ
ーが姿を表す。

「ガイガークローツ！」

腰のバーニアを吹かし、未確認とゾンダーに肉迫する。

「おおおおおっ！」

行きがけの駄賃に未確認を撃破。

その勢いのままゾンダーの腹部に一撃を叩き込む。

ウオオオオオオン！

ゾンダーが唸り、エネルギー反応が消える。

しかし、腹部はものの数秒で修復される。

「ガオーツ！マシン！」

拳を振り上げ上空に跳び上がる。

それと同時に地中からドリルガオー、

リニアレールの路線からライナーガオー、

空からステルスガオー？がゾンダーに轢き逃げアタックをかまして
集まる。

「ファイナルフュージョン！」

Program Drive

ガイガーが回転し、EMトルネードが発生する。
ガオーマシンはその中に入っていったが、ゾンダーは弾かれ、様子を窺っている。

中では、ガイガーを中心にガオーマシンが回転している。
胸のギャレオンの口が輝き、合体が始まる。

ガイガーの腰が180度回転し、つま先が閉じる。
それと同時にドリルガオーが変形し、ガイガーの足を包む。
中では、ロツク機構が働き、ガイガーの足を固定する。

次にガイガーの腕が背中に回り、トンネルのような空洞が現れる。
そこにライナーガオーが突入し、固定される。

今度は、ステルスガオーがガイガー目掛けて急降下し、
さつき変形した腕部の固定機構でストップする。
さらに嚴重にロツクされ、背中の固定が完了する。

ライナーガオーが斜めに持ち上がり、
ステルスガオーから胴体に固定するための鬚たてがみが
胸部のギャレオンに装着され、ステルスガオーの固定が完了する。

ライナーガオーから腕部が降り、ステルスガオーにある腕部と接続
される。

その後、ハッチが開き拳が回転しながら出てくる。

ガイガーの頭部に黒い兜が装着され、マスクが装着される。
そして、目が輝き、額のGストーンが迫り出し、輝く。

そして、拳をぶつけ、離しながら自身の名を叫ぶ。

「ガオ！ガイ！ガー！」

高らかに叫ぶと同時にEMトルネードが晴れ、スターガオガイガーの姿が現れる。

ガオガイガーはファイティングポーズを取る。

「来いっ！」

その言葉と同時にゾンダーが攻撃を仕掛け、機動六課初のゾンダーとの戦闘が始まった。

sideFW部隊

「わあー！カッコイイねっ！エリオ！」

「はい！スバルさん！」

「：盛り上がってるわね、あっち」

「はい：でも、すごいですね、アレ」

モニターからは、ゾンダーを圧倒するガオガイガーの姿が映っている。

その姿をなのはとフェイトは食い入るように見つめていた。

「…なのは」

「…うん」

マスター、解析結果、90%の確率で彼であると判断されました

「やっぱり…」

しかし、彼が生きていたとは…

しかも、同じ職場とは…世間は狭いですね、サー

「確かに、驚きだよ…」

「隊長？どうしたんですか？」

深刻な顔で話している隊長陣に質問するティアナ。

「ああ、ティアナ。何でもないよ」

「それより良く見ておいて、

あれがストライカーのモデルだよ」

「裕樹さんが…ですか？」

「うん」

「まさか本人だとは思わなかったけどね…」

またモニターを見始めた隊長陣に習い、裕樹の戦闘を見始める一同

だった。

side 裕樹

「フロントムリング！プラス！」

右腕を突き上げ、フロントムリングを追加する。

「ブロウクン！フロントオオム！」

撃ち出された右腕は正確にゾンダーの顔を撃ち抜いた。

ガシユン！プシィィー…

エアの音は良い、男のロマンだ…

ウオオオオオオ…

などと言っている内にもう修復してやがる…

荷電粒子砲と冷凍砲をこちらに向け、発射準備をしている。

時間が無いので防ぐことにしよう。

「ウォールリング！プラス！…プロテクト！」

そこまで言った所でオレンジと青の光線が迫ってきた。

「ウオオオオル！」

突き出した左手の前で光線が衝突する。

しかし、数秒で星形に歪む。

「おおおおっ！」

さらに突き出し、跳ね返す。

ウオオオオオ
…

ウォールリングを戻し、ゾンダーの動きが硬直している間に接近して拳を叩き込む。

「はああああっ！」

ガシンツ！ベキンツ！

「ドリルニー！」

ギユイイイイイ！

ベキベキベキ！バキンツ！

膝のドリルで胴体に大穴が空いた。

これでゾンダーは暫く動けないだろう。

ダメージも蓄積しているようだし、一気に決める！

「ヘルツ！アンドツ！ヘブンツ！」

右手に攻撃の力、左手に防御の力を集中させる。

右手が赤い、左手が黄色い光に包まれる。

最近はあまり使っていないから不安だったが、心配無い様だ。

「ゲム・ギル・ガン・ゴー・グフォ（2つ力を1つに）…」

両手を合わせる為、

攻撃のエネルギーと防御のエネルギーが反発し手の間に稲妻が走る。

「ふんっ！」

両手を合わせた瞬間、EMトルネードがゾンダーを拘束される。

こうなってしまうえば敵は何も出来無い。

「おおおおっ！」

背中のスラスターを全開にして、

ゾンダーの弱点…コアを引き抜きにかかる。

「ああああっ！」

ベキンツ！

「はあああっ！」

メキメキメキ…

「てりやああああっ！」

ブチッ！

ドオオオオオン！

しぶとく残っていたパイプが切れ、
数瞬後残された胴体が盛大に爆発した。
しかし、まだ抽出したコアの浄解をしなければならない。

コアを浄解しなければまた行動を始めてしまう事と、
人が取り込まれている為である。

キイイイイン…

甲高い音と共に優しい緑色の光が辺りを包む…

「クーラティオー！」

「テネリタース…コクティオー…サルース…コクトウーラ！」

コアの姿が歪み、本来の姿に戻っていく。

「…コイツは…ジュエルシード…」

本来ならば人が出て来るはずだが、人がいない…

「どうやら、厄介な事になりそうだ…」

『裕樹（さん）！』

なのはとフェイトが傍に降りてくる。

「大丈夫…っ！それは…」

「ああ、間違い無くジュエルシードだ」

「…とりあえず、いろいろ話がしたいからへりに戻って？」

「わかってる…期待するような説明は出来ないがな」

めんどくさい事になったなあ…などと思いながらへりに戻る裕樹だった…

第十話「勇者王復活！」（後書き）

作者「ガオガイガーの出番4/1以下でした。

申し訳ない……」

裕樹「…文才無いのな」

作者「うっ！…一応、自信はあるんだけど…」

裕樹「まあ、いいや」

作者「うっ…」

裕樹「作者はほつといて…」

次回も！魔法少女リリカルなのはStrikerS 漆黒の守護神〜に！

なのは・フェイト・はやて「ファイナルフュージョン承認！」

裕樹「な、なんでいるんだ?!」

なのは・フェイト・はやて「私達が勝利の鍵だ？」

第十一話「過去」(前書き)

最初の頃、ファンフィクションのFFを
ファイナルフュージョンのFFだと思ってたRAGです。

だって、ねえ？

ガオガイガーでFFって言ったらねえ？

…え？「別に仕方無くない」？

…ですよね〜

第十一話「過去」

「FW、ハッチ付近を少し空けてくれ」

『はい!』

ブースターとスラスターを吹かし、位置を微調整しながらFWが空けてくれたスペースへ着地する。

「スター、フュージョンアウト」

Fusion out

スター（スターガオガイガーの略称）が答えると同時に

ガオガイガーの装甲が淡い緑の光に包まれ、消えた。

「ふう…スター、今回の戦闘でのダメージのレポートを作成。

GGGにも送信しといてくれ」

オールライト、マイマスター

そこまで済ませた所でのなのはとフェイトも戻ってきた。

「レイジングハート」

「バルディッシュ」

オールライト、マイマスター

イエス、サー

「一言」言っただけでバリアジャケットが解除される。
流石、と言っべきだろうな。

(あれぐらい私達にも出来ます)

《(指示の行き違いがあると不味いからやらなかったただけだ)》

「(わかってるさ、俺達はそれでいい)」

若干、ムツとして抗議する3デバイス(アクセルは基本無言)を宥めておく。

「裕樹さん、聞きたい事があるんだけどいいかな？」

「答えられる範囲なら、な」

「…機密に関わる事もある、って事？裕樹」

「まあ、な…」

その前に、FWの質問から受けようか。

アレに興味があるだろうし「斉藤裕樹一尉、通信が入っています」
…っと、誰だ？」

通信のモニターが表示され、通信相手が表示された。

「約一週間ぶりだな、裕樹」

「レジアスか…」

「お久しぶりです、マスター」

「GGGもか、と言う事はやはり…」

「ああ、ゾンダーについてだ」

「だろうな…地上の方は何かあったか？」

「いえ、Z0ゼロが感知されたのはそちらのみで地上は何もありませんでした」

「そうか、よかった。」

…レジアス、地上も対ゾンダーの準備を」

「わかった」

「それと…レジアス、陸士00部隊を機動部隊に入れてもいいか？」

「00部隊か…良いだろう、お前の部隊だしな。」

それに、01～09部隊が地上にいれば大丈夫だ」

「ありがとう…」

G G G、00部隊の武装にG装備を追加だ。

あと…Gコートシステムは出来ているか？」

「G装備追加、了解。」

Gコートシステムは完成していますが、個々に調整しなければ使い物になりません」

「だろうね…00部隊の分はやってあるんだろう？」

「はい、数時間前に調整が完了しました。」

マスター、「機動六課」の分も…ですよ？」

「ははは、わかってるじゃないか。」

…調整前のデータをくれ、調整は双方向でやる」

〔了解です、マスター〕

「それと…勇者ロボ、ハイパーツール群はどんな感じだ？」

〔まずは勇者ロボから…〕

氷竜・炎竜・風龍・雷龍は2日後に完全修復、即戦闘可能です。

…色々言っていましたでしたが纏めると「早く会いたい」そうです。

ボルフォッグ・ガングルー・ガンドーベルは修復は完了。

現在はプログラムのチェック中、こちらは1週間ほど先になりそうです。

ゴルディーマーグですが、損傷が激しかった為に修復中

…と言っよりボディーを作り直していますので1ヶ月ほど掛かります。

マイク・サウンダース13世は2週間ほどで戦闘可能です。

次にハイパーツール…

ディバイディングドライバー・ガトリングドライバーはいつでも使用可能です。

イレイザーヘッドは現在増産中、やっとストックが溜まりました。

ディメンションプライヤーは現在、強化・修復中。

あと、2週間ほどで使用可能です。

ゴルディオンハンマーはマーグほど損傷が無かった為、3週間ちよつとで使用可能です。

カーペンターズは数が無いのでしばらく使用は控えて頂きたいです。

グラウンドプレッシャーは…4週間ほどで全サイズ使用可能です」

「ありがとう、出来るだけ急いでくれ。

…GFGの方はどうなってる？」

「GFGは最終段階へ入り、計画より5%早く進んでいます」

「…と言つてもなあ…」

私の耐久度の限界が心配ですね

スターガオガイガーは、ガオガイガーの宇宙戦仕様…つまり出力強化型だ。

しかし、両翼のウルテクエンジンの出力の細かいブレの為にしばしば装甲の固有振動数などに干渉し、当初の耐久年数より短くなっている。

元々、長い間使用する予定ではなかった為、仕方ない事ではある。

「そこはマスターが何とかして頂けると信じていますよ」

「丸投げかい…」

まあ、出来る事はやっているから信じるしかないな」
どうか無理はなさらない様に

「さて、私はそろそろ準備に入るぞ、裕樹」

「では私も」

「ああ、よろしく頼む」

そう言って通信を切る。

「すまん、時間が掛かった。

…じゃあFW、質問あるか？」

「じゃあ、私から…」

「最初はティアナか、何だ？」

「えーっと…さっきの通信でも言っていたゾンダーって何でしょう
か？」

流石、FWの司令塔。

重要な所を突いてくる。

「…詳しく説明してもわからんだろうから簡単に説明するぞ…
あいつらは人のストレスに反応し、融合するプログラムだ。
ゾンダーは融合と同時に辺りの機械類を取り込み、成長する。
そして、完全体に成長すると…胞子を撒き散らし、世界中の人を
ゾンダー化する。」

さっき出て来たのは完全体の一歩手前だ、ああなれば大概の魔法
は効かなくなる」

「…もう一つ宜しいでしょうか」

「ああ、良いぞ」

「ゾンダーに対抗出来る人はどの位いるんですか？」

「…今んところは俺だけ、コア抽出、再生不能レベルまでの破壊もだ
な。」

足止め、破壊なら11人(?)いる。まあ、暫くは出突っ張りだ
な」

「ありがとうございます」

「はいよ…次は？」

「はい、はいっ！次、私！」

「『はい』は一回で良い…で、スバルは？」

「さっきのスターガオガイガーについて知りたいです！」

爛々と目を輝かせ詰め寄るスバル。
若干怖え…

「わかったから寄るな…

…スターガオガイガーは現状でゾンダーコアの抽出、及びゾンダーの殲滅ができる唯一の機体だ。

スターは二代目で、初代ガオガイガーの宇宙戦仕様、つまり強化改修版なんだ。

まあ、10回ぐらいしか宇宙戦はしてないが…話が逸れたな…

ガオガイガーの持つエネルギーにはゾンダーの持つエネルギーと反応してお互いに打ち消し合う性質があつて、

そのおかげでガオガイガーはゾンダーに対して圧倒的な力を発揮出来るんだ」

「す、すごいです！

…それって、私達なんかも使えたりするんですか？」

「適性があれば使う事が出来る筈だが…

まあ、適合したって戦い方が違えば駄目だしな。

お前らの中から使える可能性がある奴を選ぶんなら…スバルか」

「本当ですか！やった！やったー！」

「まだ使えるとは言つてねえぞ…って聞いてねえな、スバル…」

はしゃぐスバルをよそに若干手を上げエリオが口を開く。

「じゃあ…次は僕で…」

「うっし！ドンと来い！」

スバルのテンションが異様に高い事と、

ガオガイガーの適正が低い事がショックだったのだろうかテンションが低い。

…適正が無くても使えたりする奴が居たりするが教える必要も無いだろう。

「スターガオガイガーが使える技について聞きたいです」

「OK、OK…」

スター自体が使える技は、

腕を回転させて敵に打ち出す「ブロウクンマグナム」

そしてその強化版の「ブロウクンファントム」

敵の物理攻撃・エネルギー系攻撃問わずに防御、

エネルギー系攻撃なら敵に反射出来る「プロテクトシールド」

そしてその強化版の「プロテクトウォール」

回路に負担が掛かるから余り使えないが、敵を拘束出来る「プラズマホールド」

そして単体最強技であり、コアを抽出する事が出来る必殺技の「ヘル・アンド・ヘブン」

パイパーツールを使えば、
空間を湾曲させ、フィールドを作り出す「ディバイディングドラ
イバー」

敵を拘束したり、重力レンズを作り出す「ガトリングドライバー」

空間をねじ切る「ディメンジョンプライヤー」

敵をポッド内に閉じ込め、振動でコアのみを残し消し去る「グラ
ンドプレッシャー」

Gツールを使えば、

ガオガイガー最強の必殺技、コアを抽出する「ハンマー・ヘル・
アンド・ヘブン」

そして、敵を光にする「ゴルディオハンマー」

…これで全部かな」

「……………」

「どうした？」

「いや…凄過ぎて唾然としてました…」

「まあ、無茶苦茶だしな」

しかし、これほどの力が無ければ戦えない事も事実だが。

「最後はキャロの番だな」

「は、はい…」

…裕樹さんは、何故ガオガイガーが使える様になっただんですか？」

「まあ、簡単に言えば大元のロストロギアを見つけてからだな…」

…あれは…確か5歳ぐらいだったかな？」

『ええっ！』

「何もいきなり戦ってた訳じゃない。

お前らみたいに訓練してから戦ったさ」

「裕樹さんが訓練してる姿…なんか想像出来無いなあ」

まあ、無双してる所しか見てないもんな

「…スバル…それは流石にそれは失礼よ…」

…私も想像出来無いけど」

…ティアナ、お前もか

「お……裕樹さんも訓練して強くなっただ…」

よし！僕も頑張つて強くなるぞ！」

「サポートは任せてね、エリオ君！」

このコンビは和むなあ…

「さて、大体こんな感じだな…

たまに模擬戦で使うから見とけよ、そのうち相手させるからな
」！

『ええ〜…』

『やった〜！』

…予想通り反応が二分されてるな…

ちなみに上がティアナとキャロ、下がスバルとエリオだ。

そんな事を思っていると急に通信が入った。

「裕樹君、なのはちゃん、フェイトちゃん」

「はやくか、どうした？」

「うん、そっちもそろそろで着くやろ？」

FW達には悪いけど帰って来たらちよっと部隊長室まで来てくれるか？」

「レリックと未確認について、だね」

「そや、カリムにも報告せなあかんし…」

そう言っつてちょっと困った顔をするはやて。
こつこつ顔も可愛いな。

「わかったよ、はやて」

「あつ…と、はやて
ついでにいいか？」

「なんや？裕樹君？」

「シャーリーに地上本部の方からデータ転送があるから受け取る準備をしてくれ
って伝えてくれ」

「了解や。」

後、フェイトちゃんの車、こつちに運んでおいたからな？」

「あ…ありがとう、はやて」

「それじゃ、しっかり集まってな？」

そう言っつたと同時に通信が切れる。
襲撃かなんかじゃなくて良かった…

「あゝ、御一同」

後1分で到着ですぜ」

「了解：結構話してたな」

「じゃあ、FWは私達が戻ってくるまで休憩…」

そう言いかけたのはを手で制す。

「悪いがシャワーでも浴びて軽く休憩したらデバイスルームに集合してくれ

後、副隊長達にも集まるように伝えてくれ、ちょっとやる事がある」

『はいっ！』

「どづいつ事、裕樹さん？」

「まあ、色々。

…お前等も、な」

「？本当にどづいつ事、裕樹？」

「帰ってからの楽しみさ…」

「着陸完了！ハッチ開けますぜ！」

機械音と共にハッチが開き、六課のヘリポートが見えた。

「じゃ、部隊長室に行きますか」

そう言つて3人は走り出した…

.....

数分後・部隊長室

「さて、とりあえず未確認について教えてくれるか？」

「ああ、わかった。

現時点で言えるのは？型に似た奴だけって事。

そして性能はガジェット約2倍、加えてAMFも強力になつて
る事。

∴俺の勝手な予測だが、未確認はガジェットとは無関係だと思つ

「確かに、奪いたいんやつたら最初から出せばええし

戦力に違いがあり過ぎるしな…」

真剣に考え始めたはやてだったが、途中で考えるのをやめた。

「うん…とりあえずこれだけ報告しとくか！」

「その方が良いな、不確定要素が多すぎる」

恐らく、ジュエルシードをゾンダー化させた奴らだろうが。

「じゃあ、裕樹さん」

「質問に答えてね？」

「…了解」

「なんや？どうしたんや、2人とも」

急に雰囲気が変わった2人に話しかけるはやてだったが、ことごとく無視され、そして次の言葉で驚く事になった。

『あの時の…10年前消えたガオガイガーは…裕樹（さん）だよ
ね？』

「へ？…ど、どどういう事や？」

裕樹がガオガイガー？何でや？」

「…見てもらった方が早いな…」

スター、ファイナルフュージョン！」

Program Drive

部屋の中なので、EMトルネードではなく緑色に発光し合体する。

「ガオツ！ガイッ！ガーッ！」

「あ…ああ…」

はやての顔が驚きに包まれ、まともに出なくなつた。見せるだけなので直ぐにフュージョンアウトする。

「…ああ、俺がああ時のガオガイガーだ」

そう言うと同時に3人が泣きながら抱きついて来た。
…そこ、羨ましいとか言わない。

「ううっ…グスツ…良かった、生きててくれて」

「グスツ…本当に…うう…死んじゃったと…思ったんだからね…」

なのはとフェイトが泣きじゃくりながら話す。

「ごめんな、辛い^{辛い}思いをさせて…」

そう言つて、2人を抱き締める。
2人はより強く、抱きついて来る。

そんな2人をよそに、はやてが離れる。

「…裕樹、ウチは言わなアカン事がある」

「…はやて…」

「ごめん！ウチのせいで、闇の書事件に巻き込んだせいで…
あんな事に…ごめんな…ごめんなあ…」

頭を下げ、謝るはやて。

床には涙が零れてゆく

「はやて…顔を上げてくれ。」

その件ではやてが俺に謝る事は無いんだ。

全部、俺が自分で招いた事…自業自得なんだ」

「でもっ！…それでもっ！…」

「それでも、はやてが謝る事じゃない」

「そんな…ヒック…悪い…のは…グスッ…ウチ…なのに…何…で…」

「…今まで、その事をずっと背負ってたんだな…
辛かったんだよな？ 苦しかったんだよな？
なら、今は泣いていいから、思い切り泣いていいから…
もう、無理しなくていいんだよ、はやて…」

はやてを抱き寄せ、頭を撫でる。

「ううっ…うわああああん！」

「良い娘だ…」

…結局、3人が泣き止んだのは10分後だった。

第十一話「過去」(後書き)

作者「わーい！期限過ぎた〜！」

はやて「わーい！…やないわ！このドアホ！」

バツシーン！

裕樹「で？訳はなんだ？」

ゲシツ！

作者「ゴフツ…扱い酷い…」

地方の学校だからもう夏休みが明けたんだよ…

夏季休業中の課題の提出やらなんやらあった上に

週一のレポートも再開したから…」

なのは「にやはは…中々な状況だね…」

フェイト「でも、最後までやるんだよね？」

作者「ええ！もちろん！」

最後までやりますよ！

なんたってなのはとガオガイガーの看板借りてますから！！」

裕樹「…じゃ、早く書こうな」

作者「…え、読者の皆様

更新が遅い!と思ったらコメントに書いて知らせて下さい。

進行状況などをお返ししたいと思いますので遠慮なく送ってください」

裕樹「じゃ、こんなところでお開きにして」

作者「アレ行こうか!」

なのは「次回も魔法少女リリカルなのはStrikers」

フェイト「漆黒の守護神」に!」

はやて「ファイナルフュージョン承認やっ!」

第十二話「デバイス強化」(前書き)

はい、三週間ぶりです。

遅れた訳は活動報告にもありますが、あとがきで…

それでは、魔法少女リリカルなのはStrikers ～漆黒の守護神～が始まります。

第十二話「デバイス強化」

「3人共、落ち着いたか？」

「うん、ありがとう裕樹」

「私は…もうちょっとこうしていたいな」

「ウチもや」

フェイトは、「もう満足」と言った顔で離れたが問題は、なのはとはやてだ。

堂々と引っ付いたままで居るもんだからフェイトが羨ましそうな顔を始めてしまった。

…端から見れば男冥利に尽きるような光景だが、今はFW達と副隊長達を待たせているのでそんなに時間は無いし、長時間待たせたとなれば気怠いデスクワークが山のように増えるだろう。

つまり、この状況を楽しむ時間は無いのだ。

「…2人共、この後デバイスルームで今後の為に
アップグレード
デバイスの強化をするから急がないといけないんだが」

「うう…仕方ないの…」

「残念やなあ〜」

頬を膨らませ渋々引き下がるのは。

そして良からぬ事を考えているであろう顔で離れるはやて。

何も無いと良いのだが。

「さあ、行くぞ」

『うん!』

纏わりつく様に付いて来る3人を相手しながらデバイスルームに向かう。

…が、ある事を忘れていた。

「おっと…はやて、リインは今何処にいるんだ?」

「…そやな、多分デバイスルームやと思うけど…」

リインが居ないとまずいんか?」

「ああ、これからやるデバイスの強化を受けて貰アップグレードわないといけなからな」

はやてと話しているとフェイトが質問してきた。

「裕樹、リインが強化されるって事は私達や副隊長達もやるの？」

「…もちろんFW達もな」

忘れてやるなよ、フエイト…
エリオとキヤロが泣くぞ…

「へりの中で言ってた『Gコートシステム』を追加するって事かな、裕樹さん？」

「そうだ、ゾンダーと遭遇した時に取り込まれない為と、魔法で対抗出来る様にする為にGCSコートシステムを追加する」

なのはの方が賢く感じるのは俺だけだろうか…

あれ、執務官ってエリートだよな…

戯けた事を考えていると今度ははやてが質問をしてきた。

「それでゾンダーを倒せるんか？」

「…いや、ゾンダーは核を浄解しない限り再生し続ける。核を抽出して浄解出来るのは俺だけだから…」

「『倒せない』って事か…」

「『倒す事は』出来無い…」

そう言う意味なんでしょ、裕樹」

俺の話の聞かずに結論を出したはやてだったが、
フェイトの鋭い意見に、はっとした顔になる。

フェイト、その鋭さのブレは一体何なんだ…

「ああ…GCSの本来の役割は使用者がゾンダー化するのを防ぐ事
であって

攻撃する為の物じゃない。出来て足止めが良いところだろう。

だが、それでもゾンダーに遭遇ないし戦闘を行う確率が高くなる
機動六課FW部隊隊員の命を守るには必要な装備だから搭載させ
てもらって事だ」

「皆の事も考えてくれてるんやね…ありがとうな、裕樹君」

「まあ、試験運用って意味合いも兼ねてるからな。お互い様って所
さ」

「試験運用って…危ない物じゃないよね!？」

エリオとキャロが危険な目に逢わないよね!？裕樹?!」

試験運用、と言った途端にフェイトが鬼気迫る表情で肩を掴み揺さ
ぶり始めた。

そんなフェイトの様子を見てなのはが苦笑している…

恐らくいつもの事なのだろう、と言うより機動六課に居る事自体が
危険以外の何物でもないと思うのは俺だけだろうか…

「で、どうなんや？裕樹君」

「あのな、新人達に装備させる物が使用者に危険を及ぼす物な訳無いだろ。」

第一、そんなに危険な物なら俺が試験してるっつーのっ！」

最後に少し力を入れてフェイトとはやてにデコピンをお見舞いする。
「「あいたあ！」」と見事にシンクロしたりアクションを頂きました。

「にははは…でもそれなら安心だね」

「こつちとしては最初から信用して欲しかったんだがな…」

「まあまあ、はやてちゃんは部隊長って立場もあるから確認はしなきゃだし、

フェイトちゃんはエリオとキャロの事になると取り乱しちゃうから…」

あ、裕樹さん着いたよ」

「ん、じゃあ離れてくれ」

「む、残念なの」

頬を少し膨らませ離れるのは。

「一体何が残念なのだろうか…
まあ、いいか。それより中に入るか…」

「まだ来てないみたいだな…」

「つと、シャーリー！地上本部からのデータ転送は?!」

「今、丁度保存が終わった所ですよ」

「ありがとう、助かるよ」

「いえいえ、裕樹さんには色々アドバイスを頂いてますから。
これ位でもお手伝い出来て嬉しいです！」

「はははっ、じゃあデバイスの強化をするから手伝ってくれるかな
？」

「はい、お手伝いさせていただきます」

「さて…スター、ガオガイガーとの双方向通信開始」

俺が地上本部から持って来た

六角形の窪みがある特注の台座にスターを置きながら言う。

オールライト、マイマスター。回線、暗号化開始します

「シャーリーはデバイスにGCSをインストールする準備を」

「了解です」

暗号化完了、通信開始します

スターがそう言うと軽い音と共に通信画面が展開する。

〔回線、及び暗号化システム正常作動確認〕

「ガオガイガー、GCS調整システム起動。

スターは機材とリンク」

〔了解〕

ガオガイガーは向こうで調整準備に入り、

スターは台座から機材のシステムとリンクを始める。

「裕樹さん、デバイスが来ればいつでもいけます!」

リンク完了、コンソール展開します

シャーリーがインストールの準備を終えた事を告げ、スターが無情報サーキットとして機材とリンクし、デバイスの並列処理が可能になった事を告げ、操作用のコンソールを展開する。

「さて、後はFW達とシグナム達だが…」

そう呟いた途端に扉が開きFW達とシグナム達が入ってくる。まさに『噂をすれば影』と言うべき現象だ。

『遅くなりました!』

「「わりい(すまない)、遅れた」」

「いや、ちょうど準備が終わったところさ」

FW4人+1匹、ヴォルケンリッター4人+1人の計9人+1匹が入ってくる。

FWは若干息があがっているから走ったのだろう。ヴォルケンを捜す為なのか、此処に来る為なのかは分からないが。

「じゃあ皆さんデバイスを台の上に置いて下さいね。

後、リン曹長は中央のデバイスに触れて下さい」

『はいっ!』

『了解(です)』

「ザフィーラは後で渡すからな」

(了解した)

俺から言うとシグナムとヴィータが怪しむと思い、
六課のデバイスを受け持っているシャーリーに頼んで
全員のデバイスを台 正しくは機材だが に置いてもらう。

ザフィーラはデバイスを持っていないので
後でネットワーク型ストレージデバイスを渡すことにした。

「じゃあ裕樹さん、お願いします」

「了解：システム起動。」

デバイス情報確認：確認完了。

各デバイス応答確認：異常なし。

SGGGリンク確認：異常なし。

デバイス相互通信：異常なし。

GCSシステム解凍、システムチェック：異常なし。

スター、GCSインストール開始」

オールライト、マイマスター。

GCS、インストール開始

インストール前の重要なチェックは俺が行い、
インストール中はスターからのデータを見るだけなので楽である。
この後が地獄だが。

コンソールを叩き、ウィンドウを各デバイス毎に表示させる。

…これが地球のコンピュータだったら是非とも御免被りたい。
なにせ小さい画面に10を超えるウィンドウが表示されるのだから
たまったもんじゃない。

『使いにくい』などと言うレベルではない事はご理解頂けるだろう。

閑話休題、そんな訳でメインモニターとウィンドウから目を離し皆
の方へ振り返る。

すると皆が俺を見て啞然としている。

かなり長い時間沈黙しているので若干怖くなってきたので話を振る
事にした。

「…ど、どつした？」

「い、いや…」

「仕事が早いな〜って思って」

「ああ、そりゃデバイスとリンクして処理能力を向上させてるから
な」

「リンクって…昔の論文で見たぐらいですよ、そんなの」

「ま、古臭い手だと思ってる（実際に夜天の書より古いしな）」

マスター、30秒でインストールが完了します

「了解。

GGG、調整システムをこちらにまわしてくれ」

「了解、管理・制御権を譲渡します」

残り10秒

「譲渡確認。

システム、並列処理準備」

インストール完了

「各デバイスにアクセス。

戦闘記録確認。戦闘パターン抽出……………完了」

「調整システム高速処理化完了」

「了解。

調整システム、自動調整開始」

調整開始。予測終了時間30分です

「了解。しばらく頼む」

「オールライト、マイマスター」

はあ、疲れた。戦闘後に休息無しで情報処理は心が疲れる。

こんな時は寝るか、コーヒーを飲んで寛いだ方がいい。

おもむろにデバイスルーム備え付けのコーヒーメーカーに近寄り
マイマグカップ（ちゃっかり置いてある）にコーヒーを注ぐ。

ちなみに機動六課で俺の1番気に入っているコーヒ―は
デバイスルームのブラックである。

皆の元に戻り、腰かけてゆっくりと飲む。

口の中に広がる苦味が疲れを忘れさせてくれる。

「あ、あの〜」

「?どうした、ティアナ」

「デバイスの微調整がまだだったと思うんですが…」

「シャ―リーとなのはが『忘れてた!』と言う顔をした。

…まさか忘れてたのか、コイツら…」

「GCSも微調整するからその時に纏めてやるつもりだったが…
…なにかあるかな?」

「あ、あはは…」

「はあ…」

…軽く頭痛がしてきた…

「まあ、なににせよ後30分は何も出来ないな。

…戦闘結果の報告をした方がいいな。

あいつらの情報は共有しといた方が良い」

「そうやね。」

それと、GCSの説明もお願い」

「じゃあ始めるか」

そう言ってさっきのコンソールを弄って全員分のウィンドウを表示させる。

スターはGストーンと同じように情報を高速で処理する事が出来る。だからこそこんな離れ業が出来る。

「副隊長達の為にもう一回説明するが、

ゾンダーは人のストレスに反応し、融合すると同時に

辺りの機械類を取り込み、成長するプログラムだ。

そして、完全体に成長すると…胞子を撒き散らし、世界中の人をゾンダー化する。

成体になれば大概の魔法は効かなくなるという厄介な敵だ。

で、戦闘結果の方だが、未確認物体と共に現れたゾンダーは撃破。浄解をしたところ、ジュエルシードが出てきた。」

「ゾンダーに浄解って…」

「まさか…」

「お前はっ!」

「…ああ、俺があ…の時のガオガイガーだ」

「てめえっ!」

途端にヴィータが襲い掛かろうとする。が…

「落ち着きいや、皆」

「でもはやて!」

「『でも』も『なに』もあらへん。

あれは裕樹君の所為や無いんやから責めたらアカンよ」

ヴォルケン3人は納得がいかない様子だったがとりあえずは黙ってくれた。

ちなみにザフィーラにはあつた時にバレているが、

襲いかかったりはせず、「俺」が何をするかだけを聞き、黙っている事を約束してくれた。

やはりザフィーラは良い奴だ。

…今は若干虫の居所が悪いという表情をしているが。

「…続けるぞ。

さっきも言ったように成体になれば魔法が効かなくなる。

そして重要なのが万が一にも触れたらゾンダーに取り込まれる。

だからゾンダーが現れた時点で魔導師は撤退させるが、現状から言うとレリック、ないしロストロギアがある所に未確認物体と共に現れている」

「ガジェットを追い掛ける形で、やな」

「ああ、まだ1回目だがこれからもそうなるだろう。そうになると、必然的に機動六課はゾンダーとの接触が増える事になる。」

そこで、最悪の事態に備え、今回機動六課に配備される事になった対ゾンダー化システム、それがGCSだ。

GCSは発動している限り、装備者をゾンダー化から守るシステムだ。

だが、その特性上、防護している間は膨大な魔力を消費する。エネルギー供給路は整っているから大丈夫だが、

今の君達にとってはあくまで退避の時間を稼ぐ為の物だから使用する場合はゾンダーとの戦闘は避けて欲しい。

…まあ、おいおい時間稼ぎぐらいは出来る様になって貰うが」

『はい！』

『…わかった』

「あの〜裕樹さん、質問があるんですが…」

「何だシャーリー」

「何故防護中にこんなに魔力を消費するんでしょうか」

シャーリーの目の前にあるウィンドウが
GCSの項目になっていて、彼女はそれを覗き込んでいる。

「見てもらえば分かると思うがエネルギーを相殺させて防護してる
からだ。」

異様に消費するのは相手の出力が上だからだ」

「…これほど消費させても相殺だなんて…」

…デバイスとか色々対策を考えていかなきゃ…」

説明したが感謝の言葉なく自分の世界に入ってしまった。
対策を考えてくれるのはありがたいんだがなあ…

「まあ、こんな感じだ。」

微調整はFW陣は通常の訓練で、それ以外は模擬戦形式で行う。

今のうちに休んどけよ」

『はいっ！』

『ええ…』

見事な2極化である。

エリオ、スバルは若干残念そうに喜ぶという離れ業をやったのけて
いるが。

…にしてもまた模擬戦か、今度は前回のようにはいかないだろうな…

…果たして俺に勝てるかな？今から楽しみだ…

第十二話「デバイス強化」(後書き)

裕樹「さて」

なのは「なにか」

フェイト「言う事は」

はやて「あるかな？」

作者「すいませんでした。」

この度は更新が著しく遅れた上、報告もしなかった事を深く謝罪いたします。

申し訳ありませんでした」

なのは「よく出来ましたなの」

作者「ちょ、スターライトは、それだけはやめてえええええ」

なのは「スターライトオ…ブレイカー！…！」

作者「なのはから、光が迫ってきて……………ぎゃあああああ！！！！」

チーン…

裕樹「南無…ん？なんだこの紙切れ…」

なになに…書き始めようとした矢先に部屋がブヨミたいな羽虫に沢山入ってきていて、外を見たら網戸と窓にへばり付くおびただしい量の羽虫がいて書く気が失せたこともあった…」

フェイト「どういう事？」

はやて「写真もあるやん…うわ、こりゃひどいで…」

なのは「…これは…キツイ、ね…」

実際は写真なんて撮っている様な事態じゃなかったのでありません。

作者「そうなんだよ、更新一週間後のことだったんだ」

裕樹「で、その後は勉強やら修学旅行の準備やらで書けなかった訳か」

作者「そうです、はい。

そんなこんなでまた遅れるかもしれませんが何卒、よろしく
お願いします」

はやて「ほな、いつもの行こか」

裕樹「よっしゃ…頼むぞ、作者！」

作者「次回も、魔法少女リリカルなのはStrikerS 漆黒の守護神」に」

「同「ファイナルフュージョン承認!」

第十三話「訓練? 前編」(前書き)

お待たせしました!!

最近リアルがあたふたしていて遅れていましたがなんとか前編が書きあがり?ました。

第十三話「訓練？ 前編」

あれから30分が経ち、ようやくGCSの調整が終わった。

「各デバイス、GCS正常動作確認」

問題無し

「了解、お前ら自分のデバイスを持ってって良いぞ」

『はい』

「じゃあ皆、訓練所に集合ね」

『はい！』

今回は情報があるのがこちらだけだったから手加減したが、今日からは情報を渡して真面目にやっていかなければマズいかな…

「移動してる間に俺のデータを転送しとくからな」

「裕樹さん、ちょっとよろしいでしょうか？」

「どつしたディアナ」

「裕樹さんは銃を使っていますよね？」

「ああ、随分変則的ではあるが…
それがどうした？」

「銃を使用する時の立ち回りを教えて頂きたいんですが…」

「あゝ、そういえば今の所は俺だけか…
…しかし、今の立ち回りで充分だと思っただが？」

「あ、ありがとうございます…
でも、他の人の立ち回りも知りたいんです」

「ふうむ……なのは？」

「私じゃ射撃魔法しか教えられないから
教えてくれると嬉しいな」

「教導官が言うならいいか。
じゃあ、今日の所は軽くやるぞ」

「はい！ありがとうございます！（これで更に強くなれば…）」
「（……今のは……）じゃあ、解散」

俺の言葉でそれぞれデバイスルームを出て訓練所に向かい始めた。

俺はまだデバイスルームに残っている。

「じゃあ…プログラムを追加するぞ、ミストルティン」
《魔力弾圧縮プログラムか？》

「そうだ。未確認と戦う時に不安は残したくないからな」

「あの…裕樹さん、私も見ていて良いですか？」

「ん？…ああ、別に構わないよ」

「ありがとうございます！」

シャーリーが軽く飛び跳ねながら喜ぶ。
お前は子供か。

「簡単な作業だからな、5分で終わるだろう。
じゃあ、始めるぞミストルティン」

《了解》

5分後、訓練所

「お？全員揃ってるな」

「それじゃあ、先にデバイスの微調整をします」

「と、言う訳だからいつも通り訓練始めるよ」

『はいっ!』

「俺も始めるかな」

コンソール、モニター展開

その後訓練が始まった訳だが…

「アクセルシューター!」

accelshooter

「シューッ!」

「わっ!」

「うわわっ!」

「エリオ君!」

「2人とも大丈夫?!」

「大丈夫だよティア!」

「な、何とか…」

「ほら、まだ時間は終わって無いよ!」

…と、まあこんな感じになってしまっている。

「……やり過ぎだろ」

「まあ…確かに…」

シャーリーも同じ事を感じていたようだ。

しかし、モニターを見てみるとデータが良い感じに調整されている。

ちやんと考えてやっているのか、

テンションが上がっているからなのかは分からないが。

「データは（・・・）良い感じですね」

「F.W.達が大変な事になってるがな…」

「カタカタ…裕樹さん、デバイスの調整が終わったので

GCSの調整してもOKですよ」

「お、そうか。」

スター、GCSデータ更新」

了解、更新開始……………」

マツハキヤリバー、クロスミラージユ

ストラーダ、ケリユケイオンのデータ更新完了

「はい…ものの五秒で…」

「まあ、微調整だからな」

その数秒後にレイジングハートから訓練終了が告げられた。

時間です。マスター

「はい、訓練終了！みんなお疲れ様！」

『あ、ありがとうございます…』

なんとか返事を返したFW達の姿は…とても煤けていた…

「ティアナ、どうする？」

「…少し休んでもよろしいでしょうか？…」

「だろうね…じゃあ、隊長陣との模擬戦の後にやるからな」

「あ、ありがとうございます」

「じゃ、隊長陣は模擬戦の準備だ」

一分後、シミュレーター「市街地」

「俺のデータは見たか？」

「ああ、それでお前は何を使うんだ？」

「とりあえずはラグナロクとミストルテインだ。

状況によってはアクセル、スターも使う。

リミッターは今のままで」

「裕樹、戦闘について何か制限はある？」

「いや、特に無いな。

個々の得意分野に合わせて調整するからむしろ自由にしてくれ」

「よっしゃ、勝ったら一つ言う事聞いてもらおうぞ？」

「はやてちゃん……」

「それ…負けフラグだぞ、はやて」

「んな！じゃあヴィータは勝ちたく無いんか？」

「いや、そういう訳じゃねーけど……」

「と言うか、さらっと自分の意見を通そうとするな。

…まあ、頑張ったら一つ言う事聞くよ」

「ホンマか！？」

「ホントに！？」

何故反応したんだ、フェイト、なのは…

「あんまり変なのは却下だがな」

『…チツ…』

なんか3人から『チツ』って聞えたんだが…
気のせいじゃないはずだ。

「じゃあ、シャーリー合図頼む」

「了解です。それでは各自バリアジャケットを着用して下さい」

「ラグナロク、ミストルテイン、セットアップ。

アクセル、ウエイクアップ」

オールライト、マイマスター

《GCS正常起動、待機状態》

Standing By

「全員の着用確認しました。

ルールは以前と同じで行きます。

それでは…始め！」

「さて、今回はどう来るかな？」

こちらのデータは向こうにありますから…

《前と同じにや行かないって事は確かだな》

油断はなさらぬように、サー

…マスター、仕掛けて来ました。

どうやらシグナムとヴィータが近接戦闘、

フェイトが高機動中、近距離戦闘、

なのはが遠く中距離砲撃、はやてが広範囲攻撃…

前と大体同じですね、

「まあ、妥当かな」

シグナム、ヴィータ来ます

アクセルからの警告通り、

シグナムとヴィータが低空を飛行しながら迫ってきている。

シグナムが右側、ヴィータが左側から仕掛けて来ているが

ヴィータにはプロテクションを使いたくないので、

左手でラグナロクの刀身を半分ほど抜いて防御し、

シグナムの攻撃はプロテクションを使って防ぐ事にした。

「はああああッ！」

「てりやああッ！」

ガキイイーン！！

ジジ…ギギギ…

甲高い音を立てて2人の攻撃がぶつかる。

ヴィータの攻撃　グラーファイゼンの一撃　はラグナロクの刀身に

防がれ、

シグナムの攻撃　レヴァンティンの一閃　は俺のプロテクションに

阻まれ動きを止めた。

このまま押し返して…

「！…くそっ！」

反撃に転じようとした瞬間、足元にバイントが展開されたため
2人の攻撃を受け流す形で急速に後ろに下がる。

「うおっ！！」

「くっ！！」

「ああ！なんで！」

「今は決まってるたやる…」

「焦らないで、なのは」

シグナムとヴィータはお互いがぶつかる寸前に方向転換して回避した様子だ。

「間一髪って所か…」

バイントに捕まっていれば砲撃の餌食になっていたでしょう

《流石にこのまま地上戦を続けるのは無理じゃないか？》

「しかしなあ…せめて1人は落としたいんだが…」

…ミストルテインで攻撃すればよろしいのでは？

《まあ、そっだよな》

………

「…シグナムとヴィータには接近戦重視の調整をしたいからな…
アクセル、セットアップ」
Complete

今回はバリアジャケット…もといアーマードジャケット（装甲戦闘服）を着用しているので
胸部装甲がそれぞれの肩に移動、更に各装甲が中央に筋を作る形で移動し、
胸部から覗くリンカーコアから供給される漆黒の魔力を体全体に伝える。
スタートアップをしなくてもこのままソニックムーヴを使えば十分な速さが出るだろう。

「ラグナロク、ソニックムーヴ」
Sonic Move

シグナムとヴィータは既に体勢を立て直してしまっているので背後から回り込む。

「！ヴィータ！後ろだっ！！」
「なっ！！」

シグナムに警告され咄嗟にアイゼンを構えるが…

「遅い！」
「ぐあああっ！」

トップスピードの速度について来れる筈も無く、袈裟掛け斬りを喰

らって撃墜。

そのまま、シグナムへ斬り掛かるが攻撃の勢いを利用され50mほど距離をとられ、ソニックムーヴも切れてしまった。

「レヴァンティン！」

シュランゲフォルム！

「連結刃かつ！」

キンッ！ キンッ！ キンッ！

蛇の様に迫り来る連結刃をラグナロクで弾いていくが、一向に近づけない。

このままではさっきと同じ様にプロテクションを張られてしまうので、

アクセルの手前側の黒いボタンを押す。

Start Up

アクセルの真骨頂、スタートアップを発動する。

駆動音がし始めると同時にシグナムの攻撃が緩やかになり、用意に近づけるようになった。

既にカウントは8秒になっている。

連結刃を掻い潜り、シグナムの目の前で少し止まる。

カウントは6秒になる。

シグナムが驚き始めた所でバインドで固定し、スーパーケルカット連撃を繰り出す。

ズガガガガガガガガ...

3...2...1...

アクセルから残りの秒数が読み上げられ...

T i m e O u t : R e f o r m a t i o n

時間切れタイムアウトし、全身の装甲が元に戻る。
シグナムは何も言えずに撃墜。

「んな...もの数十秒で...」

「ヴィーたちやんと...」

「シグナムが...」

『撃墜された...』

第十三話「訓練? 前編」(後書き)

作者「なんとか書けた…」

裕樹「おい、作者。」

初めて数ヶ月しかたつて無い作品で約一ヶ月も待たせてどうすんだ!！」

作者「そりゃそうだけんど…レポートが…週一でやって来て…

ギヤアアアアア!！」

裕樹「こいつ…逆流しやがった…(胃の内容物的な意味ではなく)」

はやて「じゃあ、いつものいこっか?」

はやて「次回もこの小説に!」

裕樹「ファイナルフュージョン承認!！」

次元「エアフォーム　これが勝利の鍵だ!」

第十四話「訓練？」 中編（前書き）

一ヶ月以上空けてしまった。
しかもクオリティが低い…あ、元々か

第十四話「訓練？ 中編」

なのは、フェイト、はやての3人が目の前で起きた事に驚愕している時、同じくFW達も驚愕していた。

「…ティアナさん」

「…何、キヤロ」

「今、何が起きたか見えましたか？」

「…いいえ、全く…」

「ですよね…」

「エリオ！今の凄かったね！！」

「はい！殆ど見えなかったけど、

あれがアクセルフォームなんでしょうか？」

「多分そうだと思う、でも詳しい情報は無いから…何をやってるのか分からないのが残念だね」

「そうですね、僕もあんな風に戦ってみたいな…」

「私も…」

2名ほど面白がっている感じがあるが、それでも与えた衝撃は大きいようだ。

シュミレーター内部

「(さて、お次は高速戦闘と遠距離戦か…)」
相手は飛行しています
《このままじゃ不利だぜ》

「なのはとはやてならともかく、フェイト相手に陸戦じゃなあ…」
《久しぶりに飛ぶか?》
エアフォーム、準備完了
超高速戦闘、可能です

「よし、ラグナロク。
フォームチェンジ、エアフォーム！」
オールライト、マイマスター。
エアフォーム、セットアップ

アーマードジャケットの装甲が少し丸みを帯び、
その背面にメインブラスターが2基
肩部装甲にブラスターが1基
脚部装甲に沿うようにブラスターが数基
その他スラスターが全身に無数に展開する。

更に、ヘルメット（HMD搭載型）の形状が

人型兵器の様な形から戦闘機の様に変化し、
ゴーグルも左、右と分かれていたものからバイザーの様な一体型に
変わる。

「ミストルテイン、M C B・ライフル」
《イエス、サー》

M C B・ライフルはその名の通りライフルリングを有し命中精度を向
上させたもの

(と、言っても現在地上本部に配備されている

M C O - 0 0 3 【単発式拳銃型デバイスフレーム】、

M C O - 0 0 4 【単発式機動歩兵用デバイスフレーム】、

M C O - 0 0 5 【連射式機動歩兵用デバイスフレーム】には標準装
備されているが)

であるが、アサルトライフルと違い、

発射方式がセミオートのみであるため突破力に難が有る。

しかし、普段から単発式のミストルテインを使っているので問題は
無い。

「さて、久しぶりに飛ぶか！」

ブースター、スラスタに魔力を送り、
空に向かって飛び上がった。

なのは、フェイト、はやてside

「あれが本来のアクセルフォームか…」

「走るだけで私の飛行速度に近かったし…」

「何より、シグナムが対応出来無い程の剣戟…」

「スカウトした甲斐があつたな」

「確かにそうだけど…」

「勝てないよね…」

「…せめて一撃は入れて言うこと聞いて貰わんとな」

「そうだった！負けられないの！」

「そうだね…っ！」

なのは、はやて、裕樹が動いたよ」

「ほんまや…あれは確かエアフォーム…やったか？」

「空戦用のフォームで…」

戦闘に特化させる為にある程度速度を犠牲にして
装甲を増やしてるらしいね…」

フォームに関するデータを見ながらなのはが言う。

「…この速度で犠牲があったのかは疑問だけどね」

若干呆れながらフェイトが言う。

「でも、エアフォームに変えたって言う事は、
地上戦じゃあやってられないと思ってくれたっちゆう事やる。

…でも、裕樹君の空戦は初めてやから警戒していいか」

「しばらくは空戦をしてないからアドバンテージはこっちにあるし
ね」

「裕樹も動き始めそうだから始めようか」

s i d e o u t

s i d e F W 陣

「あ、ティア！また別のフォームだよ！」

「あんた、少しは大人しくしなさいよね…」

えっと…あつた！あれは空戦用のエアフォームらしいわ」

「うん…」

「どうしたの、エリオ君」

「うん…どう考えてもあのエアフォームはこのデータ以上の速度が出ると思っただ…」

「ん…あの追加装甲の所為じゃなくて？」

「スバル、あのブースターがちょろっと増えただけの追加装甲の影響を受けると思う？」

「…あたしもエリオと同じ意見だわ」

「このデータは正しくない…と言う事でしょうか？」

「うん、お…裕樹さんがこの程度の性能のものを改善しないで使うとは思えないし…」

「まあ、裕樹さんが地上本部のデバイスを見て、
地上04式MCO.004を開発したぐらいだからそのまま…って訳は無いし、
結構機密が多いらしいからね…」

F W達はまた模擬戦を見始めたのであった。

side out

シユミレータ内部

「さて、しばらくは様子見だな」

最近エアフォームを使っていませんでしたから慣れる必要があります

《ま、相手も警戒してくるだろうから丁度良いだろう》

「おっと…アクセル、今の内に戦闘機動に備えて

システムチェックとプログラム修正をやっておいてくれよ」
既に始めています。完了度現在20%

賢いこった、と言って裕樹は低速で移動しながらなのは、フェイト、はやての動きを見る。

「やっぱり警戒してるな…」

なのははバイントと砲撃の準備か。

んで、フェイトが空戦。

はやては遠距離からの管制かな？」

《…魔力の流れからしてそうだろうな》

しかし、他人の魔力の流れなんてよく分かりますね、マスター

《俺達に搭載されてるセンサー類も元はお前のそれだしな》

「…まあ、色々さ。」

それより、もうそろそろ仕掛けるぞ」

イエス、マスター

《了解》

修正完了度40%ですが、宜しいのですか？

「ああ、実行する。」

「そっちはそのまま続けてくれ」

了解しました。続行します

そのままミストルテインを構え、照準を合わせる。

目標は…なのは。

威力を弱め、バリアジャケットで防げる程度にする。

射撃に応じて3人と交戦すればエアフォームの性能がFW達に伝わる。

3人がどんな風に仕掛けてくるのか、

次のFW達はどんな対策を立ててくるのか…

一週間ほど訓練してきたんだから『瞬殺』は無いだろっつが、

落胆しない程度に頑張っつて欲しいもんだ、と思いつながらトリガーを引いた。

side out

なのは、フェイト、はやてside

「(はやてちゃん、バイントの設置終わったよ!)」

「(いつでも高速戦闘出来るよ)」

「(よっしゃ、こつちも完了や。

じゃあなのはちゃん、裕樹君に砲撃を…っ!

アカン!ミストルテインを構えとる!

2人とも!避けてやつ!)」

「「っ!」」

はやての警告に、咄嗟に回避行動を取る2人。

(元から狙っている訳では無いので全くの無駄であったが…)

しかし、ミストルテインから撃ち出された魔力弾の速度は凄まじく、回避し始めたなのは近くに「バキッ!」と言う音と共に着弾する。

「なのはちゃん!大丈夫か?!)」

「大丈夫!)」

「それにしても、凄まじい弾速の魔力弾だったね…)」

「あれは常に移動しててもキツいな…)」

「プロテクションで時間を稼ぐしかないね)」

「じゃあ、各自作戦を続行。
裕樹君の動きに注意してな」

『了解!』

3人はいつでもプロテクションで防御出来る様にし、
裕樹の動きにより一層警戒しながら作戦を開始した。

sideout

sideFW陣

「ティ…ティアさん？」

「…何かしら、キャロ」

「今の魔力弾、かなり速いですよね？」

「…地上本部の支給デバイスですら出ない弾速だったわね…
それに、あの距離で外すとは思えないのよね…」

「ティア、照準がズレただけじゃないの？」

「風も無かつたし、視界もクリアだった…」

…ズレただけならいいんだけど…」

「?どういう事ですか、ティアナさん？」

「ハズれた」なら只のミスだけど…

“ハズした”なら話が変わってくるのよ

「どついう事なの？ティア」

「…部隊長達は裕樹さんの戦略に嵌められているかもしれないのよ」

『戦略？』

「ええ。

簡単に言うと、

『態と銃撃を外して相手の行動を早めて、体勢が整う前に各個撃破する。』

…裕樹さんの教導の中に入っている戦術らしいわ

「何処でそんな情報を集めたんですか？ティアナさん」

「士官学校の仲間が

『斉藤教導官の教導を受けた』って言ってたのを思い出したから聞いてみたのよ。

…本来は大規模な敵に奇襲する為に使う戦術らしいんだけどね

「今回は慎重になった相手を動かす為に使ったのか…

やっぱり凄いな、お…裕樹さんは」

『?』

キャラとスバルは話について行けなかったようである。

「さて、今のうちに私達の作戦を考えましょうか」

「うん！」

『はいっ！』

Side out

Side 裕樹

「よし、動き始めたな
ですね

《つて言ったってバインドが何処にあるかは分からないんだぞ》

「まあ、そうだが…

フェイトが追い詰める先にあるだろうな」

それが相手の作戦ですか？

「大方、フェイトが高速機動で追い詰め、
なのはが仕掛けたバインドで拘束。

そして、なのはが砲撃して止め。

はやては管制塔兼サポートって所だろうな」

《もつとこつちにわかりづらい作戦を立てるんじゃないのか?》

「あんな短時間で複雑な作戦は立てられないと思うんだが」

《それもそうか》

何故納得するんですか、ミストルティン

プログラム修正完了。∴早く戦闘した方が良いと思います、サー

「だな……ハア……」

戦闘開始、フェイト、はやて、なのはの順で撃墜する。

ラグ、なのはの動向を逐一報告しろ」

オールライト、マイマスター

エアフォームは基本的に通常フォームと違い、

ラグナロクとミストルティンによる近接格闘戦が主軸ではなく、

ミストルティンによる至近く中距離までの射撃戦を主軸にしている為

ラグナロクに周辺の探査、監視・観測の大部分を任せている。

(アクセルはアップデート、プログラム修正完了に伴い

機体制御や速度関係の管理を行う)

「ソニックムーヴ!」

Sonic Move

《サー!裕樹が急速接近中!》

「っ!、ソニックムーヴ!」

《Sonic Move》

スタートアップでは無いため、バルディツシュに感づかれてしまい高速戦闘になってしまったが、フェイトは誘導系魔力弾等の追跡をかわす手段は無いに等しい。

- 速度で振り切る、という手もあるだろうが -

更に、使う魔力弾も誘導性は極めて低い。

一方、こちらは近接格闘はきついが、誘導系魔力弾をわんさか撃てるし、誘導しない魔力弾なんかを避けるのは簡単だ。

「ヴァリアブルシューター！」

《Variable Shooter》

20発の魔力弾を形成し放つ。

「シュート！」

問題は…

「アクセルシューター！」

accel shooter

「シュートッ！」

なのはである。

「当たるかつ！」

そもそもソニックムーヴを使用しているのだから当たる訳が無いのだが、
速度差でこちらから突っ込むと言う最悪の状況に成りかねない。
狙ってやっているとは思えないが。

「くっ！…やつぱり当らない！」

「ラグ、アクセルシューターの軌道の報告を追加だ」
イエス、マイマスター

フェイトを撃墜する事が先決なので、一気に引き離し放っておく。

その間にもフェイトがヴァリアブルシューターを回避しようとするので
4つのグループに分け、追い詰めていく。

「さっきと動きが違う!?」
自動追尾から切り替わったようです。
サー！12時、6時方向から迫って来ます！

バルディッシュの警告に左斜め上空に回避するフェイト。

「っ！…かわせたか…」

まだです！次は真上、9時方向から！

左急旋回で振り切り、元の位置に戻るフェイト。
しかし、魔力弾はフェイトを取り囲むように展開してある。
グループごとではなく1つ1つを制御する。
フェイトを中心に包囲するように回転させ、集束。

ドゴオオン…

こうしてフェイトを撃墜した。

sideフェイト

魔力弾を回避していたらいつの間にか囲まれていた。
こんなへマをしたのは始めてだよ…

…サーを中心に360度で回転しています…回避不能です
「やっぱり強いな、裕樹は」

せまる漆黒い魔力弾を見ながら私は意識を手放した…

sideout

第十四話「訓練」 中編（後書き）

さあ、一ヶ月強空いての投稿ですがレポートが出来てないのでこれにて。

次回ははやて、なのはとの戦闘。そしてFW陣との模擬戦とウフフ？です。

第十五話「訓練？ 後編」（前書き）

皆様、新年明けましておめでとご御座います。

裕樹「もう二月になっちまっぞ」

うっ…実は最近思うように筆が進まなくなってしまいました。

裕樹「学校のレポートもな」

うっっ…そっちも頑張らなければ…

それといつの間にかPVが7万、ユニークが1万を突破してしました。

ありがたやゝありがたやゝ。

第十五話「訓練？ 後編」

sideなのは

アクセルシューターを解除し、裕樹を追い掛けるのはだったが
追い付く頃にはフェイトは（若干幸せそうに）撃墜されていた。

「間に合わなかったっ！」

どうやらマスターと戦うのは最後になるようです

フェイトを撃墜され悔しがるなのはをよそに
レイジングハートが裕樹の行動を予測する。

砲撃支援をした方が良いのでは？

「そうだね…レイジングハート！」

オールライト、マイマスター。Accelerate Fin

なのはの呼び掛けに応え、レイジングハートがアクセルフィンを展開。

そのまま移動を始めた。

S i d e F W 陣

『フェイトさんっ!』

「大丈夫よ、エリオ、キャロ。

裕樹さんはちゃんと手加減してるし、落下速度も調整してるから」

「は〜…気絶してるだけで怪我が全く無いね…」

スバルがシュミレータから出されたフェイトを見ながら言う。

『そ、そうでした…』

「…それにしても、今はキツイわね」

「下手に逃げ回っていると追い詰められちゃうしね…」

「プロテクションで防御…は駄目みたいですね」

「…確か裕樹さんの魔力は、Aランクですよね?」

「リミッター解除をしなければ、その筈だけど…」

「どう見ても魔法はAAランク以上の威力だよね…」

「（裕樹さんは、プロテクションみたいに圧縮して威力を上げているのかな?」

そつだとしても秘密にしておいた方が良いかな……」

エリオは、朝方の裕樹との会話を思い出しながらスバルとティアナの会話を聞いていた。

side out

シュミレータ内部

「さて、次にはやて……と、いきたいんだが……そう上手く行かないかなのはさんが動いています。砲撃支援をすると推測
《どうする？先になのはを撃墜するか？》

「……仕方無いか……先になのはを撃墜する！」
オールライト、マイマスター
《イエス、サー》

デバイス達が応答を返した瞬間、スラスターを全開にし、減速せずに急反転してなのはを攻撃するべくミストルティンのモードを変える。

「ミストルティン！MCB・マシンガン&ライフル！」

コンボ・アサルトライフル

これによって連射速度は落ちるが、集弾率が高くなったフルオート、3バーストで射撃出来る様になった。

「ヴァリアブルシューター、
自動誘導モード、フルオート」

Variable Shooter, Homing Mode,
Full Auto. Ready

「果たして、アクセルシューターで勝てるかな？」

なのはを撃墜するべく、レティクルを覗きながら呟く裕樹だったが、彼はこの時点で1つ、やってはいけないことをやっていた。

…つまり、はやての事を失念していたのだった。

side out

side はやて

シグナムがやられた辺りから詠唱しとって、

フェイトちゃんが撃墜された時にはもう駄目かと思ったけど…

これってチャンスやよね？

なのはちゃんの方に向かってたからこっちはノーマークやよね？

…アカン、なんかむかついてきたわ…

準備しとったのクラウソラスで良かったわ…

とりあえず、様子見しとこか。

side out

sideFW陣

「あ、裕樹さんなのはさんの方に向かい始めた！」

「目標をはやて部隊長からなのはさんに変えたんでしょ。」

「…今の反転速度はすごいです」

「きゅ〜」

フリードが自分には出来ないと返事をした。

「…裕樹さん、はやて部隊長が砲撃をしようとしてるって分かってるんでしょうか？」

エリオの疑問にスバル達が反応する。

「分かっていたら…あんな軌道はしないかも…」

「確かに、動きが直線すぎるわね…」

「なのはさんの方に集中してるみたいですし…」

この時、全員が思っていた事を言った

『裕樹さんが撃墜される所が見れるかもしれない』と。

side out

sideなのは

「!?!?こっちに向かってくる!

…ッ、アクセルシューター!」

Acceler Shooter

なのはの周りに10個の魔力スフィアが出現する。

「シュートッ! (単発式ならこれで行けるッ! (」

そう思ったのはだったが
現在のミストルテインはアサルトライフルになっており、
更にオートホーミングモード自動誘導に設定されたヴァリアブルシューター
であるため
アクセルシューターが多くとも、最高速度であったとしても回避す
る事は叶わない。

《アクセルシューター射出を確認。数10》

「この位！」

カチッ！ ダダダダッ！！

照準を大体アクセルシューターに合わせてトリガーを引く。
弾速もさることながら、連射スピードも1秒間に15発とかなり速
いため
瞬く間にアクセルシューターが消えていく。

Acceler Shooter

「シューッ！」

「更に出してきたか……」

《こっちは問題無いんだが……面倒だな》

「…振り切るっ！」

そう言うと右側のサイドブラスターとスラスターを全開にし、なのはの後ろに素早く回り込む。

「マスター！後ろです！」

「えっ？…っ！」

「遅い！」

なのはがラウンドシールドを張ったため、ミストルテインをしまい、ラグナロクを持つ。

「獅子穿孔！」

ラグナロクを振り抜くと獅子の顔の形をした魔力刃がラウンドシールドを喰い破り、
なのはに喰らいつく。

「きゃあああ！」

バリアジャケット損傷

なのはが落下していく中、レイジングハートが落下速度を調整しな

がら自身の負けを認める。

「さて、後ははやてだけだな」

裕樹が振り返った瞬間、はやてのクラウソラスが裕樹に直撃する。

「んなっ！…ぐああっ！」
ダメージ
被弾

「当たった！？」

着弾後の球状の竜巻に巻き込まれ地面に吹き飛ばされていく裕樹を見ながら

はやてが当たった事に驚きながら言った。

裕樹は姿勢制御が出来無のまま地面に激突し、近くのビルを壊して止まった。

「…はっ！裕樹君！大丈夫か？！」

驚きから戻ってきたはやてが叫んだ時、
辺りに漂う土煙が晴れてきて、瓦礫に寄り掛かるように座っている裕樹が見え始めた。

「あいたたた……俺の負けだな」

『砲撃が直撃して「痛い」って……』

裕樹の安全を心配した一同だったが、本人の言葉により心配は呆れに変わってしまった。

side out

side F W 陣

「うわ！直撃！」

「お……裕樹さん、大丈夫でしょうか？」

「墜落前に姿勢制御できれば大丈夫だと思うけど……」

そう言った直後、裕樹はそのままの勢いでビルに激突した。

「ティ……ティティティティアー！！ゆゆゆゆ裕樹さん、げげげげ激突しちゃったよー！！」

「あなたは少し落ち着きなさい！！！！」

「エリオ君、裕樹さん大丈夫かな……」

「分からないけど……危険だよね」

FW達が心配する中、倒壊したビルの周りの土煙が晴れ、裕樹の姿が見えた。

「あいたたた……俺の負けだな」

『砲撃が直撃して「痛い」って……』

その言葉を聞いて、全員が

まるで「新婚さんいらっしやい」の司会者のようにコケた。

side out

第十五話「訓練? 後編」(後書き)

裕樹「おい作者」

作者「はい」

裕樹「最初の頃は1〜2週間で投稿するって言ってたな」

作者「確かに」

裕樹「それがよお…今は月一更新じゃねーか!?!?!」

作者「目次第も御座いません…」

?????「いつになったら私が出てくるのでしょうか?」

裕樹「ほれ見ろ、本編より先にこいつが出てきちゃったじゃないか」

作者「あーうー…」

?????「…例のアレ、行きましょう」

裕樹「…そうだな」

?????「次回『第十六話 模擬戦?』」

裕樹「次回もこの小説にファイナルフュージョン承認！」

作者「MHP3 楽しいです」

裕樹「&?????」「おい!!!」

第十六話「模擬戦？」（前書き）

皆様、お久しぶりのRAGです。

いや〜遅筆っていやですね。

大体三ヶ月ぶりと言うこの遅さ。

新年度になって委員長を任されたんですが、

もう心労でストレスがマツハです。

さらにレポートも始まったのでさらに心労で（ry

これからもがんばって行きます。

ところで、「長いのをドン！」と「短いのをチヨロチヨロ」

ならどちらがよいのでしょうか？

コメント待ってます。

第十六話「模擬戦？」

1分後、シユミレータ前

「さて、そろそろいいかな？ ティアナ」

「はい、私は大丈夫ですが…裕樹さんはどうなんですか？」

「そうだよ、さっきすごい勢いで激突したばかりなのに…」

ティアナとの訓練を行おうとした矢先、なのはに引き留められた。

バイタルチェックの実行結果では何も以上はありませんでした

《アーマードジャケットは頑丈だしな》

各種安全装置も正常作動しました、問題ありません

「確かに、異常は無いわね…」

「デバイスとシャマルのお墨付きがあるから大丈夫だな。

と、言っても軽くやるから関係ないんだが」

「あ、裕樹さん！」

「…何だ、スバル」

「私達と模擬戦して下さい！」

『僕（私）からもお願いします！』

「どづいつ事だ？」

いきなりの模擬戦をしてくれと言われても理由が分からないので聞いてみると

「すみません、裕樹さん。」

…裕樹さんの模擬戦を見ていて…私達も戦いたくなっちゃったんです。

…その…ティアナも、ですけど」

言い辛そうにスバルが喋った。

まあ、さっきまであんな話をしていればそうなるか。

「……ティアナ、今日は俺の動きを見るだけになるがいいか？」

「えっ…あ、はい！」

「じゃあ、少し休んどけよ」

『はい！ありがとうございます！』

「……………なんで…シクシク」

全員、嬉しそうだ。

…明日の早朝訓練がえらい事になりそうだが。

そんな事を思いながらシュミレータに移動して行った。

シュミレータ「市街地」

「じゃあ、なのは。よろしく」

「ガジェット？型が10

？型が5

？型が2…って、やり過ぎじゃ…」

「射撃でやるから大丈夫さ」

「うん…じゃあ、準備して」

「了解、ミストルティン！セットアップ！」
アーマードジャケット
《A》展開》

今回はミストルティンだけだが、
いつもと変わらないジャケットが展開される。

「準備完了だ」

「じゃあ、始めるよ」

なのはがそう言うと、前後左右に？型が2体つつ現れる。

「ミストルティン！トウーハンドモード！」

《イエス、サー。two hand mode》

ミストルティンもクロスミラージュと同じく双銃として扱う事が出来る。

さらに数を増やすこともでき、それぞれを別のモードで使用する事も出来る。

「ちゃんと見てるか、ティアナ」

「はい！バッチリです！」

「ふー…機動01、エンゲージ戦闘開始」

その言葉が引き金となったのか、ガジェット？型が攻撃を始めてきた。

まず、前・右方向のガジェットがレーザーを放ってきた。

「ふっ！」

軽く息を吐き、右斜め前に飛び込む形でレーザーを回避。
後ろを向いた瞬間に後・左方向のガジェットに発砲するが、
4発撃った内、2発がAMFに無効化されてしまい2機しか破壊に
至らなかった。

「ミスト、魔力弾圧縮プログラムは動作しているか？」

《…すまない、起動していなかった。

……今、有効化した。》

「了解」

ミストルテインと話している間に残りのガジェットが合流して編隊
を組んでしまった。

その陣形は…逆楔型、つまり此方を前と横から追い詰めようとして
いる。

この場合、後ろへ後ろへと下がって行けばいいのだが、後ろにはビ
ルが近い。

なので、瓦礫等に隠れながら応戦する。

「…ミスト、APFSDSバレット」

《APFSDS buiie》

APFSDSとは、

Armor Piercing Fin Stabilized
Discarding Sabot

（装弾筒付翼安定徹甲弾）の事。

徹甲弾の1つ。重量ではなく運動エネルギー、つまり速さで装甲を貫く。

本来は戦車砲や滑腔砲などで使用される。

ティアナに立ち回りを教える以上、MCBを使う訳にいかない事と「ティアナが」（将来的に）使える様な弾種を使わなければいけない」

という制約が掛かる。

APFSDSバレットは、初速を十分に受け取り任意のタイミングで炸裂すると共に、

弾体を加速させる装弾筒と、魔力を外周部に圧縮する事により、内部を空洞化し外周部の強度を上昇させた軽量の弾体で構成されている。

そこまでややこしい構造ではないので、ゆくゆくはティアナも使えるだろう。

「ファイア！」

トリガーを引き、APFSDSを発射すると、

AMFにぶつかった瞬間に

「ボシュツ」と言う音と共に装弾筒が分かれ、高速で弾体が飛び出し、

そのまま右翼のガジェットの装甲に食い込み爆散させる。

さらに、その後方に居たもう一体のガジェットも破壊する。

《流石の威力だ》

「だな。にしても強すぎる…っどー！」

ミストルテインと話をしていると残りの6機がレーザーを撃つて来たため、

瓦礫を使ってかわす。

「サーチャー展開！」

《イエス、サー》

上空に向け発砲する。

銃口からサーチャーから射出され即座に映像を送って来る。

「ヴァリアブルシューター！」

《Variable Shooter》

6つのスフィアを展開してサーチャーを仲介してターゲットをロックする。

「シュートッ！」

狙いは左翼の2体と正面の4体。

圧縮プログラムによって圧縮された魔力弾は、寸分変わらず打ち抜い

た。

「よし、？型殲滅」

《警告！上空より？型、5機接近》

サーチャー越しに？型が確認出来た。

「ズームアップ」

《zoom up》

まだ出現したばかりで距離が空いているため、狙撃で終わらせる。

「スタンバイ」

《イエス、サー。

…敵、エネルギー上昇。レーザー来るぞ！》

5つのスフィアを展開し、ターゲットをロックする最中にミストルテインが警告を出す。

「シュートッ！」

《レーザー接近！》

ヴァリアブルシューターを打ち出すと同時にビルの間身を隠しサーチャーからの情報で誘導する。

《…全機撃墜。いつもながらすごいな》
「ありがとよ…それより次、来るぞ」

ミストルテインからの世辞に答えながら
少し離れた場所から聞えてくる機械音に神経を集中させた。

s i d e o u t

s i d e 隊長陣&FW陣

シュミレーター内部に複数設置されているサーチャーからの映像を隊長陣とFW陣は食い入る様に見つめていた。

隊長陣

「…すげーな、アイツ」

「確かに、数が少ないとはいえ、双銃でとは…よくやるものだ」

「使う弾種も簡単な構造の物ばかりだし…」

「ガジエットの弱点を的確に打ち抜く技量もすごいね」

「どれだけ訓練したらこんな動きが出来んのやるな？」

「少なくとも実戦経験があるはずだな」

「それも、物凄い数だろーな…」

FW陣

『す…すごい…』

「サーチャー越しに誘導だなんて…」

「あ、ティア！？型が出てくるよー！」

「…っ！狙撃…どうやって…」

「サーチャーを仲介してロックしてるみたいですね」

「拡大処理もしてるみたいです」

「すごいな、裕樹さん」

「そつね…」

side out

side 裕樹

「っ！」

瓦礫から瓦礫へと移動しながら？型に向けて銃撃をする裕樹だったが、

そのほとんどがAMFに阻まれ、届いたとしても装甲が軽く凹む程度の損傷しか与えられない事と2機によるレーザーの交互射撃によって撃墜の機会を掴めずにした。

「ミスト！APFSDSバレット」

《APFSDS buiie t》

「…ちよつと離れ過ぎだな」

《勝つには2機同時撃墜が望ましいが…

現状、威力減衰が大きい新造弾を使うなら…》

「もう少し接近してからじゃないと？型の装甲は打ち抜けないか…」

《シールドは使用しないのか？》

「…俺の防御魔法は他の魔導士とは違うからな、少しマズイんだが

「仕方ない」

裕樹の防御魔法になのは達のようなプロテクションは存在せず、
なのは達で言うラウンドシールドが裕樹のプロテクションであり、
裕樹のシールドとは未知のそれである為、使う気は無かったのだが、
拳銃2丁のみ・攻撃ほぼ無効化・突撃必須の現状では使わざるを得
なかつた。

「ミスト、アクティブシールド発動」

《Active shield mode”Vanguard”》

ミストルテインの応答と共に、
クリアブラックの六角形の物体　アクティブシールド　が無数に出
現した。

アクティブシールドは、
すべて前面に展開され？型に対する裕樹の投影面積を全て覆った。

「久々だな、コイツを使うのは」

《2年ぶりだな。前回値と比較しても精度劣化は見られないがな》

「なら大丈夫だな。…突っ込むぞ！」

《了解！》

瓦礫から飛び出し、ブースターを吹かして肉迫…ではなく、
両腕を前に突き出し、？型に常に狙いを定めながらダッシュで近づ

く。
もちろん？型はそれに反応し、レーザーを短い間隔で撃つて来るが、そのほとんどがアクティブシールドに阻まれる。それに対抗する様にレーザー出力が上昇し、若干のアクティブシールドが破壊される。

「配置は任せる！」
《わかつてる！》

短いやり取りの後、ミストルテインの自動制御によってレーザー照射を受けている場所に的確にアクティブシールドが移動し、完全に防護する。

「っ！…流石にAAランクまであげないと無理か！」
《確かに、耐久度が低くなってるな
急ごしらえの魔力弾を使ってる所為もあるだろう》

これがアクティブシールドの最大の弱点、
「最低でもAAランクの魔力が開放されていないと性能が低下する」と、
事と、

「最大性能を発揮する為には、魔力消費の少なく、
術者およびデバイスに負荷が掛からない魔法しか同時使用できない」と事である。

「だが…これで…終わりだっ！」

バシユバシユウウウウウ…ドドオオオオオン

《ターゲット沈黙確認》

「状況終了…フウ…」

「裕樹さん、お疲れ様。

「じゃあシュミレータから出てくれるかな？」

「了解。エリオ、キャラ、スバル、ティアナ、少し休ませてくれな
いか？」

「はい！もちろんです！」

「ミスト、モードリリース」

《イエス、サー》

「さて、休みますかね」

S i d e o u t

S i d e 隊長陣 & F W 陣

「すごい戦いだっただな」

「ああ、にしても裕樹の奴また新しい魔法出してたな」

「私も見た事無い奴だったよ」

「…あ、データが見れるようになったよ」

「なにになに…」 Aランクで最低限のパフォーマンスを発揮する”
やて？

…裕樹さん、今Aランクだったやん…」

「なるほど、だから破られてた訳か…」

「細分化されたシールドを個別に動かして完全防護かあ…」

「やっぱり裕樹さんはすごいですね！」

「そうだね、エリオ君」

side out

2分後、シユミレータ前

「さて、始めようか。条件はどうする？」

「なのはさん達と同じでお願いします！」

「大丈夫なのか？」

「はい、裕樹さんの動きを見て作戦を立てていましたから」

「なら大丈夫だな。その作戦、期待してるぞ」

『はいっ！』

1分後 シュミレータ「市街地」

「FWのみんな、準備はいい？」

「はいっ！バッチリです！」

「裕樹の方はどう？」

「動作チェック」

アーマードジャケット
AJ、刀器異常なし

モーターチェンジパレル
《銃火器、MCB異常なし》

プログラム：異常なし。

変形システム：異常なし

「準備万端、何時でもいけるぞ」

「ほんなら始めよか」

はやての声を聞いたのはがスタートを合図する。

「うん…じゃあいくよ！」

「レディー…ゴー！」

「(さて、どう来るかな?)」

裕樹がそんな事を考えている頃、既にFW達は、ティアナの指揮の下、作戦を開始していた。

「じゃあ、軽くおさらい。」

まず、スバル、エリオの順で裕樹さんに波状攻撃を仕掛ける。

次に私が射撃支援をするから、その間に2人は裕樹さんから離脱。

「キャラは私達のバックアップをお願いね。」

『了解!』

確認の後、それぞれが自分のポジションに移動する。

「(いくよ!エリオ!)」

「(はいっ!スバルさん!)」

「うおおおおおっ！」

「はあああああっ！」

「キャラ、エリオにブーストお願い！」

「はい！」

念話でタイミングを合わせ、スバルを先頭に高速で裕樹に肉迫する。

「スバルが先頭か、ならばっ！」

右手に持っていたラグナロクを鞘にしまい、空いた右手を握り、後ろに振りかぶる。

そのまま右手に魔力を回転させる様に纏わせる。

「ブローケン……」

スバルが自分の間合いに入るまで引きつけ…

「うおおおおおりやあああ！」

「おおおおおっ！」

ガキーン！ギギギギギギ…

金属音を立てながらスバルと裕樹、2人の拳が激突する。

スバルのスピードは裕樹によって完全に殺され、
マツハキヤリバーがグリップを強めてもそれは変わらなかった。

「スバルさん！援護します！」

「ブースト、スラッシュ&ストライクッ！」

「（次はエリオか！）…マグナアアム！」

エリオが援護に入って来る前に右手を強引に突き出し纏わせていた
魔力を射出する。

「っ！…くっくうううっ！」

「スバルさん！」

「余所見をするな！」

「！」

ガィィィン！

空いた右手でラグナロクを抜き、呐喊して来たエリオに一撃を入れる。

しかし、体勢が整っていなかった事と、エリオにブーストがかかっていた事によって裕樹が吹っ飛ばされる事となった。

「ラグ！、ミスト！MCB・マシンガン&ライフル！」

Air form, set up

《コンボ・アサルトライフル》

すばやくエアフォームに切り替え姿勢制御をする。

それと同時にミストルテインを構え、ノーマルバレット無誘導弾を再び接近してきたスバルに打つ。

「くっ！……ティア、早く……」

スバルもプロテクションを出して持ちこたえているがそろそろ限界のようだ。

このまま一気に……

《誘導弾多数感知！》

「……ティアナか！位置割り出せ！」

《イエス、サー》

数こそ少ないがかなりの精度を誇る誘導弾が襲い掛かってくる。しかしエアフォームの機動力には敵わず、ただの一発も当たらない。空中にいる為エリオはあまり手出しできず、

空戦（と呼んでもいいのかは判らないが）も出来るスバルはほぼダウン状態。

キャロもフリードによる空戦は出来るが、現状では何処にいるかは判らない。

ティアナの射撃も今のように当たらないが位置が判らない。全員の位置さえ判ればいいんだが…

《敵座標捕捉》

「了解、HUDに表示。」

《イエス、サー》

「……なるほど、ビルの中か

ミスト、ヴァリアブルシューター・フルオート」

《Variable Shooter, Full Auto… Ready》

ヴァリアブルシューターの準備が整うと同時にFW全員がこちらに攻撃を仕掛けてきた。

さっきの探索を見抜かれたようだ。

やはりティアナは優秀だな、将来が楽しみだ。

「シュートッ！」

そのままトリガーを引き、1人当たり15発を撃ち込んだ。

side out

side ティアナ

だめだ、誘導弾が全く当たらない。

スバルもダウン寸前だし、エリオは空戦が出来ない。
今フリードを出す訳にもいかないし…！

「サーチされてる?!…いやもうバレたわね

…此処までか、もう少し行けると思ったんだけどなあ」

出来ればあと一矢報いたい。

もう後は無い、やってみよう。

「みんな!聞える?!

裕樹さんにそれぞれの居場所がバレたわ!

最後に一発、でかいの喰らわせるわよ!」

〔了解!〕

「全員…攻撃!!」

私が最後に見たのは…ランダムな動きをする15個の誘導弾だった…

s i d e o u t

第十六話「模擬戦？」（後書き）

裕樹「……………」

なのは「……………」

フェイト「……………」

はやて「……………」

作者「……………」

全員「スコシ・・・アタマ・・・ヒヤソツカ……………」

作者「iiiiiiiiiiややややあああああ！！！！！！……………」

どおおおおおおおん……………」

裕樹「よし……………」

スカリエッティ「所で僕の出番はいつだい？」

はやて「そっぴやリアルールのときも書かれてなかったなあ……………」

作者「まあ……………追々ですね、戦闘機人はまだ先ですから……………」

それに、未確認に攻撃されてる側なので……………」

フェイト「…そういう事なら納得…かな？」

スカリエツティ「そう言う事にして置くよ」

なのは「じゃあいつものいこうか？」

スカリエツティ「迫り来る未確認、出撃する裕樹とそれを見守る機動六課。」

緊急依頼で新しいフォームを発動させる！」

なのは「次回、魔法少女リリカルなのはStrikers ～漆黒の守護神～」

フェイト「第十七話 緊急依頼」

裕樹「次回もこの小説に！」

はやて「ファイナルフュージョン承認や！！」

作者「これが…勝利の鍵だっ！」

グラントフォーム

第十七話「緊急依頼」(前書き)

久しぶりに投稿した男、RAGマツ!!!

あらためて見返すと一日経過するのに話近く使っているよ...

第十七話「緊急依頼」

10分後 機動六課隊舎

side 裕樹

「結局、模擬戦は隊長陣が1勝。
FW陣が1敗だったか」

「そうだね。まさか勝てるとは思わなかったけど」

まさかなのは達に負けるとは思わなかった。
ちゃんとやれって事が…

「そや、ちゃんと勝ったんやから約束守ってな？」

「そつだよ、裕樹。嘘は駄目だよ」

どつやらあれは無しにはならないようだ
しかしフェイト、勝手に人を嘘つき扱いは良くないな

「誰が守らないと言った…ちゃんと守るさ」

「ほんならまた後でな？」

怪しい笑みを浮かべてはやてが笑う
何かよからぬ事を思い付いたのだろうか

「あ、あの…裕樹さん、私達はとうでしたか？」

「ん〜、まあ、良かったよティアナ。

全員、まだまだ未熟だけどね」

「そうですね…」

「あれ？どうしたのティア
私達褒められたんだよ？」

「そうですねよティアさん！

誘導弾の制御、凄かったです！」

若干落ち込んだティアナを励ますためにスバルが話し掛け、
続いてキャロがフォローし、エリオが頷く。

「まあ、俺で良かったら訓練の手伝いをしてやるよ」

「もう、裕樹さん。

ティアナ達はまだ私の訓練をやってるんだから勝手に決めてもら
っちゃ困るし、

甘やかしちゃ駄目なの！」

「アハハ…はいはい、わかってるよ」

「斉藤裕樹一等陸尉、地上本部、レジアス・ゲイズ中將から通信が来ています」

…レジアス中將が？…繋いでくれ」

ロングアーチの1人から通信が来ていると言われたが、暗号化が成されていない為敬称で話す。

「斉藤一等陸尉、君に至急、やって貰いたい事がある」

「待つてくださいレジアス中將、通信の暗号化をしていただきたい」

「む…すまない、GGG暗号化を」

「…通信、暗号化完了しました」

「さて、これで気兼ねなく話せるぞ。」

で、頼みたい事ってなんだ？」

「ああ…それが、つい先程未確認の集団が確認されたんだ」

「…それで？」

「君には未確認の集団の偵察・破壊をして欲しい」

「ちょっと待った、いくらレジアス中將とはいえども

人の部隊から勝手に人員を調達して良い訳が無いやろ?!」

「黙れ子狸、その様な事、貴様に言われずとも分かかっておるわ!」

「だったら…」

「2人共！いい加減にしろ、キレるぞ！」

「……………」

「…で、集団は今どのあたりなんだ？」

「機動六課から80？ほど南に行った平地だ」

「ふむ、エアフォームで片道8分って所か」

「それともう一つ、未確認の？型らしきものが確認されている」

「…予想はしてたが、本当に来るとはな」

「詳細な内容は後程送る…：装備はそちらに一任する。

それと、EOWを始め、兵装使用制限解除権限はお前に譲渡されているからな」

「了解」

「通信、アウトしました」

「さて、ラグ、ミスト、アクセル、出撃準備」

オールライト、マイマスター

システム、チェックモード起動

《機体各部チェック……………異常無し

エネルギーラインチェック…出力正常、異常無し》

加速システムチェック…異常無し

各部ブースターチェック

…異常無し、オーバードブーストOB推力正常、使用可能

「後は詳細を確認してカタパルトを…」

「ちよい待ち、行かせると思つか？」

「は、はやてちゃん駄目だよ」

「そつだよはやて、あんまり無理を言っちゃ…」

「私も関係は悪化させとうない。

言つたかて、さつき模擬戦2回と射撃訓練したばかりの人の
出撃要請を承認する訳にはいかんのか」

「別に、あのぐらい何ともないさ」

肉体ダメージ、軽微

《日常生活レベルだな》

「…せやかて集中力はもたんやろ！」

「はあ…あのな、はやて

敵は2時間もすれば此処に到着するし、
それより前に都市部へ向かう可能性だつてあるんだ。

そうなれば、地上本部としては早急に潰しておきたい所だが、
けど前回の交戦データから武装局員の損耗率が40%近くになると
出てる。

だからまず俺が出て行って敵戦力を偵察。
敵戦力、特に？型のデータを収集した後、敵集団を攻撃。

？型の交戦データ収集完了と同時に、地上本部の砲撃支援を活用しながら

敵集団を殲滅するってのが被害が少なくて済むんだ」

「…まだ敵の数が判ってないのによく作戦を立てられるな、お前。第一、敵が大規模だったら近接は出来無いぞ」

「前にも言っただろ強襲殲滅シエノサイドは俺の得意分野だ。それにわざわざ敵の懐に入る必要は無い」

「それでもお前に掛かる負担は…」

ビィーッ！、ビィーッ！

「隊舎より80？の地点に未確認の集団を確認！規模はおよそ500！」

現在隊舎・首都方面に向けて進行中！

フォワード隊は出撃準備、繰り返す……」

「ちっ！…ミストルテイン、カタパルト展開！」

《イエス、サー。Catapult System Set up》

機動六課の緊急アナウンスの後、GGGから通信が入った。

「マスター、先程のアラートの通り、未確認が行動を開始しました」

「暗号化、レジアス中将へ回線接続」

「暗号化は済んでいます。通信回線接続…」

「祐樹か、大まかな見通しを教える。都市部から20?の地点に最終防衛線を構築させる。まず、これに20分。」

未確認迎撃のために部隊を出勤させるが、現在出勤可能で未確認に対応しうる装備を持っているのが01~09部隊と105~110部隊の計11隊、前線に出せるのは01~09の9隊。

前線に出るまでに1時間掛かる。なるべく出撃を急がせるがせいぜい5分がいいところだろう」

「わかった、あんまり急がせ過ぎるなよ。」

GGGは戦況オペレートをしてくれ。」

それともう1つ、今回の戦闘の中継を六課に流してくれ」

「前の2つは了解した。」

だが最後のは無理だ、お前の戦闘に関わる物一切が重要機密なんだ。」

おいそれと見せる訳にはいかん」

「いずれ見ることになるんだ、一端ぐらいは見せて構わないだろう?」

「……使用兵装は」

「エアフォームおよびグランドフォーム」

ラグナロク、ミストルテイン、アクセルそれとEOWを使う」

「…見せても構わんのだな?」

「じゃなかったらこんな事は言わないさ」

「はあ…分かった。
表示物はHMDと第三者視点カメラ（ヘッドマウントディスプレイ）で良いな？」

「ああ、それで充分だ」

「まあ、やるのはGGGだな。

…単機で強襲殲滅するのを反対されたか？」

「…そんな所だ」

「まあ、僕もやらせたくは無いのだがな…」

「心遣いだけ貰つとくよ、レジアス。

誰かがやらなきゃならないんだ、それも対処できる奴がな」

「そう言ってもらえると助かる。

少し長くなった、急いでくれ」

「了解」

通信が終わると間髪入れずにシグナムが話しかけてきた。

「行くのか、斉藤」

「ああ」

「…勝てるのか？」

「自分から死に行くのはごめんだね」

「…なら、私は止めないさ」

「シグナム（さん）！？」

「お前の力、見せてもらおうぞ」

「まあ、ロビーでくつろいで見といてくれ…」

ラグナロク、ミストルテイン、セットアップ！」

オールライト、マイマスター。

システム戦闘モード起動

《A J、エアフォーム》

「アクセル、ウェイクアップ！」

Standing By

「カタパルト、射出準備」

機体各部固定、異常無し。カタパルト術式安定、魔力充填開始
《射出方向、及び、射出角調整…完了。》

射出レール反発力上昇…射出可能領域到達》

各部スラスタ、メインブースタ出力上昇中…異常なし。
オーバーブースト
OB使用準備完了

「射出準備完了、

カウント、5、4、3、2、1…」

《Ignition》

カタパルトの反発推進と各部スラスタの前方推進、

さらにOBを使用した瞬間超絶加速で速度計が0?から700?まで一気に振れる。

最終的には600?の速度で飛行し、任務に向かった。

side out

side六課

「どうして行かせたんや、シグナム!」

「落ち着いてください、八神部隊長。

…斉藤本人が墮ちないと言い切ったのです。

なれば、私達は見守るだけです」

「そーですよ、部隊長。

男に二言は無いつて言いますし」

詰め寄ったはやてに言葉を返すシグナムを援護するかの様にヴァイスが来る。

『ヴァイス君!』

「それに、ビツ…じゃ無かった、

裕樹一等陸尉の実戦を5〜6年程前に見た事が有りますが…」

「どうだったんだよ？」

「何と言うか…【圧倒的】とか【ワンマンアーミー】とかが近いですかね」

「そこまでだったんか？」

「ええ、その当時のコールサインがピッタリ合う位に」

「その時のコールサインはどんなだったの？」

「なのはに聞かれたヴァイスだったが、先程より更に言いにくそうにこう言った。

「……………ジェノサイド強襲殲滅01です」

「凄まじい名前だなあオイ…」

「あ、モニター開いたね」

「…ほんなら、お手並み拝見といきますか」

『はいっ(了解)(うんっ)ー』

side out

side 裕樹

7分後、平地上空5000m

「H Q、H Q、こちら機動01。現在高度5000mをステルス航行中」

「こちらH Q、了解しました。約1分で敵集団の直上に出ます。無線封鎖を開始してください」

「了解、無線封鎖開始。データが取れ次第封鎖解除、戦闘開始します」

「了解、幸運を」

簡単な現状の確認をして無線（と言っても魔力通信だが）封鎖をかける。

未確認が通信を感知してしまえばそれだけ早く戦闘が開始されるため、

データが集められ無くなってしまふからだ。

ちなみに、H M Dの映像は複数の衛星を介して機動六課に送信されている為、気にする必要は無い

（最も、多少なりとも誤差がある為、H Qとの連絡は大気内で行うのだが）。

「さて、そろそろ見える頃だが…居たな、記録開始」

了解、記録開始

《…やっぱり段違いの速度だな。通常移動中だろくにA M Fもデカイしな》

透過型画面には周囲の魔力結合を分断しながら進む？型を中心とし

た御一行が映っていた。

周囲の状況を見てみると、ガジェット？型が戦闘時に無効化するレベルの範囲が分断されているようだ。

「…ゾンダーが出てなくて良かったな、こりゃ」
<全くです>

《まあ、そのうち出てくるんだろうが》
こういう風にパワーストーンフレが起こるのでしょうかね

「……その発言はやめておこうか」
了解しました

《…行動時のデータが集まったぞ、どうする？》

雑談をしている間に記録率が100%になっていた。ならば次は…

「HQ、HQ、こちら機動01。これより戦闘行動に入る！」

「了解！HMDに残存敵勢力の位置を表示します！」

「さあ、いくぞっ！！」

5000mからミストルティン（アサルトライフルモード）を乱射しながら真下に急降下する。

ブースト、スラスタ全噴射と自由落下の影響もあって文字通りあつと言つ間に地上に着くが、
もちろん手前で逆噴射し、瞬時に停止した。

しかし、着地点周囲に居た未確認？型の集団は着地直前まで発生していた

強風によって加速された魔力弾で蜂の巣になっている。
100m先には？型が一機取り残されている。

「?型、白兵戦闘能力確認のため近接攻撃を行う」
全スラスター通常モードへ移行

「だああありやああああ!!!」

ガキイイイイン!!!

小気味良いほどの金属音が辺りに響く。

「?!?!?!……!!!」

いきなりの襲撃に驚いたような反応をした?型だったが、直に2本の巨大なアームを使い反撃をしてくる。

「ふんっ!」

ギイイイイイイイ……

ラグナロクを盾代わりにしてアームを受け止め、ホルスターからミストルテインを取り出す。

「喰らえっ!!!」

ダダダダダダダダッ!

機体中央のカメラアイに数発撃ち込むと罅が入り、動きが鈍る。

そのまま罅に銃口を押し込みトリガーを引く。

「…爆発はしないんだな」

中枢部破損では爆発しない様ですね

《後で解体だな、コイツは》

?型、データ収集完了

「ざつと10体倒したのか、まだ長いな」
残存勢力、こちらに向かって来ています

《これだけ密集してくれば本部の砲撃支援が使えるんじゃないか？》
マップを見れば赤い点が幾つかの団子状になってこっちに向かって来ている。

「H Q、H Q、こちら機動01。超長距離砲撃支援を要請」

「了解、カウント5の後、敵予想進行ルートに砲撃します。

黄色の枠で示したエリア内に入らないでください。

それと、精度は期待しないでくださいね」

「了解」

「カウント開始。5、4、3、2、1、発射！

着弾まで、あと20、……」

マップ上に映る砲撃エリアに段々と未確認の集団が入ってくる。

エリアの数は5、つまりは1つのエリアに約98機が納まって来る計算だ。

加えて砲撃を行う大型魔力砲は2連装式である為、結構な数が消えてくれる筈だ。

「……、7、6、5、4、3、2、1、今！」

ズドオオオオオオオオン！！ズドオオオオオオオオン！！

あちこちで2連砲撃の音が響き、未確認がその数を減らしていく。

「ごっさり減ったな…っても、残ってるのが？型10機の？型80機か」

？型を中心に高濃度AMFを展開しています

《接近して仕留めるのは無理そうだな》

「魔力リミッター2ランクカット。

フォームチェンジ、グランドフォーム！」

魔力リミッター解除承認確認。2ランク開放します

《グランドフォーム、セットアップ》

アーマード・ジャケットの周囲に漆黒の魔力光が集まる。

その内側では、空戦特化のエアフォームから砲撃戦特化のグランドフォームへの換装が行われていた。

頭部は、戦闘機のような形状から角張ったミリタリー調の物に換わり、

カメラアイもバイザー状の物からデュアルアイに変更される。

全身が空力を重視した形状から耐久性を重視した分厚い、角張った物へと変更され、

ブラスター・スラスターも機体の重量化に伴い高出力の物に変更される。

更に、肩の部分で接続される身の丈ほどある巨大な分厚いシールドが追加される。

ありとあらゆる攻撃を耐え抜き、必殺の砲撃を敵に叩き込む。

それが、グランドフォームである。

「ミストルテイン、一モードチェンジバレル全使用《MCBALAL》
L》・ガトリングバスター、トゥーハンドモード！」

《MCBA ALL:ガトリングバスターモード&Two hand

mode》

すべてのMCBが光を放ち、ミストルテイン本体に集結すると、より強い光を放つ。

光が収まると、150cmはあるつかという巨大なガトリングガンが両手に握られている。

そのまま使うこともできるが、基本的に及び腕部・腰部ハードポイントに接続して安定させて使用する。

「一世界の終焉《End of World》発動準備」

全ミサイルハッチ開放、魔力充填開始

《ハードポイント接続、ランディングギア固定、バレル回転開始》

分厚い装甲の各辺の角に僅かに見える切れ目が動き、その中に隠されていた発射口を開放する。

頭部装甲を除く全身（シールド含む）に設けられたハッチは全部で100箇所。

ガトリングバスターからは毎秒1500発のノーマルバレットが発射され、

各ミサイルハッチからは毎秒3発…全体で毎秒300発の魔力ミサイルが発射される。

魔力充填完了

《全行程終了、EOW発動可能》

「エンドオブワールド…ファイアアツ！」

ドドドドドドドドドドドツ！！！！

パシユパシユパシユパシユパシユパシユパシユ！！！！

ズガガガガガガガガガガガガ！！！！

トリガーを引くと「カチツ」と言う軽快な音とはかけ離れたガトリングの重厚な音と
ミサイルの発射音と降り注ぐ音が轟き、未確認の集団に襲い掛かるが、

開始2秒間までの攻撃は全てAMFに阻まれた。

しかし、そこでAMFの効果許容量を大きく超過したため未確認のAMFシステムは全てダウンした。

もちろん、攻撃の手を緩めることはせずそのままトリガーを引き続ける。

AMFを無力化された未確認達は魔力ミサイルの爆発とガトリングによって文字通り蜂の巣と化した。

更に、未確認が居た周囲の地面は世界の終焉を予期させるような焦土と化していた。

「全敵性勢力無力化確認」

広域スキャン実行：敵増援なし

「全勢力無効化を確認、此方でも増援は確認されていません。帰投してください」

「了解、機動01帰投する」

エアフォームにチェンジさせて来た航路を戻る。

「スター、機動六課と通信を繋いでくれ」

了解しました、少々お待ちください……どうぞ

「こちら機動01、しっかり見てたか？」

「見てたで」

「裕樹さん、無理してないよね？」

「当たり前だ、この位なら何でもないさ」

「それにしても、あの戦力差を引っくり返すとは…まだ信じられんな」

「そういえば裕樹、そのフォームは何特化なの？」

「さっきやった通り、重砲撃戦特化型だ」

「じゃあ、エンドオブワールド…だったか？あれは何なんだ？」

「あれは範囲指定型殲滅魔法だ。」

特徴は範囲を広げれば広げるほど単位面積当りの攻撃力が落ちる事だ」

「はいはい、みんな質問はそこまで。」

裕樹君とりあえずお疲れ様、後処理は向こうがやってくれろみやから

帰ったらそのまま終わりでええよ」

「そうか、助かる。」

…ああ、後でランドフォームのデータを閲覧できるようにして置くから暇な時に見といてくれ」

「了解（や）」

1時間後、裕樹の部屋

「あゝ、やっぱり風呂は気持ち良いな」

洗い立ての髪をフェイスタオルでワシャワシャ拭きながらしみじみと言つ。

「さて、来い」

右手の掌を上に向けソレを呼び出す。

そこに現れたのは分厚い黒い本。金の縁取りと表紙の装飾的な「G」の文字が特徴的な『破壊の書』である。

「異常は無いか？」

<イエス、マイスター。>

魔力反応欺瞞プログラムの他、全てのプログラムが正常です>

「で、どうだった、夜天の書と蒼天の書は？」

<はい、データに多少の欠落がありますが、私を良くコピー出来ていると思います>

「なら、リインフォースを戻せるか？」

<体組織データが消えている可能性がありますが殆どが私と同じですから其処は大丈夫でしょう。>

記憶の方ですが、マイスターが万が一の為に仕込んだ

バックアッププログラムが作動していた様なので恐らくは大丈夫かと。

しかし、復活させるとなるとデータの更新などが必要な為、時間が必要です>

「時間があれば出来るか、ならこの騒動が終わってからはやて達に

聞くか……っ！格納」

誰かが廊下を歩いてくる音が聞こえたため急いで破壊の書を元の場所に還す。

直後、扉をノックする音。

コンコン

「あゝ、裕樹、あたしだ、シグナムも居る。少し話したいんだが

……」

「ヴィータにシグナムか、中で聞こう」

そのまま2人をリビングのソファに座らせる。飲み物は……りんごジュースがあった。

3人分コップに注いで持っていく。

「で、話って何だ？」

「あ、いや……その、謝りに来たんだ」

「昼間にお前がガオガイガーだと知って突っかかるうとしてしまったからな」

「別に、謝る事じゃないだろう。俺があの時跳ばされてなきやりんフォースは救えたんだ」

「……ザフィーラに聞いたんだ、その事でお前がどれだけ苦しんだかをな」

……存外、ザフィーラの口は軽いらしい。今後は気を付けるとしよう。

「まあ、あたし等が無理矢理聞き出したんだが……
それに、リインフォースは「少しでも長く居られて良かった」っ
て言ってたしな。

ザフィーラに「あれはお前らの逆恨みだ」って怒られたよ」

「そう言う訳だ、済まなかった斉藤」

そう言つて2人が頭を下げる。

「頭を上げてくれ、2人とも。」

……リインフォースは他に何と言つていた？」

「お前を信じていると言つていた。」

防衛プログラムの中から救い出してくれた様に、もう1度、助け
出してくれるだろうと」

「ああ、あれはビックリしたな。」

なのは達は気づいてないだろうけどアイツ、ちよつと頬を赤らめ
てたからな」

「そうか……つて、ヴィータ本当かそれ」

「まあ、見間違いかも知れないけどな」

「おいおい……」

「……では、そろそろお暇しよう。疲れているだろう、斉藤。ゆっく
り休めよ」

「そうだな、じゃーな裕樹」

「ああ、おやすみ」

2人が部屋を出て離れるのを確認してからポツリと呟いた。

「期待されちゃ、救い出すっきゃないか」

第十七話「緊急依頼」（後書き）

裕樹（リリカル）「…」

裕樹（IS）「…」

はやて「…えーと、どういう事？」

なのは「作者がもうひとつの作品の主人公の名前を一緒にしたらしいよ」

フェイト「…理由は「俺は面倒が嫌いなんだ」らしいよ？」

裕樹&裕樹「ハイジョ ハイジョ ハイジョ」

作者「ギイイイヤアアアアアアア！」

はやて「…行こか」

なのは「次回も魔法少女リリカルなのはStrikerS 〱漆黒の守護神〱に！」

フェイト「ファイナルフュージョン承認！」

裕樹（IS）「ISもみてね！」

第十八話「陸士00部隊」(前書き)

はい、久しぶりの更新です。

ISの方が原作が手元にあるので書きやすいですよね…

そんな事は置いといて、ジェイルさんランクインです。

第十八話「陸士00部隊」

シュミレーター「市街地」

FW陣初出撃から2日、FW陣の訓練の傍ら
部隊長・分隊長・分隊副隊長は対ゾンダー訓練を繰り返す。
と言ってもその内容は簡単、GCS発動時の回避機動の訓練だ。

現状、GCS発動時は防性エネルギーが攻性エネルギーに転換して
しまい

防御システムが掻き消えてしまったため、一切攻撃禁止となっている。
もう少しでその問題を解消できるのだが、
システムの都合上防御の際に多くの魔力を消費する。

よって、GCS発動時の戦闘は回避優先の一撃離脱が基本になる。
現段階からその訓練をして貰えれば後が楽なのだ。

「よっ……はっ……とっ……うわっ！」

「ヴィータ、撃墜。回避数20……よく避けるじゃないか」

「それでもねーよ、現にシグナムは25回。
フェイトは30回避けてるし。」

第一、あたしは前衛だぞ？この位出来なきゃ勤まんねーよ」

「それもそうか」

ちなみになのはを抜いたのは態とだろう。
何せ回避数は5なのだから。

「……裕樹、この訓練、目標回数はいくつなんだ？」

「回数…と言うか、様は慣れる為の訓練だシグナム。

実践なら、AMFで飛行もままならなくなつて混乱しないよ
うにな」

「AMF下で回避機動…そつだ裕樹、未確認との交戦の時に強化系
の魔法は使えた？」

「ああ、強化系…体内部で発動する魔法に関してはガジェットと同
じだった」

「うん、なら何とか行けそつかな？」

「ねえ、裕樹さ〜ん…回避しないで逃げる方法つて無いの〜…」

回避数最下位のなのが涙声で質問してきた。

「……………無い」

「…回避は苦手だよ〜…」

なのはの場合は機動力の低さをB Jバリアジャケットの防御力でカバーしているので今回の訓練、『高精度の攻撃に一撃でも当たったら撃墜』はつらい様だ。

なぜ一撃で撃墜かというと、普通の状態でゾンダーに触れると闇の書の防衛プログラムよろしく取り込まれてしまうからだ。

「さて、そろそろ時間だ。朝の訓練、終了だ」

「了解！」

さて、やっと朝御飯だ。ちなみに時間は朝7時30分。FW達はもう食べ終わっているだろう。

.....

食堂

『お疲れ様です！』

「あれ、まだ食べてなかったのか？」

「はい、裕樹さんに聞きたい事があって訓練の振り返りやデスクワークを待ってました。」

「食べながらだと会話が弾みますから！」

…食べながら喋るのは行儀が悪いと言つのはあえて言わないで置く。

「じゃあ、料理を取って来てから聞こうか」

『はいっ！』

それぞれ料理を盛り付けたトレーをテーブルに置く。

……それにしても、エリオとスバルの食べる量が凄まじい。

「で、質問はなんだ？」

「はい、陸士00部隊についてです」

「うん、それで？」

「私達が知ってる陸士部隊は001からなんです。

それで、どんな部隊なのかお聞きしたくて…」

「ああ、それか。確かに、陸士部隊の部隊識別番号ナンバリングは001から始まる。

それとは別に2桁の部隊識別番号ナンバリングがされている陸士000009部隊は、

対テロ戦闘や実験兵装の試験運用部隊だから

ある程度の人間しかその存在すら知らない。

ちなみに部隊の振り分けは実力で決定される。

ナンバーが00に近いほど戦闘能力の高い部隊という訳さ」

「じゃあ、00部隊って……」

「ああ、全陸士部隊の中でもトップクラスの小隊だ。

まあ、癖の強い連中ばかりだがな」

「今も実験兵装の試験中だったりしますか？」

「ああ、新武装のライフルと軽機関銃、マシンガン

対ゾンダー用の装甲と兵器の最終テスト中だ」

F W達と仲良く話している所に乱入者がやってくる。

「じゃあ、もしかして配備前の装備を見れたりするんですか?!」

「うわっ! ……シャーリーさん、脅かさないでくださいよ!」

「あはは、ごめんねスバル。

で、裕樹さん、装備の方は見えるんですか？」

「…見るだけならな。

まあ、対ゾンダー兵装は六課に実戦配備されるだろうしな」

「わ〜!! 最新型が見れるなんて

」

『(裕樹さん)』

「(どうした？エリオ、キャロ)」

『(どうしてシャーリーさんはあんなにはしゃいでるんでしょうか？)』

「(…俺にも分からん)」

その後、トリップしているシャーリーを放ってデスクワークを始めたのは言うまでも無い。

.....

機動部隊オフィスルーム

さて、今日もバリバリデスクワークだ。

と言っても、ものの数時間で終わるのだが。

そういえば今日は氷竜達に来る日か、整備施設はハイパーツール分も含めて

はやてに確保してもらっているからその心配は無いだろっ。

問題は00部隊の奴らだが

ビィーッ！ビィーッ！

「素粒子Z0大量確認！ゾンダー出現の可能性大！

F W部隊はブリーフィングルームへ急行せよ！繰り返す！」

「スター、各機能チェック！」

<イエス、マイマスター！>

アラート、それもゾンダーの出現を知らせるアラートがなった為、
急いでブリーフィングルームに向かう。

「機動部隊到着！」

『スター、ライトニング両分隊到着しました！』

「早速、状況を確認するで…」

場所は此処、湾岸の石油貯蔵所や。

この辺りは既に人は退避しとるからそっちの心配はしなくてええ
んのやけど…」

「問題は、『そこにある石油がどうなるか』か…」

「そう、この石油は発電用のもんやからおいそれと移す事は出来へ
んし、

そやかて、これが爆発すれば大規模な被害が出てまう」

「下手に戦闘になってドカン！じゃまともに戦えないしな」

「そう、それもや。」

敵の目的が何なのかわからへん事には」

「ゾンダー出現！敵はタンク内の石油を体内に蓄えている模様！制御系が乗っ取られている為、石油の供給が止められません！もし爆発を起こした場合、想定される被害エリアは半径5？！」

「スター、氷竜達は今何処に？」

現在、現場に急行中。私達が到着する頃には到着していると思われます

「機動部隊、出撃するぞ！」

「了解！…市街地周辺飛行許可承認や！」

飛行許可の承認を確認して外に飛び出す。

「スター！ファイナルフュージョン！」

Program Drive

緑色のEMトルネードに包まれ、その姿がガオガイガーへと変わる。

「ガオッツ！ガイッツ！ガーッツ！！」

「ロングアーチより機動01へ、現場周辺にロストログリア反応あり。レリックや無いんやけど、どうもソレに反応して出現した様や。回収のためにスター、ライトニング分隊を出撃させるで」

「こちら機動01、今回は爆発の危険性があるから
ゾンダーを倒すまでは戦闘領域内突入禁止にしてくれ。
それとイレイザーヘッドXLの射出準備も頼む」

「ロングアーチ、了解、ゾンダー反応消失まで戦闘領域外で待機させとく。」

それと、イレイザーヘッドXLの射出準備は完了しとるから
合図さえくれればいつでもいけるで」

「機動01、了解」

そのままブースターとスラスターを吹かし、現場へと急行する。

.....

?????

地下深く、いたる所にある照明の光が無ければ何も見えないと思われる研究所。

その中の1室で白衣の男と秘書と思われる女が会話をしていた。

「ドクター、『ゾンダー』が出現いたしました」

「そうか、では直にあの黒いロボットも姿を現すか。」

..... 此処に攻撃してくる未確認は？」

「はい、先日の大規模進軍の際に襲撃して来たのみで今の所はいません」

「まさか、ガジェットドローンを複製する者が出てくるとは……」

「さらにあちらの方が性能が上ですから……」

「いや、アレの性能限界を遙かに超過する性能を叩き出してるんだ。

……もはや、ガジェットでは太刀打ち出来ないだろう」

「ではどの様に？」

「……今、此処の所在を管理局に知られる訳には行かない。

出来る限りの欺瞞を施し、未確認を管理局に排除させた方がい
いだろう」

「了解しました、ドクター」

そう言っただけの方は部屋を出て行った。

「……スターガオガイガー、あの凄まじい力は一体……」

あの子が巻き込まれていなければいいが……」

白衣の男 ジェイル・スカリエッティ の眩きは、薄暗闇に消えた。

石油貯蔵所

「こいつぁ……迂闊に手出しは出来無そうだな」
手を出した瞬間にドカン！……でしょうね

「ロングアーチより機動01へ、現場の状況はどうや？」

「どうと言っても、最悪としか言いようが無い。
こっちは指を啜えて見えている事しか出来ないんだぞ」

「じゃあ、どないするんや。下手すればそのまま自爆しかねないんやで？」

「とりあえず、氷竜・炎竜が来ない事には」

「お待ちせしました、隊長！」

噂をすれば何とやら、氷竜・炎竜・風龍・雷龍が現場に到着する。

「来たか、みんな！」

「おうよ！最高速で突っ走ってきたぜ！」

「00部隊の皆さんもいます、今は戦域外で待機中ですが」

「そうか…でも、今はコイツを片付けるのが先だ」

『了解！』

…シンメトリカル・ドッキング！』

4体の掛け声と共に、氷竜と炎竜、風龍と雷龍がそれぞれ合体する。足が戻り、胴体部のロックが外れ、ビークルモードの途中まで戻る。クレイン、はしご、ミキサー、バケットが外れ、氷竜と風龍が右、炎竜と雷龍が左でドッキングする。そして、それぞれの武装が腰や腕部に装着される。胸部のアーマーが装着され、2体のロボットが姿を現す。

「超竜神！！」

「撃龍神！！」

「よし…超竜神、撃龍神。」

これからの作戦を伝える。

まず、俺がヘル&ヘヴンで敵のコアを摘出する。

それと同時に超竜神がレーザーヘッドXLで爆発エネルギーを消し去る。

撃龍神は超竜神を後ろから支えて衝撃に備えてくれ」

『了解！』

「機動01よりロングアーチへ、レーザーヘッドXLを射出してくれ！」

「了解！イレイザーヘッドXL………射出！！
現場到着まであと30秒！」

「よし、作戦発動！！」

『おっ……！！』

「頼むぞ、撃龍神」

「任せとけ！！」

「イレイザーヘッドXL、現着！」

「ヘルツ！アンドツ！ヘヴンツ！！
ゲム・ギル・ガン・ゴー・グフオ………ふんっ！！」

「イレイザーヘッドXLツ！！」

「おおおおおおお！！」

「はあああああああつ！！」

「てりやあああああつ！！！！」

『おおおおおおお！！！！』

核を引き抜くと共に超竜神がイレイザーヘッドをゾンダーに打ち込む。

俺が核を引き抜いた直後に爆発を始めた為、俺は後方へ緊急退避。超竜神と撃龍神が爆発を打ち消す為に衝撃に耐える。

そして、弾頭が徐々に消えていき、爆発エネルギーは完全に消去された。

「クーラティオー！」

「テネリタース…コクティオー…サルース…コクトウーラッ！」

前回のゾンダーはジュエルシードがコアとなっていた。

一体今回は何がコアになっているのだろうか。

…ゾンダーメタルはマイナス思念に反応する筈、

そうならば取り憑くのは生命体以外にない筈だが……

「レリック、か……」

「刻印は…？、ですか……」

「どうやらヘル&ヘヴンで封印処理も出来ているようだな」

俺と超竜神、撃龍神で話している所に一台の装甲車が横付けしてくる。

中から出てきたのは00部隊の4人。

「よお、ビックボス。」

「にしても今回の敵じゃあ、G装備は使えなかったなあ……」

「カズ、もう少し敬語を使え。
今日付けで新部隊配属なのだぞ……」

「カスケードの言う通りだ、カズ。
もう少し危機感と言うのを持って」

「…相変わらず手厳しいねえ、カスケにメリー」

「…いや、ぼ、僕もそう思いますよ？」

『勝って兜の緒を締めよ』って言うぐらいですから……」

「うげ、ジヨニーまでそっちに付くのかよ……」

「……お前ら、後で特別メニューだ」

『なっ……り、了解………』

00部隊隊長、カズヒラ＝レナード二等陸尉。

00部隊重火器担当、カスケード＝レインジ二等陸尉。

00部隊狙撃担当、メリ＝リッサ三等陸尉。

00部隊電子戦担当、ジヨニー＝ヘリオス三等陸尉。

この4人が00部隊メンバーだが、先程の会話のようにムラが多々見られる。

戦闘時には出てくる事は無いのでよしとしているが、今は回線が開いている。

つまりは、見事に泥を塗ってくれたというわけだ。

「……00部隊、ロストロギア『レリック』を護送せよ」

『了解!』

装甲車内の多目的ケースにレリックを仕舞い、護送しながら六課へ向かう00部隊。

「俺達はこのまま六課へ直行するぞ」

『了解!』

三体のロボットが緑色のエネルギーラインを残しながら飛び立っていった。

.....

機動六課、機動部隊用ハンガー

今は、既に俺はフュージョニアウトを済ませ、超竜神と撃龍神もシンメトリカルアウト済み。レリックを保安室へと護送していた00部隊も到着した為、簡単な自己紹介をする所だ。

「じゃあ、まずこっちから自己紹介だな」

「了解しました。」

…この度、機動六課機動部隊に所属いたします氷竜です」

「同じく炎竜！ちなみに氷竜とは兄弟だ！」

「同じく風竜で」

「同じく雷竜だ！ちな」

「ちなみに、僕と雷竜は兄弟です」

「……とりあえず、風竜と雷竜、お互いに被せ合っな」

『了解……』

とりあえず、雷竜が被せたのが最初だが、お互いにやったんだから
両成敗だな。

「はあ…じゃあ、00部隊」

『はっ！』

氷竜達とは打って変わり、陸らしい返答を聞いて体を強張らせるF
W達。

真面目な時はいいんだがなあ…

「00部隊隊長、カズヒラ＝レナード二等陸尉であります！」

「同じく重火器担当、カスケード＝レインジ三等陸尉であります！」

「同じく狙撃担当、メリ＝リッサ三等陸尉であります！」

「同じく電子戦担当、ジヨニー＝ヘリオス三等陸尉であります！」

「みんな、自己紹介ありがとう。」

私がこの機動六課の部隊長、八神はやてです」

「私がスターズ分隊長の

」

こんな感じで自己紹介を進めていった訳だが、FW達がさっきのやつで強張ったままで

自己紹介の時に若干噛んでいたのが面白かったな。

「で、00部隊の扱いやけど…」

「ああ、それは機動部隊所属で頼む。」

コールサインは俺から機動01、カズが02、カスケードが03、メリーが04、ジヨニーが05で頼む」

「うん、了解や。」

「じゃあ、早速変えとくな」

「頼む…」

……じゃあ、お前ら武装の整備を始めろ」

「イエス、サー！」

細々した変更事項の確認を終わらせ、早速特別メニューの訓練を始めろ。

内容は至ってシンプル、武装の整備、装備の点検。
テスト武装をバラし、組み立て、今度は目隠しをしてバラし、組み立てる。

このような作業を繰り返すだけ。

ちなみに、この00部隊はこれを10回ほどやっている。
懲りないと言うか、何と言うか……

結局、食堂が閉まるまで特別メニューは続いたらしい。

第十八話「陸士00部隊」（後書き）

裕樹「やっとジェイル登場か」

ジェイル「いやー長かったねえ」

ウーノ「セットで私も出れてなかったですし」

作者「いや、ナンバーズはもっと後に出てくるから恵まれてる方よ？」

裕樹「とりあえず、ホテル・アグスタまでやらないとな」

ジェイル「そこまでいかないと展開は限られるからねえ…」

「という訳で作者、異世界の『裕樹』に会う為に頑張ってるぞ？」

「ギイ…」

IS裕樹「呼んだか？」

「なの裕樹「いや、話はしてたが呼んでは無いぞ？」」

IS裕樹「そうか…」ギイ…

「一同」………」

ジェイル「じゃ、気を取り直していつもの行こうか」

ジェイル「ゾンダーを退け、束の間の休息を味わう機動六課」

作者「そこに聖王教会からの派遣任務が舞い込む」

裕樹「六課メンバーの行き先とは?!」

作者「魔法少女リリカルなのはStrikers 漆黒の守護神
NEXT」

ジェイル「第十九話 派遣任務」

裕樹「次回もこの小説に!」

作者・ジェイル・裕樹「ファイナルフュージョン承認!!!」

ウーノ「お父さん これが勝利の鍵です」

第十九話「派遣任務？」（前書き）

どうも、三ヶ月ぶりのRAGです。

やっぱりなのはの方は更新が遅いですね。

そして派遣任務が長期休暇扱いというハチャメチャストーリー。

そんな感じですが第十九話です。どうぞ！

第十九話「派遣任務」?

早朝、機動六課 食堂

機動六課の食堂は朝早くから開放される。

もちろん、早朝勤務の厨房のスタッフも居るので料理も用意されている。

そんな食堂の片隅に野戦服を着たまま料理を平らげていく4人が居た。

「まったく、昨日は酷い目にあっただぜ……」

「…それはお前のせいだろうが、レナード」

「アンタへのツッコミのせいで私達も連責（連帯責任の略）だったじゃない」

「あと『ビックボス』って言ったのも入っていると入っているかと……」

「ははは…四面楚歌ってか？」

『……………（それ以外に何がある？）』

その間もテーブルいっぱいに広げられている料理は空になっていく。

「モグモグ……あ」

「??どうしたレナード」

「いや、フェンリル達の事伝えてなかったな……と」

『……………（ああ、特別メニューか）』

彼らの予想通り、特別メニューが言い渡されるのもう少し後の話…

……………
……………

シミュレータ前

side 裕樹

シミュレータではなのはがFW陣を鍛え上げ、その光景を俺とヴィー
ータが見ていた。

「あいつらもまあまあいい動きする様になっただな」

「まあ、いつまでも這いつくばったままじゃ困るしな。
ただでさえ指導期間は短いんだ、これからのメニューは
もっと苦しい物になっていくだろうよ」

「そりゃそうだな。」

……どうしたんだ裕樹、顔が険しいぞ」

「ん？……ああ、もっとコミュニケーションをとらないのかと思っ
てな」

「ティアナ達がか？」

「いや、教導官なのはと新人達ティアナ達が、さ」

「確かに、基礎の反復訓練と模擬戦ばつかでほとんど助言がねえよ
な」

「そう、そこだ。ルイキ新人に良くある事だが、

反復訓練の連続、勝てない模擬戦、下手に反抗できない立場……
そんな不満がドンドン積み重なっていったって、いざ実戦って時に無
茶をやらかす。

ソイツが怪我するだけならいいんだが、最悪の場合
他の新人を巻き込んだ死亡事故に繋がる」

「それが起こるかもしれないね………そういう事か？」

「このままの教導を続けていくとそうなる可能性は十分にある。

特に危ないのは　　って、おいおい………」

「おい！いきなり　　なんだありゃ！」

そこには体長が100cmはあろうかという巨躯の銀狼　名前はフ
エンリル　と、

その両肩に乗っている30cm程の鴉　フギンとムニン　がいる。

……確かに連れて来るつもりだったがなぜ今ここにいる？
何も連絡はしてないし、来てもいない。
事前の説明無しに来られると騒ぎになるから連絡を取ると決めていたはずだが……

「おい！てめーらにもんだ！」

「グルルルルル………！」
『カアアア！』

「ヴィータ、俺の関係だ、敵じゃない。
（フェンリル、フギン、ムニン、どついう事だ六課に来るとは聞いていないぞ）」

「グルル………
（あら、六課に来るといふ旨は伝えたはずだけれど）」
『カア………』

「説明はしてくれんだろーな？」

「ああ、まあ………なのは達が来たから一緒にな」

ちらりとシミュレーターの方角を見ると
なのはとFW達が武装したままこっちに向かって来ていた。

……
……

引き続きシミュレータ前、今はフェンリル達の説明のためにはやて達にも集まってもらった所だ。

「わー！おっきいワンちゃん！」

「ちょっと、スバル！犬じゃなくて狼よ！」

「おっきくてかっこいいな！」

『……………』

「……………くきゅっ」

「さて、裕樹君？

全員そろった事やし、そろそろ説明してもらえるか？」

「そうだな。

まず、でかい銀色の狼がフェンリル、その肩に乗ってるのがフギンとムニンだ。

本来なら説明をしてからこっちに来る筈だったんだが、

どっかの馬鹿者共が連絡を忘れてた所為でこんな形になった。

あまりふざけたりすると嘔み付くが、撫でたりするくらいなら何もしないから

仲良くして欲しい。以上、説明終わり」

「ガウツ！」

『カア！』

俺の説明が終わると3匹が「よろしく」と言う意味で軽く声を出す。どうやらみんなにも通じたらしく、1人1人撫でてまた元の位置に戻った。

「説明は今のだけか？」

「ああ、そうだよ」

「ほな、ひとまず解散。朝食食べた後でウチから連絡する事があるから、

隊長陣はブリーフィングルームに全員集合な？」

『はいっ！』

『了解』

.....

機動六課 ブリーフィングルーム

食事を終え、なのは、フェイト、シグナム、ヴィータ、裕樹の5人はブリーフィングルームへと来ていた。

先程はやてが言っていた「連絡する事」を聞く為である。

「さて、着いたわけだが」

「はやてちゃんがないね」

「何処行ったんだろう、はやて……」

なのは達3人は少し話をしているが、シグナムとヴィータは黙って待っている。

1分程して、ドアの開く音と共にはやてがブリーフィングルームに入ってくる。

「おまたせ、早速やけど本題に入ろうか」

「隊長陣にあらかじめ話を通すって事は、派遣搜索か？」

「そや。」

聖王教会から『ロストロギアの派遣搜索及び回収』の依頼があったんやけど、

何処の課も手が回らへんっちゅー事と、

そのロストロギアがレリックかもって事で六課が引き受ける事になったんや。

「……………裕樹君、教会がらみやからってそない嫌な顔せえへんとい
て」

「……………聖王教会が嫌いって訳じゃないがな」

はやてのツッコミにしかめっ面だった顔を戻しながら裕樹が答える。

「まあ、今回はカリムがどうこうやないから安心しといてな？」

「…了解」

「はやてちゃん、派遣搜索する場所はどこなのかな？」

「良くぞ聞いてくれました！今回の派遣先は」

派遣先を言うかと思いきや、かなり長く溜めだすはやて。
5人からは冷ややかな目線が送られている。

「第97管理外世界『地球』 日本地区海鳴市や！」

「第97管理外世界つて……」

「え？私達が居た海鳴市?!」

「そやで〜！」

「任務で地球に行く事になるなんて……」

「（地球か！久しぶりだな、シグナム!）」

「（そうだな、久しく通っていなかったからな）」

「はいはい、まだ続きがあるから最後まで聞いてな？」

『了解』

「今回の派遣任務にはもう一つの目的があるんや」

「もう一つの目的？」

「何なんだ？はやて」

「それはな………有給消化や」

「有給……」

「消化……ですか」

「せや。特に高町なのは一等空尉と斉藤裕樹一等陸尉、この2人は絶対参加や」

「ふええっ?! わ、わたし?」

「……そうか、派遣任務に際した一時的な任務の引継ぎに地上部隊が応じたのはそれが理由か」

「2人共、全くと言って良いほど有給使ってへんし、裕樹君に至っては週2の休みすら地上本部のデバイス開発室に入り浸って新式のデバイスの開発してたらしいやんか?」

「ええ?! 裕樹さん、休みも仕事してたの?!」

「流石にマズイよ、裕樹……」

「おめー、どんだけ無茶してんだよ……」

「流石に、見過ごせんな?」

「し、仕方ないだろう? 趣味がデバイス製作・修理なんだからよ。それに、地上本部の武装局員と魔導士の戦力増強の意味合いもあるし」

4人から責められ、ブツブツと呟く裕樹。

その光景を見てはやてはなのはを弄っていく事にした。

「それを言うならなのはちゃんも休日に教導関係の事はつかやっ
たらしいやんか。」

裕樹さんの事言えへんとちゃうん？」

「うっ……に、にやはは……」

「まあ、とにかく」

『派遣任務ついでに該当メンバーの有給を消費します』って言っ
たら

地上本部から任務一時引継ぎとFW達の分の許可も貰えたからバ
カンス半分や」

「地上本部があっさり許可を出すとは、

いったい斉藤はどれだけ有給を溜めていたのだ……」

「確かに、それは気になるな。

はやて、その所はどーなの？」

「……開示してもらった過去2年間は有給は消費してなかったで？」

『……………』

……………

兵員輸送用ヘリ 待機室内

機動六課の前線メンバー達とはやて、リイン、シャマルは転送ポートへ行くために、

兵員輸送用ヘリに乗って移動している。

転送ポートのある場所まではそこそこの距離があり、かなり退屈なのでティアナ達4人は地球について下調べをすることにした。

現在、検索して出てきた情報を大き目のモニターに出して4人で見ている。

「第97管理外世界文化レベルB……」

「魔法文化無し、次元移動手段無し……って、魔法文化無いの!」

キャラがモニタを見ながら呟き、ティアナは魔法文化が無いことに驚きを隠さない。

「うん、無いよ。うちのお父さんも魔力ゼロだし」

ティアナのスバルは当然のように答える。

「スバルさん、お母さん似なんですよね?」

「うん!」

「いや…なんでそんな世界から、なのはさんや八神部隊長みたいなS+ランク魔導士が…」

「突然変異というか、たまたま…な感じかな?」

ティアナが後ろからの声に振り向くと、そこにははやてがいた。

「へ、あ、すみません！」

「ええんよ、別に」

はやてに続き、なのはも話の輪に入ってくる。

「私も、はやて隊長も魔法と出会ったのも偶然だしね」

「な？」

「へ、そうだったんですか」

「そういえば裕樹さんも海鳴出身なの？」

退屈で眠りそうになっていた裕樹になのはが問いかける。

「ふああ……ん？」

ああ、俺は内陸県の方の生まれで、色々あつて海鳴へ着いたのさ」

「じゃあ、裕樹さんがあそこに居たのも偶然？」

「ジュエルシードの力を嗅ぎ付けたゾンダーを追って海鳴に着いたから……」

「……まあ、偶然か」

「その偶然のおかげで私達はここに居るんだよね」

「こっちは何時お前らがゾンダーに取り込まれるか冷や冷や物だっ

ただどな。

それより、そろそろポートに着くが、リインはそのままなのか？」

「あ、そやったわ。シャマル、リインの服出したげて」

「そういつと思ってました はい、リインちゃん」

「シャマルありがとうございます」。

それじゃあ、早速……システムスイッチ、アウトフレームフルサイズ！」

リインがそう口にするや否や、その体がまばゆい光に包まれる。

光が消えると、そこにはエリオ達ぐらいのサイズになったリインが居た。

「っと、一応このぐらいのサイズにはなれるですよ」

「でかつ！」

「いや、それでもちっちゃいけど」

「普通の女の子サイズですね」

「まあ、地球には妖精や小人の類は存在していないからな。こうしとかないと色々厄介なことになる」

「一応、ミッドにもいないと思いますけどね」

「エリオやキャロと同じぐらいでしょうが」

「ですね」

「リインさん可愛いです!」

「裕樹さん、おつきくなった私はどうですか?」

「可愛いぞ」

「わ〜い!ありがとうございます〜!」

はしゃぐリインの頭を撫でて動きを止める。一応、へりの中だからな。

「えへへ〜、掌で撫でて貰うのもキモチイいです」

(ええなあ…ウチも頭撫でて欲しいわ)

(私もして欲しいけど…流石にティアナ達の前じゃ…)

(リイン気持ちよさそう…)

リインの発言を聞いて羨ましいような、恨めしいような視線を向ける3人。

その視線を見ないようにしながらヴォルケンリッターの3人(ザフイーラは留守番)は

リインの事について念話で話していた。

「(しかし、リインはよく裕樹に甘えるのな)」

「(恐らく、^{初代}アインスの記憶が根底にあるのだろう)」

「(確かに、アインスは裕樹の事を気に掛けていましたからね)」

「（まあ、それはアタシらの勘違いかも知れねーけどな）」

「（それもそうだが……そろそろ時間か、主と共に降りる準備を）」

『了解』

「八神部隊長、そろそろ」

「うん、ほんならなのは隊長、フェイト隊長、私と副隊長達はちよい寄る所があるから」

「うん、先に現地入りしとくね」

『お疲れ様です』

「ほんなら、いこか？」

『了解』

「気をつけてな」

「ああ、行ってくる」

ヴィータがそう応じた次の瞬間、

4人はポートの発する甲高い音と強い光と共に掻き消えた。

「それじゃ、皆行こっか？」

「うん」

「だな」

『はい！』

なのはの確認に応じると共に、俺達も強い光に包まれ地球に転移した。

第十九話「派遣任務？」（後書き）

裕樹「くそっ！人事部めえ……」

はやて「いや、元々休んでへん裕樹君の所為やって」

なのは「でも、わざわざ海鳴市じゃなくても……」

フェイト「クラナガンで休暇中の局員達に見られるより

いいんじゃないかな？」

はやて「フェイトちゃん、なにするつもりやねん……」

作者「皆、そろそろ、終わろっか？」

次回も「魔法少女リリカルなのはStrikers」漆黒の守護
神」に

ファイナルフュージョン承認！

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7014m/>

魔法少女リリカルなのはStrikerS ~ 漆黒の守護神 ~

2011年10月16日09時00分発行